最後の審判より希望の星へ

天国の証（あかし）

稚乃裕子編著

これは仮空の物語りではない。筆者の霊能力を駆使して得た真の神々による地球の危機の啓示、現代社会での宗教人のあり方、ならびに子供達の宗教教育の是非を問うものである

天国の証（あかし）　インターネット公開版
昭和53年 8月10日　第 1版第 6刷
平成 3年 3月24日　第 2版第 6刷
著　者　　稚　乃　裕　子

平成17年 4月15日　電子書籍作成
平成18年 1月 3日　最終更新日
作成者　エルアール出版
（旧ジェイアイ出版）

©千乃裕子 1978-2006 ALL Rights Reserved
無断引用・転載を禁ず

はしがき

一九七六年、おととしの暮より編者自身が体験した不思議な事件により、霊能を持つようになり、それに引き続き、高橋信次先生という一昨年の六月に他界された方の霊や、今までぼんやりとその存在を意識していた天国の方々がやはり霊として近づき、私を導かれ、その天国の構造や神々の存在、霊魂というものは一体何かということを克明に教えて頂きました。

そしてイエス様やブッタ様、モーセ様や天使、大天使と言われる方々とも、親しくお話しすることが出来るようになりました。

それらの方々は、高橋信次先生が御在世の折りに身近にあって、布教の助けをなさり、また守護の役目もされたのです。

その後、生前の高橋信次先生に導かれて同じ教えを広めていられた方々の御協力も得て、それら私のはじめて知る教えとこの不思議な出来事や、それに伴う種々の奇跡をまとめ、同じく霊能を持つ高校生の助力の下に、『天国の扉』という題名で一冊の本にして、昨年の暮に出版致しました。

その本が大変好評で、多くの読者から熱意と賛意あふれるお便りを頂き、第二巻目も書くよう励ましを頂いたので、心から感謝すると共に、ここに再び、私のその後得た資料をまとめて本に致しました。

これは天国と地上の接点とも考えて頂きたく、私はいろいろな四次元と三次元の絡み合う出来事を正しく、出来るだけ真実のものをと配慮し、編纂させて頂いたのです。

天国からの霊が証される、信じ難いような事柄がすべて現実に起りつつあり、また起った事柄で、先頃まで霊魂であった高橋信次先生に関する悲しい結末とその原因を述べるため、私が用意しておりました原稿は加えずに、ただ編纂するのみとなりました。

それ故前半は高橋信次先生にまつわる悲劇と鎮魂の書でもあります。

しかし後半の章では、イエス様やブッタ様のそれぞれの章からなるお話を載せさせて頂き、その中ではお子様をお持ちのお父様方お母様方のために、徳育と教育および宗教問題をどう取り扱うかとい

うことについて述べて頂きました。

また前記の高校生達（前の書で載せる予定でしたが、紙面の都合上、その時は遠慮して頂きました）が、今度は未来をになうものの新鮮な希望と智慧を伝える文を書いて下さり、天国の方々の絵も霊能で見て、素人ですが、土田展子さんと私が描き、載せました。大天使方の詩もあわせて天国の横顔を御紹介申し上げるためです。第三巻、第四巻と天上の書のシリーズとして毎年出す予定ですが、目的とするところは世界の平和であり、三次元と四次元が協力し合って真の理想の世界をこの地上に築くことなのです。これは三千五百年前のギリシャの時代から人々が目指して来たことながらそれを邪魔するものも多く、実に多くの人々が挫折してきました。やっと黎明期に辿りつき、実現への希望の星が輝き始めたようです。

この原稿を書き終えた時、四月十四日に岡山市で第一巻の時と同じ、月の周囲に大きな円形の虹が出ました。五千米ほど上空で内側から赤で始まり、外側が紫の第二次の虹です。

この天上の書のシリーズが真実のものであることの証（あかし）のために、毎回原稿を書き終える度に、あるいは何かの啓示が必要となる時、奇跡として出して頂くそうです。時間は九時少し過ぎから一時間ばかりでした。昨年は夜半十二時半以降でしたので、果して天国の奇跡かと疑われ、違った時間に、違

った情況でこれからは出してゆかれるとのことでした。

その他には天上界の証として、『天国の扉』の読者で菩薩界以上の合体霊の方に、心の浄化された方々のみ二十名程から、本をくり返し読むうちに金粉が汗と共に出るようになったとの報告がありました。

それからもう一つ、私の愛猫でアビシニヤ猫の混血がおりますが、(『天国の扉』第一章参照) それが二ミリ角の銀粉を出しました。

五月頃の気候のような暖かい日が、丁度岡山に虹が出た頃に二日続き、手足の裏が汗ばんだのか、ふと見ると毛のところについていました。汗をなめた舌でなめたので付いたのでしょう。天国の方に猫から出たものだと証明して頂いたので、大切に取ってあります。

人間の金粉や銀粉は珍しくなくなりましたが、動物は初めてなので、本当にびっくりしました。

こういった霊能力、霊現象、奇跡については、一部の精神医学や心理学の専門家が催眠現象だとか暗示だとか、潜在意識の活動だと警告し、病める精神活動の研究のみ、あるいは形而上学的心理探究のみのデータを体系づけて、一方的に安易に結論を出し、理解の範疇を越えるものには目をつむるという傾向も見られますが、私が素人でありながら、五年以内に出そうと手掛けておりますもので〝物

理学上の謎の解明〃は広範囲すぎて一部の解明を除いてはやはり推論の域を出ないし、将来の科学の発展を待たねばなりませんが、〃奇跡（超物理学上の謎）の解明〃があります。これは物理学上の原理の解明と同じで、専門知識を備え、物理的手段を実際に用いて奇跡を行なってみせられる天国の高次元の霊の御助言と解釈なしには出来ない、ということをあえて提示し、霊の実在に関する証明としたい、またそういった霊の存在を否定する方々に是非読んで頂きたいと思っております。

御寄稿をお願いした高校生達、勉強の余暇に出来るだけの時間と労力をさいてお手伝い下さった土田展子さんに、心からの感謝を捧げます。

一九七八年四月　　編著者

◈目　次◈

はしがき……1
（最後の審判）
第一章　ミカエルの章……14
ミカエル大天使長　14
高橋信次氏の失脚　20
GLA外部の混乱　29

後継者 35
メッセージ 42
第二章 エル・ランティ（エホバ）の章……53
第三章 天使の章……72
ラファエル大天使 72
ガブリエル大天使 79
ラグエル大天使 87
パヌエル大天使 96
ウリエル大天使 107
サリエル大天使 112
七月からの新宇宙界・太陽界（図解） 120
（希望の星へ）

第四章　イエス・キリストの章……122
第五章　ブッタの章……140
第六章　高校生の章……156
土田展子　156
川上恵子　167
本原歌子　181
第七章　天使の詩集……191
天上界の人々のプロフィルと妖精達（さし絵）
永遠　ガブリエル　191
天使の誓い　ガブリエル　194
無題　パヌエル　198
光　パヌエル　201
日時計　ウリエル　204

カナリヤ　ウリエル　206
追想　ラファエル　211
ミカエル大王賛歌　ラファエル　214
幻想　ミカエル　216
二十一世紀　ミカエル　219
天の羊飼い　テリエル　225
救い　ラグエル　228
蘇えり　テリエル　230
若き人々に励ましの言葉　ラファエル　232
×　×　×　×　×
禁中御法度　土田展子　234
使命　稚乃裕子　236
天上界の人々の血液型と生年月日　240

第八章　正法及び用語解説　稚乃裕子……242
正法の歴史　242
用語解説　256
受胎告知256　メシヤ257　三位一体257　聖霊257
ヨハネ黙示録258　末法の世258　ヘブル語258
ユートピア258　釈迦牟尼仏258　釈迦如来258
阿弥陀如来258　釈尊258　如来258　苦行僧258
死霊258　怨霊258　死者の霊258　聖域259　不浄
域259　ダルマ259　御利益宗教259　世襲的259
仏典259　経典259　密教259　生神様260　衆生の
済度260　アスラー（阿修羅）260　涅槃の境地
260　勤行260　題目260　即身成仏261　禅261　ヨ
ーガ261　止観262
本体・分身の表　264

目次

解説……283

挿絵・デッサン　土田展子

水彩　稚乃裕子

〈最後の審判〉

神の声を聞き、神を見しものが、盲いて、光に歩まず、
ついには離れゆく時、天は涙す。
生まれしときより慈しみ育てし人が、その手を離るる時、
天使は悲しみに憂う。
神は人々と共に喜び、憂い、苦しみ、歎き給うた。
その果しなき年月を一顧だにせず、
人は神を見棄てんか。神の子である人は。
苦しみの時、悲しみの時求めた神は
いつも救いの手を伸べて側に居給うた。
その愛深き神を棄てて、人は何処へ行かんとするか。
人々よ、悪に魂を委ねんと志し居るか。
神の声を聞けと、天の使いは呼びかけ給う。
自ずから伸べられし手をつかみ、救われよと——

稚乃裕子

第一章　ミカエルの章

ミカエル大天使長（天使の長）

私は再びこの巻にて私の信ずるところを述べ、世の人々の注意と関心を呼び覚したく思います。

最近、にわかに霊能者が増え、また〝我はキリストなり〟と言わんばかりの救世主ぶる人々が各宗教宗派に現われておりますが、これは末法の世を救わんとして天上より降り、人間と合体した菩薩界の方々自身が種々の奇跡を表す能力を与えられ、その奇跡により、合体された人々が世人の耳目を集め、したがって尊敬と崇拝の念をもって遇される――その度重なりにより次第に増上慢の心が湧き、

次いでは合体霊である菩薩界の方々までが慢心という罠に陥り、あたかも自分の合体した人物が救世主であるかのごとく錯覚する――という奇妙な事態が生じているのです。

当然の結果として合体霊の意識を映じた合体者、すなわちこの世の善男、善女は、御自分がその奇跡を行ない人の尊敬を一身に集める霊的能力があるかのごとく錯覚し、またそのごとく振舞う。これは菩薩界の霊の合体者のみに現われる現象です。

魂の修業の中で、菩薩というのは総じて衆生済度、心の浄化、己れを捨て他に尽くす、ということを目指し、男性は、普通ならば競争の激しい社会で己れに厳しくそれをなす。女性は反面、本質的に母性本能を具備せるものとして自己犠牲が容易で、さしたる努力なしに行ない得る。すなわち自己に対する克己心において、魂の厳しさ徳の高さにおいて、男性に劣るのです。そして試みに対し脆くつまずき易いところがあり（男性の中にも似たような質の差はありますが）そういった練り鍛えられない人格は誘惑に対して弱いところがあるのです。人の一生のみならず、永遠の時の経過にも起こり得ることです。

かくして、菩薩として人に崇められ一生を送り天上界に上ったものも、あるいは運がその人に天上にて栄誉を与えたものも、その生涯には心浄く、使命を全うして彼岸に来た方々なのですが、転生や

永遠の年月を重ねるうち、その緊張した心が、人と合体して三次元の栄光を浴び、あるいは合体せずとも、その霊言がいかなる種類であろうとも珍重され、無条件に受け入れられる時、〝我はかくの如く意識高く、この手にて衆生済度も可能ならん〟といった天狗界の心が出て来るのです。

これは日蓮上人にも当てはまるものであり、また新興宗教でなくとも割合に長い歴史を持った宗派、仏教の流れを汲むものも汲まぬものも、等しくまたその始祖、教祖の態度に見受けられます。合体霊、合体者が共に増長するのです。

もちろん『天国の扉』（未来への幸せをめざして）に書かれているＧＬＡ教祖、高橋信次様の御息女すなわち、私の名を詐称しミカエル佳子と名乗る人物にも当てはまります。

仰言ることを拝聴致しますと、成程立派なことを述べていられますが、いろいろと勉強なさったことに高橋信次様の説かれたことを加えられたものであったり、あるいはサタンに意識を支配されて正法反対派にまわり、正法を説く必要なしと主張されたり、そしてそれがあたかも私の言葉でもあるかのごとく威厳を以て語られ、講演されるのです。若い女性ですから私も遠慮致しておりましたが、あたりに人無きがごとき振舞いと、天上界の警告を無視しての暴走振りに、私はもはやこれ以上黙していることは出来なくなりました。菩薩界出身の卑弥呼の霊と合体し、その本体であるというだけで

ありながら、世を救い地球を救うという大いなる自信と、その無軌道振りは天上界の怒りを買い、破滅に追いやられたのです。

何故にこのごとき自信を継続し得たか。それは長らく天上界においても謎でした。

私は読まれる方々に理解して頂くため、どのようなことが起こったのか説明しなければなりません。三次元と四次元の混乱を説明するため、人間の立場に立って申さねばならぬのです。

そして明らかになったのは次のような事柄でした。

天上界の声明書でもある天上の書の第一巻『天国の扉』において、私および高橋信次様ははっきりと御息女の誤りを指摘し、その反省と行ないを改めることを勧告致しました。たとえ親子であるとはいえ、高橋信次様は御息女の言動について、世を惑わすものであれば出来得る限りのことをなし、その反省を意識を通して求め、また囲りの人々をして呼びかけ、間違いに気付かせねばならぬよう指示を与えられていたのです。六万の会員および上層部が悪霊に憑依され嘲弄され、愚行を強いられようと、高橋信次様はお嬢様の守護霊となって、御自分の過ちを気付かせるようにといかなることをも成し得る能力を与えられていました。

しかし『天国の扉』が昨年十二月に出版されてより三ヵ月以上を経ても、なおもミカエル佳子とし

ての体面は保たれ、あまつさえ、高橋信次様の遺稿を用いて第三巻目を聖書の最新の解説であるかのごとく捏造（ねつぞう）して、キリスト教に因む表題をつける。

なるほどこの続篇の第一巻目、地獄篇と題されたものは、私が導き書いて頂くため、種々の事柄をお教え致しました。そのため天上の書と申して差支えないでしょう。そして光に溢れ、病いをも癒すことが出来ました。

これはしかしミカエル佳子嬢の手になる著書ではありません。会員の一人である流行推理作家が著したもので、第二巻目も第一巻目の成功を得て同じ著者の手でミカエル佳子嬢のお話を元に作成されましたが、これははっきりとサタンがその息吹きを吹き込み、その波動を光の代りに流しました。

読む者すべてがサタンの憑依に遭ったのです。

その時はＧＬＡの名声を失なうまいとする執着と権勢欲のため、ミカエル佳子嬢以下すべての会員が天上界に見放され、一人高橋信次様が守護を全うするものとして側におり、何の手段を用いても、その誤りに気付くべく働きかけよと命ぜられていました。

それが今日四月初日に至るまでミカエル佳子嬢は健在で、しかも再びＧ会はその手を広げんと種々の三次元的手段を用い、何も知らされていない会員や、世人には、あたかも天の啓示によってことを

行なうかのごとく見せかけているのです。

外部にありながらそれに追従する者もありGLA賛美の書を三巻の続き物として著し、私達の擁護する大天使サリエルを、かつては悪の化身として地獄の王となったルシファー（ルシフェル）の魂の兄弟であると述べ、読む人にこの天上界が悪霊と通ずるものであるかのごとく印象を与えました。そしてその企みのための断罪を受けました。

この者は宮田直子という、マヤ夫人であると名乗る女性霊能者の霊示によって、旧約聖書に現われたノアの本体であると知らされた渡辺泰男氏で、その霊能者の口より出ずる言葉のみを信じ、己れの意識の高さを誤信し、歴史を操るがごとく高慢の心を以て、迫害を受け追い出されたG会の賛美ならびに追従の書を著しました。

私達は『天国の扉』の中でその過ちを勧告し知らせるため宮田直子の合体霊はマヤ夫人ではないことを明示し、この女性霊能者との交流をそのまま記述し、その霊言の内容をただ神秘と謎の連りでありながら何か大きな予言を含む天上の啓示であるとする著者に反省を求めたのです。天上界より宮田氏に通信をしたマヤ夫人も、この霊能者の地位を高めて世人の注目を引きGLAの繁栄を計っていたという事実が明らかになりました。

（その当時ＧＬＡは私達天上界の擁護の下にありました。そしてマヤ夫人という菩薩界の霊は天上界の監視下にあった訳ではないので、霊示と称して独自の言を吐いていました。もちろん天上界が指示したものではありませんが、悪霊憑依による霊言でないことは確かです。しかし事実とは全く裏腹の虚言とも申すべきもので、明らかになったその内容の意外さに、マヤ夫人はやはり天上界の譴責（けんせき）を受けました。）

それはＧ会が混乱期を迎える以前のことで、ひとえにＧ会のミカエル佳子嬢の位置を高めるものでもありました。サタンに操られた卑弥呼とマヤ夫人との協力においてなされたのです。しかも時期は高橋信次様の死後三ヵ月目でありました。

高橋信次氏の失脚

私およびエル・ランティ様はこのことに関しても高橋信次氏に過ちを追及し、訂正することを命じました。

しかしその頃からGLA存続と御息女の健在を願うこの方は、完全にその生前の徳の高さを忘却し、三次元の執着に憑依する憑依霊と同質のものとなってしまわれたのです。

その心は後に悪霊と化したのでしょう。同じ天上界にありながら、私およびエル・ランティ様は今日に至るまで高橋信次氏の計略のすべてを見抜けませんでした。

親と子の執着、己れの財を投じたG会存続への執着、そして己れを慕うG会内外の人々および著書の読者を失なうことへの恐れと、己れの名声、それに連る我が子のこの世的な名声と地位を守らねばならぬ、これも悪霊、憑依霊に共通せる心であり、執念でした。

そしてその後も天上界の理解ある慈悲の許しを感謝することなく、それに乗じてありとあらゆる方法を用い、再び裏面にて私達を欺き、天上の書である『天国の扉』を普及させることおよび読者の行動、意志をも阻害し続けたのです。

天上界の反逆者としてその行動と計略の一つ一つが明らかとなり、遂に私達はこの四月二日未明、天上において高橋信次氏を消滅しなければなりませんでした。

天上界の意志にしたがわぬものは、高次元の霊と言えどもこのような裁きにあうことがあるのです。死の裁き、すなわち永遠の生命を奪われ、この宇宙に存在しなくなること。これが私達が消滅と

呼ぶものです。

これは今、この世および天上におけるすべての者が、もちろん私達高次元の者をも含めて、最後の審判の下にあるからなのです。

すべて生ける者も死せる者も、その生前になしたことおよび死後の行ないを秤にかけ裁かれています。

今こそ最後の審判の時なのです。すべての人が行ないを改め、天上の光を浴び『天国の扉』で説かれたごとくユートピア建設に協力すべき時なのです。何故にかは同書の中ですでに説明致しました。

さてここにおいて私が皆様に改めて勧告し、同時に宣言致さねばならぬのは、高橋信次氏の断罪はなんら不当な理由においてなされたのではなく、正しい判断と情状酌量の下にある期間執行猶予を与えた上で取られた処置だということです。

それについて地上よりの高橋信次氏を慕う人々の疑問と悲歎の声が上るでしょう。

しかし今は最後の審判の時であることを忘れてはなりません。

そういったメシヤ崇拝に引き続いて、救世主として資格を失なった方にいつまでも人類救済の夢を持つことは愚かなことであり、天上界の望むところではないのです。

マヤ夫人にしても、ブッタ様をお生みになられた方というだけで、三次元であれほどの信頼と尊敬を得ておられました。魂の修業が果して出来ている方かどうかも解らない先に、ブッタ様との繋りにおいてお母様であるということだけで無条件の崇拝を得ていたのです。

ところが天上界では、人間愛を説きながら、七〇年前の昔より軽挙妄動の数々が五、六十回もあり、いつも叱責を受けていられたので、天上界の計画に反抗的であったのでしょう。

今この方は天上界にて日蓮上人と同じく謹慎を命ぜられております。日蓮上人は日蓮様を唯一の衆生済度の仏とする宗派が続く限り、他の権威ある天上界の方々を認めぬ限り、許されぬでしょう。

もう少しいろいろなことを皆様は知らねばなりません。それが作り上げた虚像の崇拝であるか、偶像化された救世主であるか、教祖であるか。その人個人個人の語る言葉において尊敬に値する人物であるか、そうでないか。徳が心に沁み入る真実の言であるかどうか。

通り一辺の道徳論や、哲学論のうわべのものだけで人々に神の真理を伝える者とはなりません。

そのためには光を伴わねばならないのです。光の言葉でなくてはなりません。

その光の言葉は天上の霊に守られて、人々の心を満し、心を強く打つものがあり、聞く人は何か神の与え給うた使命を遂行しなければならぬという意識に目覚めるのです。

その使命感が天上界の善霊の共感と加護を得て、いつまでも持続するのが必要なのです。

もちろんそこには何ら虚偽とごまかしがあろうはずはなく、追及を度重ねても、やはり天上のものであるという証明が私達の手でなされるはずなのです。

その証明がなされなくなった時そこには神はもはや無く、天上よりの光も無く、善霊の加護もなく、私達に見放された群衆に媚び、あるいは瞞着する宗教家、聖職者および教祖などが詐欺師のように横行し、悪霊の助けを得てこの世を地獄と化すために繁栄するのです。

そして再びこの世は闇となり、天上界よりの光は遠ざかり、人々は地獄の日々と運命に操られ、ただ苦しみを耐えるのみに終るのです。――戦争、宗教者の受難の時代、文明の暗黒時代などがそれに当り、人々が精神的余裕とうるおいの心を忘れた時、自然破壊、人類の滅亡、そして地球は崩壊へと向うのです。結果は明らかです。

高橋信次氏を通して私達はそう警告致しました。そしてその死と共に、高橋信次氏の誤った継承者の発表が残され、同氏に捧げた人々の献身は迷路に入り込み、再び魔の跳梁は激しく、この世の滅亡を求めて荒れ狂ったのです。

そして天上界は遂に決意し、その正しい後継者である稚乃裕子様に、私達の真意と方針を三次元の

方に知らしむべく、『天国の扉』を編纂、執筆して頂いたのです。
いろいろな四次元の妨害がありながら、出版が現実のものとなった時の私達の喜びをよそに、サタンは第二の計画を練りました。
このサタンは第一巻目の書で私達が滅したと発表したベー・エルデ星より飛来したサタン夫婦で、あまりの能力のゆえに私達と力を互角にし、戦いの決着のつかぬままGLAに逃げ込みそこを彼等の居城とし拠点としていたのです。これは徒らに世間を騒がせぬため、また稚乃裕子様を恐怖に陥れぬため、私達が秘していました。
彼らはその天上の光を齎す書を世に広めぬためあらゆる手段を用い、策略を弄しました。
高橋信次氏の偽我がその領域を広げていったのもこの時からです。巧妙に私達と共に働き、G会に自己の実在を知らしむべく外部から呼びかけ、私達の書に一章を費して声明を出しながら、裏側ではサタンとは別に善霊を用いてミカエル佳子嬢擁護GLA幇助（ほうじょ）に廻ったのです。
G会が正しい言葉に耳を傾け、自粛（じしゅく）すれば天上界はG会存続を再考したでしょう。
しかしその気配もなく、あくまでミカエル佳子を教祖とするこの新宗派は偽の霊示（サタンによるもの）を出し、作り上げた神話を、著作を通じて発表しました。

そして稚乃裕子様はサタンと高橋信次氏の謀略により、すべての道を閉ざされんとしたのです。すなわちサタンに率いられる悪霊の配下の襲撃が今年の二月に二度行なわれ、その身を傷つけられて、私達七大天使ならびにエル・ランティ様、イエス様、ブッタ様、モーセ様がお守りし、お癒し申しましたが、一方昨年の二月からの高橋信次の働きかけで三次元からの妨害も一際（ひときわ）激しく、中野裕道氏をして、早くもその年の十二月後半に天上界の書が疑わしいとまで発表せしめ、あまつさえ、私達のメッセージを独断で彼の主宰せる日本神学誌から閉め出しました。

それまでに私達の送っていたメッセージには『天国の扉』が正当な善霊の手になる天上の書であることを知らせる、重要なものが多く盛り込まれてあったのです。

神の啓示を人間一個の独断で握り潰すとは、何と無鉄砲で怖れを知らぬ人なのでしょう。

私達は、かつてイエス様の十字架上の死とアガペー（神の愛）により人々の罪は許された、と聖書に録されてあるごとくに世に知らしめましたが、再び罪を犯し、神に背反し、その愛と犠牲と許しを忘れた忘恩の徒には、この世もあの世をも含めて最終的な裁きが下るであろう。それはイエス・キリストによる最後の審判という形で齎されるであろうことを予言致しました。

そして遂にその審判が中野氏という天上界より権威を与えられたものの天上界への裏切りの時より

始められたのです。

それはヨハネによる黙示のごとく天変地異を伴うものでなく、二月初旬の四次元におけるサタンと天上界との死闘の少し前に静かに始められ、今後も継続し行なわれてゆくものなのです。

私達が百雷を鳴らせば、自然破壊がそれだけ大きくなります。それゆえ、予言に反し静かな審判を行なうことに決定し、実行に移しているのです。

この四月に入り、死者の裁きはようやく終りました。

天上界において最高権威者と高次元の決意に反するものは今後も断罪を受け続けるでしょう。しかしそれは天上界における個々の刑罰です。

生ける者の最後の審判は後五ヵ月間は行なわれます。〔しかし終らなければ（背反者が続出すれば）来年も再来年も続けられるでしょう。〕そして二十二年後の二十一世紀の幕明けを控えて、新しき神の国への備えがなされ、子供達の相応しき人格と魂を養う教育と徳育の時が始まるのです。

そこには醜き者、汚れたる者、偽我を持てる者、己れを知らぬ者、傲慢なる者、暗きを好み闇を愛する者、肉欲に溺れ、情欲のとりこになる者、愚かなる者、理由なく殺す者、破壊する者、盗む者、虚言を吐く者、足ることを知らぬ者、権力を愛し、弱者を強者が支配するそのような思想を持つ者は

許されず、また住むことの出来ぬ時代となるでしょう。明るく、公正で、柔和で、謙譲な人々が合理的で賢明な生き方を愛し、互いに愛と尊敬を以て助け合い、支え合う、そして光の中を歩む神の国が地上に築かれるでしょう。次の世代がUFOを駆使して、宇宙空間を天駆けるかも知れません。

その黎明の時が今なのです。希望の星ヴィーナスが夜明けを知らせる時、人々の魂はまだ目覚めず、やがて神の栄光と恵みが眩しく光り輝く一日が始まる時、地球は新しき世紀を迎えるのです。

これは私達天上よりの末法の世を浄化し、地上に神の国の到来を迎えるための人々に与えられた試練の時でもあるのです。

再びさんさんと日光が降り注ぐ時、悪の息吹きは消え失せ、いままでの悪夢は忘れ去られるでしょう。その中で可愛い、潑溂とした若き世代が両親の苦悩を養分とし、その愛と守護の手で怖れを知ることなく、若木のようにすくすくと明るく伸び育つのです。

また子を持つ親としての使命は、私達の警告を聞き、子を守り育てること、私達天上のものの言葉に耳を傾け、人間としての責任と義務の一端として天より与えられた宝ともなる可愛い小さな天使達を正しく導き、育ててゆくことなのです。

神の国に住む資格を持つものとして、またそれに相応しい人格を持つ者として。

GLA外部の混乱

次に高橋信次氏を慕い、悲しんでいられる方々のためにもう一度つけ加えますが、同氏の功績について天上界は充分に知っております。

この国日本では高橋信次氏の熱意ある活動により、正法伝播が速かに行なわれ、その90%が地獄に落ちることを同氏在世の折りに申しましたが、同氏の助力も得てそれを三年前より五、六回ずつ、霊を一度に五千万から五億ほど天上界に上げ、その霊を天上界が処理し始めてより、ほとんどの地獄から来た悪霊や地縛霊は消滅されました。

高橋信次氏はこれらの功績もあり、天上界において九次元から幽界に落され、再び今度は如来界上位に上げられるという異例の寛大な取計らいの後、再度の背反にも許しを得て、今日まで種々のことに私達は協力を仰いでいました。

特にG会およびミカエル佳子嬢の反省を促すために重要な位置にある人でした。

しかし私達の一人として光の大指導霊の合体した方がこのような結果になるとは予想しませんでした。

天上の者はすべてエル・ランティ様の御計画と御希望の通りに無条件でしたがいました。

（イエス様の十字架の贖いのごとく痛ましき計画ではあっても――それは天上のすべての者の血と涙を表わすものでもありましたが――イエス様は従順にしたがわれ、そしてエル・ランティ様の再度の御依頼により、私達七大天使はエル・ランティ様と共に出来得る限りイエス様のお苦しみを和らげ、お生命を天にお上げしたのです。）

ブッタ様の本体である高橋信次氏は、御在世中は実によくその任を果たされ、ミカエル佳子嬢のことと、理論追求が不完全であったことを除いては、天上界に上られる時は使命の完遂者として快く迎えられ、その後一年程は熱心に私達の協力者として四次元より稚乃裕子様を助けられたかのごとく、表面上は見えました。

しかしその心の中は前述のごとく執着心と自己保存以外の何物でも無くなっていたのです。その変化に気づいたのは、私とラファエル大天使すなわち稚乃裕子様の身辺を守る者のみでした。

半年程前でしたが、そのことをエル・ランティ様に御報告致しました時より、高橋信次氏に対する

警戒態勢が取られました。しかしその間に高橋信次派が天上界の善霊の間に早くも四、五人現われ、その霊示によって天上界はいろいろと裏切られたのです。

裏切りが天上界の計画を挫折せしめました。稚乃様の正法流布の計画も同じことでした。

そして遂に今日の断罪となったのですが、この極刑を受けるに際しては、稚乃様の生命をサタンと共に狙い、攻撃したという事実が二度あったのです。サタン消滅後は、彼一人でサタンと同じ手法を用い、今度は天上界に刃向って稚乃様を守る七大天使を巧妙に滅す手段を試みました。

それにまたもや秘かに手を貸すものがいたのでしょう。これはミカエル佳子嬢の生命を奪う以外にはG会を目覚めさせ、解散し新たに一人一人が法の継承者として、『天国の扉』で高橋信次氏が説いたごとく、世界にその輪を広げて行く方向に向う道は無かったことからの、高橋氏の裏切りでした。

父親の情として万止むを得ないものがあるのは理解致します。しかしG会の愚行、ミカエル佳子嬢の虚言は人々を迷路へと導くのみであり、悪霊の憑依で会員の多くを不幸にしていた事実（それも心正しき人のみを）が次々と明るみに出て来ました。その上での天上界の決断でした。

ただ残念であるとしか言えません。末法の世であり、最後の審判が行なわれる前提のもとに実行に移された天上界の計画でなければ、（もちろんこれらすべての計画は太陽界、如来界、菩薩界、神界

を含め、九次元、宇宙界のエル・ランティ様の承認の下に行なわれるのです、）このような悲劇はあり得なかったでしょう。

一人一人が正法流布の輪であり法灯となること、これがこの末法の犠牲となられた高橋信次氏への最大のはなむけであり慰めとなるものではないでしょうか。

中野氏については、G会の外部にあり天上界の側に立ちながら途中から離反したゆえに、最初に永遠の生命を奪われました。あとは天上に上がるべき魂の無いままに肉体のみ、およびそれに付随する切捨ててもよい魂のみで、天上界に反して一人、消滅されて了った高橋信次氏の古き非科学的理論とブッタ様の法を説いておられました。

天上界に認められずに、天上界の認めぬ曲論を説く人も二、三他にあります。

これは私達から眺めて危険極りない人物にして遠からず中野氏あるいはそれ以上の裁きに遭うでしょう。

もちろんこの方達は『天国の扉』が出版され、それを読みながら、天の意志に反して求められぬ法を説くということに関して、その態度は天上界を無視するものであるということから、永遠の生命が取り上げられるのです。

なぜならば、何のために稚乃裕子様が後継者として天上界よりのメッセージを仲介したのか、これでは理由も動機も判然とせず、再び宗派が別れてしまう危険を招くのですから。

もちろん私達は宗教団体を新しく作ることは今後絶対に支持しないでしょう。今ある既成のものでさえ、出来ることなら仏教宗派を一つ、キリスト教宗派を一つにまとめてしまいたいのです。

しかしそれには何千年と掛ります。

そして洋の東西を問わず、新興宗教および創価学会のごとき荒々しき集団催眠と暴力肯定の宗派、人間の中の野蛮な獣性を解放する宗派は、天上界（極楽）とは何の関りも無い団体にて、すべての会員は永遠の生命を与えられぬこと、すなわち救われぬことを改めて宣言致します。これら多岐に亘る新興宗教宗派は解散しなければならないでしょう。

それが実現するのはこの五百年以内であるし、実現しなければ、再び正法を強調し私達から強く働きかけねばなりません。

そして来るべき新しき世紀とは、神の声を聞きながら、宗教を持たぬ、あるいは持っても、それは心の問題であり、一人一人が魂の内奥にある善我に呼応する神と結びつくものであることが望ましい、そのような世紀なのです。

神と結びつく善我とは真に悔いなく働きかける心――すなわち憐れみをかけたいと願い、与えたいと願い、働きたいと願い、尽くしたいと願う――それが素直な心の動きでなければならないのです。自己を偽り、強制することは真の善我ではありません。なぜならば、強いられてする行ないには、いつも後で不快な気持、疲労を覚えます。その行為に喜びと満足感がついて来なければ、それは善我ではなく、偽我なのです。神と結びつく善に苦しみや、悲しみや、功名心、見栄、虚栄は存在し得ません。もしそれらがあれば、それは偽善なのです。善に基づく自然な心の流れ、が第一です。

しかしこの心は、人々の間で互いに働かねばならぬものであるのは御存知でしょう。一方的に与えるだけ、受けるだけ、では、真の調和とは言えません。受けるだけの人は我儘になり、与えるだけの人、そして感謝を充分に受けない人には空しさと疲労が来ます。そして自分を偽って善をなす――偽我に変るのです――。

先に述べましたようにサタンは二月十三日に今度こそ永遠に存在せぬものとなりましたが、日に、日本だけで五、六千人、全世界では約五万人の死者が出るのですから、それも悪の魂を持った末法の世に相応しい魂ばかりで、天上界の仕事は増えるばかりです。

しかしこの最後の審判の時は、その悪の魂を消滅してゆく時でもあり、善なる心の人々が守りが豊

かにあることを間もなく感じるようになるような時なのです。
願わくばこの最後の審判がいままでの乱れに乱れた末法の世に一つのピリオドを打つものとなり、新しき心と魂と世界が生まれるものであれと私達は祈っております。
そして神に祈りつつ生きて来た信仰の人は、その神が私達天国にいるものである時、心のやすらぎを覚えて頂きたく思います。貴方達に何の裁きも下らないからです。
もちろんその生涯を通して善と悪との秤りにかけられて後、裁きを受けるのですが——。

後継者

最後に私ミカエルが私の名誉にかけて誓い、またここに断言致しますことは、三次元の方々がこの書およびこの書の前の巻、すなわち『天国の扉』を読まれ、御理解下さったと思いますが、この書の著者稚乃裕子様が高橋信次氏の正当かつ合法的に天上界よりその任を与えられました後継者であるという事実です。ただ、サタンを欺くため、後継者の霊示は〝女である〟という以外は致しませんでし

た。それゆえ発表に混乱を生じたのです。

これに関して、再びくり返すようですが、三次元あるいは異次元よりの霊示で誤った情報が乱れ飛ぶ時期もありましたが、それは一人高橋信次氏の自己の過ちを正当化し、G会およびミカエル佳子嬢の教祖の地位を揺がさぬとの自己保存の偽我の心より生じた企みに他ならないのです。

高橋信次氏は昨年八月天上界の書である『天国の扉』を出します際に、ある出版社に依頼のため御足労願った一正法者の方も御存知ですが、高橋信次氏の保護の下に行かれて、実に五週間もの長い間の話し合いで結論が出ず、遂にあきらめ、他の方にお願いしてたま出版社へ持って行って頂き、何と二週間でOKされ、直ぐ出版手続きがなされたのです。

ここに高橋信次氏の陰謀なくして何があったでしょうか。

天上界の善霊が付き添う場合は悪霊は手出しが出来ません。まして如来界の上位の霊なのです。

そして心情としては理解出来ることではありますが、四次元から稚乃裕子様のお働き、その価値、才能とパニャパラミッタによる智慧と本来の賢さによる判断の確かさ、物事の処理の的確さ、などですが、それに日々接していられながら、御自分の実子を後継者としておいてほしい、霊能が優れ、学問をしさえすればいろいろなことが可能になるから、とお頼みになったのです。

しかし、私は稚乃裕子様の七歳の時よりおそばにおり、意識を通じて、日々賢明な方に育つようにお守りしております。（霊道を開いた時、実はモンガラナーでなく、私が入ったのです。）

ラファエル大天使もまたしかりです。その時よりこの方は後継者としての能力を与えられていたのですから、急にミカエル佳子嬢に、と言われてもそれは不可能なのです。

私は高橋信次氏のところへはあの方が十八歳になられて初めて行ったので、その後はあちらとこちらと両方を見守り、必要なことをなしていました。稚乃裕子様にはこのことは今初めて明らかに致しびっくりなさっていられますが。（高橋氏もこのことについては御存知なかったのです。）

ラファエル大天使は稚乃裕子様と土田展子様の両方をお守り致しました。土田展子様は『天国の扉』で天使ルリエルの本体でウリエル大天使がパワーを与えたと発表致しましたが、ラファエル大天使と七歳の時から交替したので、その後はラファエル大天使がパワーを与えたとなります。本原歌子様と秋元ユミ様には合体霊の他にガブリエル大天使がパワーを与え、川上恵子様と展子様の弟、土田修三様にはパヌエル大天使が、合体霊の他にそれぞれにパワーを与えました。

このように大天使以上の次元の方々は同時に二人以上の方を守護し、意識も通じることが出来るのです。

そして稚乃様が七歳になられるまではエル・ランティ（エホバ）様が御自分の慈悲と愛の心、人類愛と人類救済の使命感を与えられました。

そのためには一身を犠牲にしても厭わぬ尊い心です。身を飾ること、野心、競争心、見せかけの体裁、そのような意識は薬にしたくも無いのです。いつも浄化された善――しかありません。

そして今は三次元の多くの、信念を持ち、しかしながら己れこそは正法の唯一の伝承者たらんと自己満足にともすれば自己の地位を高みにおくのが当然といった人々の中で、どうすればこれらの人々を天上界と結びつけ、働いて頂くかと日夜心を痛めていられるこの方に、人々に対する智恵をお教えしているのが、この私ミカエルとラファエル大天使なのです。

でなければ高橋信次氏に操られ、この方が法を説く人々をまとめて天上界との仲介者として正法流布の輪を広げてゆく使命を持っていられることを人々は無視し、高橋信次氏でなければミカエル佳子嬢、でなければ誰か他の人にと、決して千乃裕子様をそうだと認めようとしない人々もいるのです。

私には理解出来ない現象です。

エル・ランティ様の申された言葉に次のような句があります。

人己れを高しとせんは低きなり。
低しとせんはこれすなわち高き地位に置かるべき人なり。
人これを知らぬは愚かなり。
愚かにしてその向うところを知らぬなり。
向うところとは光なり。
光の溢るるところこれ天の国にして、
天の国に入るべき人は
すべて己れを低しとせる人のみなり。
その他になきなり。
己れに忠実なるは良きなり。
然れども、偽善に終始するは愚かなり。
偽善とは、
人その価値を認めぬにて、自ずから高しと
公言するものなり。

その目するところ、これ栄耀栄華を望む心にして、
栄耀栄華を望むは
儚なきことを知らざるなり。
その向うところは砂の楼閣のごときにして、
手にしたるは、ただ崩れ落つる
砂の城のごときものなり。
空しきものよ。

と、これは聖書の中で、イエス・キリストの譬話として録されておるものの原文ですが、実はエル・ランティ（エホバ）様がお書きになり、私がイエス様の意識を通してお話しして頂いたことなのです。

エル・ランティ様の人となりを知らぬ方は多くいられますが、この方は、私達と同じく、ゼウス様に始まる数回の転生を経て、すべて人の世の空しさ、成功、財の、天の財宝に比べれば、（これは心の糧のことです。すべて徳を高める精神的遺産――これを天の財宝と申します）何の価値もない。それを御存知でいられたのです。

これはもちろん稚乃裕子様に当てはめているのではありません。

他の人々、我こそは正しき法を説くものなり、正しき霊示を受くるものなりと自負する人々。あるいは、天の加護があるゆえにこの世での地位、名声、財を得ている、と考える人々のために申されているのです。

そのように天上界は誰のためにでもあるのではなく、やはり狭きところであり、すべての自我我欲を失くし、執着を失くした人々のためのものであり、いったん天上界に籍を置かれても、その行ないが悪ければもはや天上界に属するものではなく、この美しき国より追われる者であること。

地上に築く神の国、ユートピアであり仏国土であるところもやはりそうなるべきところであり、そして三次元における魂の修業、すなわち厳しき人生を通して磨かれる心は、四次元において豊かに実り徳高きものとして迎えられることを、私は誓いと共にここに天上界高次元の意志と決意をお伝えするものです。

メッセージ

ミカエル大天使長

――天上の言葉にて――

エル　キルレア　エス　テスセステ　レナ
EL KILREA ES TESCESTE LEVA――
汝等　地に住める人々よ。

セス　テレアク　メレデア　テム　エートテルカ　メーデレイヤ
CES TELEAK MELEDEA TEM ETELKA MEDELEIYA
我等　この地に来たり、治めてより一万年、

セステ　ウーレウナ　セレア　エム　テルメテレア　レウナ　エヤムレテ
ペルメテセル　テセル
CESTE ŪLEUVA CELEA EM TELMETELEA LEUVA EYAMRETE
RELMETECEL TECEL
遂に今日の審判の時を迎えるに至る迄、長き月日、

テーレウナカ　セム　テレアム　スローネイア　エムテセア　ナム
T⃗LEUVAKA CEM TELEAM SRŌVEIA EMTECEA VAM
我等と共に在りし人々、あるいは亡き人々と、

ペネポイロイカ　セルテク　テム　セーペテムカ　テレア　テムセ
REVERQROKA CELTEK TEM C⃗RETEMKA TELEA TEMCE——
我は今より後も　変らず誓わん。

ペーレプア　セムテ　ケア　セムテペム　オイオロイオイナ
R⃝LERUA CEMTE KEA CEMTEREM QŪQVA——
必ずや美しき平和を来らせんと誓わん。

ペレアムテ　ペレス　テム　テク　プレペレポス　トーメイオス　エレ　ナーレア
テムペレスト
RELEAMTE RELES TEM TEK PREREPEROS TŌMEIOS ELE VAALEA
TEMRELESTO——
されど汝等　この美しき地を愛し、大空を愛し、大海（みずうみ）を愛せるなりや。

ペク　ポコアセム　テーレアク　プレッテラーイム　セア　ネル
REK ROKŌCEM T⃝LEAK RRETTERAAIM CEA VEL——
我等の地は美しき園にて、神の国と名づけられむ。

メーステ　レアネル　セケウナ　メア
M̄STE LEAVEL CEKEUVA MEA——
そは美しき園なり

ペス　テレウナ　パル　トクア　ペッテレ　プレテレーウナ　セムテ　セケウナ　メア
RES TELEUVA RAL TOKUA RETTERE RRETEL̄UVA CEMTE CEKEUVA MEA——
されど、汝等の園は園にても、悦楽の園にあらずや。

プレクレペ　ポイアウサ　ペレ　セステム　エケテステ　メア　ネム
RREKRERE P̄RAUSA RELE CESTEM EKETESTE MEA VEM——
命を奪うものはびこり、金銭の為　身を売る女多し。

セーレム　トイオロイエス　テムテ　セス　メーレク　デーネア　セア　デーネア
CƎLEM TǪÜES TEMTE CES MƎLEK DƎVEA CEA DƎVEA——
ああそは、神の国とはほど遠きものにして、地獄の装いなり。

テル　クレト　セス　プレッタ　マーセスト
TEL KLETO CES RRETTA MAACESTO——
これ　永遠に乱世のまま残らんか。

ペレッソレム　テクエクテ　メア　エムナー
RELESSOLEM TEKEKTE MEA EMVÄ——
滅びるままに置かれるは悲し。

プレテレク　ペス　ソステネ　テレマラウカナ　ケム　テレアグ　セムナ
RRETELEK RES SOSTEVE TELEMALAUKAVA KEM TELEAG CEMVA——

我等の来たりし日より　三億六千五百万年余。

アスメレウカナ　メステレ　クールネムア　セム　ペルテレウナ　メル　ケーネム
デルナ　メア
ASMELEUKAVA MESTELE KŪLVEMUA CEM RELTELEUVA MEL KǢVEM
DELVA MEA——

何と変りしその姿よ。美しき花園でありし地球よ。

ペルポイオロイオイナ　オムテ
RELRQŪQVA OMTE——

我等は悔いて語らん。

セス　テレパラス　ネーテセア　セア　テレクレッタ　メアナ　セア
CES TELERALAS VǢTECEA CEA TELEKRETTA MEAVA CEA

されどこの末法の世に　我等集いて語り、

スネッテレア　エス　モイレア　エムテ　ペネポイオロイオイナ　エムテーレク　テアナ
SVETTELEA ES MQLEA EMTE REVERQÛQVA EMTƷLEK TEAVA
如何に美しき園に戻さんかを、日々話し合いたりしが、

エス　テーネス　ケレ　ウテム　テウムカ　テルナ　ムイヤムナ
ES TƷVES KELE UTEM TEUMKA TELVA MÜYAMVA——
その報い　さりとてなき事を　知りたり。

セークレ　セム　プリア　テス　ポイト　セム　テレウナ　ポリウレカーナム　エス
クレットーラムタ　エムケ
CƷKRE CEM RRIA TES RQTO CEM TELEUVA POLIULEKAAVAM ES
KRETTÔRAMTA EMKE——

彼等何ものをも受け入れず、神をも否定しいたり。

セムテ　パルパラ　ケレア　セム　エイロイオウサ　ナム
CEMTE RARRARA KELEA CEM EIRQÜSA VAM
否定とは　何の精神（こころ）にも基かず、

エス　テプテ　クレットーラムタ
ES TERTE KRETTŌRAMTA——
ただ　拒否しいたり。

ケル　クレッテ　エズ　クレテラム　エムテ　アムナム　メア
KEL KRETTE ES KRETELAM EMTE AMVAM MEA——
ただ少数のみぞ　我等を拒否せざるは。

ケーレルカ　トーレア　プレテーケレム　テ　アナム　セクレタム
KƷELKA TŌLEA RRETƷKELEM TE AVAM CEKLETAM——
ああこの末期（まっき）の世に　我等惑うものなり。

スレ　ラムカ　テル　テリオロ　スマセケイオス　マム　テ　ネーデル　セケア　ネムナメア
SLE LAMKA TEL TELIORO SMACEKEIOS MAM TE VƷDEL CEKEA VEMVA MEA
如何に　この人々に　我等語りかけ、呼び集め　語りかけ、

テム　レルスレッカ　テルナーダ　メア
TEM RELSLEKKA TELVAADA MEA——
平和を説かんかと。

スーレウナ　エムセ　ポイロカ　テム　セーレア　テムセク　テムセクテ　レーデルカ
ネルセム　セクテレム
SŪLEUVA EMSE PǪROKA TEM CȜLEA——　TEMCEK TEMCEKTE
LȜDELKA VELCEM CEKTELEM——
されど我は　なおも誓わん。何時の日にか　必ずや平和は来たらんと。

エム　レアナ　ペルレウナ　モイオロイオウナ　セル　テプテ　エスケル　ペテウナ
メア
EM LEAVA PELREUVA MǪŮVA CEL TERTE——
ESKEL PETEUVA MEA——
その時　再び汝等に地にて会い、語り合わん。喜びと共に。

第二章　エル・ランティ（エホバ）の章

私は少しもあなた方に直接話しかけたり、正法を説いたり、メッセージを伝えたことがないと思われているようですが、実は何度も人間と合体し、転生をくり返して、その過程で人々に法を説いて来ました。

そしてミカエルの章でミカエル大天使長が申しましたように高橋信次様の合体霊とされているのは真実ではなく、高橋信次様はブッタ様の本体にしか過ぎず、そして単に如来界の上位に上ったにしか過ぎないというのも真実です。

これは天上界の計画の一つですからあえて訂正することは致しませんでした。サタンを欺くためです。

しかしミカエル佳子嬢は天上界の計画にはなかったので、訂正致さねばなりませんでした。ミカエル佳子嬢がミカエルの本体であるという説をそのまま通されることは、天上界の威信に関ることでもあったからです。

後継者が出ていなければそれでもよいでしょう。天上界はその虚言に肩を貸しましょう。しかし後継者はGLA外部にちゃんと時が来るのを待っており、悟りを得ると共にG会に入会しようとしたのです。

私達はそのため、いろいろと顕現を計画し、あらかじめGLA研修会でそれを試みましたが、頑な心の人々はその暗示に気がつきませんでした。

もちろん私達はブッタ様の十大弟子の一人として、稚乃裕子様を紹介する積りはありませんから、その時は見過しました。昨年の二月のことでした。

そして三月、四月とG会は稚乃様の入会を拒否し、稚乃様の悟りをお母様から伝え聞いた近くの支部の支部長や他の会員は、お母様に事実を否定させようとしました。

それをさせるような私達ではありません。G会会員の腐敗ぶり、愚昧な行動に接し、天上界はG会を見棄てることを決議しました。

もともと囮りの団体ですから、天上界に取っては新しき法灯が続々と入り、大きくなり、そして正しき合体霊が稚乃裕子様とミカエル佳子嬢（高橋信次様が後継者にしておしまいになったのでGLAを統制しておられますから）の協力によりG会の方々に知らされ、改めて稚乃様が後継者であることを、佳子嬢から知らせて頂こうと思ったのです。

しかしそれは無理だと解りました。ミカエル佳子嬢があまりに偶像視され、〝偉大な方〟との賛辞と共に、その霊能力と容姿のゆえを以てメシヤとして崇められていたからです。

霊能力と言っても、病気を自分で癒す、憑依を自分で取ってあげるといったものでなく、ただ天上界の声を伝えただけであり、四次元の霊によって喋らされていられました。それ以外にはありませんでした。サタン憑依の後はサタンの声と波動をGLA会員に伝えただけなのです。

その時は会員はすべて憑依され、憑依されなかった心正しき者、純粋なる者はその波動を受けた後病いに伏し、長く病みました。それを悟りGLAを出た人もおります。憑依を受けて病いが始まるのは、正しき理由があります。それは霊的、迷信によるものだけではなく、その病いで死亡した霊が、霊体の修復がつかぬままさまようからです。

そして人の身体に憑き、その健康な身体のエネルギーと光りを吸収し、自分の病いを癒そうとしま

す。それゆえ同じ病いが伝染るのです。

そして三次元の人は三次元の医師にかかり、その病いを治さねばなりませんが、それもまた嬉しく、憑依霊が病人と共に治療を受けるのです。

しかるに霊体の病いは天上界にて治さねばならないのに、三次元にいるものですから、三次元の治療で治らず、その人をますます病いの床に留まらせます。

しかし三次元で病い癒えた人は光りが出、憑依をはね返すことも可能ですから、私達は三次元の病いは三次元の医師の元へ、と教えます。

余談になりましたが、G会は新しき法灯のどの人をも受け付けず、ただ自分達と自分達のメシヤを崇拝する人のみを会員にしました。

それゆえにミカエル佳子嬢を頂点に巨大なピラミッドを築こうとしたG会を天上界は排除し、会員を逆にG会から離れさせました。

内部の上層部でも識見のある方はミカエル佳子嬢の行動を批判、忠告致しましたが、周辺の幹部が受けつけず、逆に批判、忠告するものを陥れる策を巡らしました。

精神病院に放り込もうと宮田直子を追いかけたこともあり、まるで無法地帯のごとくなりました。

そのようなことが私達天上界に認められ、存続を許されるとでも思ったのでしょうか。
宗教史上おおよそメシヤの周辺にあり、神の法を説くものが、会員が反省を求めたからと言って精神病院に入院強制を企むような、かつ実行したようなことがあったでしょうか。すべては時の流れに埋めようとしておりますが、実際ＧＬＡはそのような手法を用いたのです。
そしてまた高橋信次氏はＧ会の無法振りを修正、統制もせず、責任回避をして、私達にその任を委ねました。囮りの団体を作ったのは私達ですから、出来るだけのことをしました。
しかし、あろうことかＧＬＡのミカエル佳子のみへの献身によるメシヤ教的一貫した態度が、外部の努力と私達の努力で高橋信次熱が戻ってくると、高橋信次氏は天上界への裏切りを計りました。
サタンとは別行動で天上界の善霊を味方に引き入れ、半数を裏切らせたのです。そして三次元に働きかけさせました。
裏切りは昨年の二月から始まりました。裏切った天上界の善霊は最初五分の一、そして四分の一、そして三分の一と二ヵ月毎に増えてゆきました。
超能力を持つベー・エルデからのサタンは私と同じことが出来る知識と能力を持つがゆえに、三次元は何が真実か解らなくなりました。その上高橋信次氏も別のところにおいて『天国の扉』の出版を

遅延させ、売れ行きを押え、書店での販売方法を巧みに操り、出版社と私達の努力を無にしました。

稚乃様のお母様の知人をして次々と裏切らせしめ、私達の法灯と目した人々に天上界不信の念を与え、天上界のために正法を説かせなくしました。

高橋信次氏の誤った正法を説き続けさせるよう一人一人を天上界に背反させ、結果は高橋信次氏を筆頭とする新しい偽我の天国を作ることになるところでした。

そして稚乃裕子様の生命と七大天使の生命とをサタンとその配下と、高橋信次氏とその支持者で二度も狙い、危(あや)くせしめました。

そして私達は十日間戦った後二月十三日にやっとそれら天に刃向う者のすべてを消滅することが出来たのです。高橋信次氏を除いて。

その理由はお解りでしょう。善人としての生涯を終えて後の、裏切だったからです。天上界の計画の犠牲として出来得る限りの慈悲と更生の機会を与えました。

しかし反省は表面だけでした。

なぜならば三万に減り、再び四万にサタンの力で増えた会員と、娘への執着があったからです。愚かしく惑わしのうちに生きた娘への哀れみが、最初の高橋信次氏の背反の動機でしょう。

私達はそれゆえ慈悲の名を以て同氏を四月二日まで許容し、ただ反省と行ないを改めること、天上界の方針に協力することを要請しておりました。

しかし高橋氏は四月二日遂に最初にして最後の大掛りな計略で以て、一人で天上界の残っていた善霊と稚乃裕子様の全生命を危機に導き、破滅させようと企みました。そして午前五時十三分に消滅されたのです。

メシヤと崇められ、死後の名声も並々ならぬ人であった方が裏切るなどということはかつてなかったのです。

イエス様が裏切り、ブッタ様が裏切り、モーセ様が裏切り――そのようなことをあなた方は想像だにし得ないでしょう。

しかし後に残した弟子達が愚かなことをして天上界に背を向けるようなことをなしGLAと同じ狂気の道に入り込めば、そして私達にそれを再統制するようにと要請を受ければ、同じことをこの方々もされたかも解らないですね。

高橋信次様よりは、しかし、この方々は苦労をなさり、完全に執着を捨て、家庭を捨て、あるいは離れてしまった一生を送られましたから、魂の修業の度合いもことのほか厳しく、天上界に上られて

もいろいろなことに耐えられました。

この点から人の一生における、苦しみに出会い、乗越え、あるいは己れに厳しく突きつめて法を行ない、他には慈悲と愛を注ぐのみという魂の修業が心の九層のすべてに行き渡っている方は、死後永遠の生命を得られて天上界でいろいろなことを見聞きし、人の真実、信義、正義、愛そして慈悲の光に照して四次元の時を過す時、何かの過ちを犯し、あるいは天上界の意志に反し裏切ることなどは決してなさらないのです。

いま天国に住まれている方々の数は減り、新しい方々が来られていますが、天上界を裏切られなかった方のみです。また裏切る可能性のもっとも少ない方々のみを新しく選びました。

最後の審判によってまた数が減ったのですが、その後も高橋氏に次ぐ裏切りが日々行なわれ、その度毎に善霊の数が減りました。霊体は一つのことについて迷いが生じると、なかなか他のことに気を転ずることが出来難いのです。その欠点がここにおいて具体化され、天国がバウンティ号の叛乱のごとき様相を呈しました。天国だとて、霊の世界は、心の修正がいつも要求されるのです。霊はエネルギーそのものと言ってよいほどですから、一つの思念がそれの持つエネルギーと等量になって、それだけ集中したエネルギーの固まりとなります。肉体を有していれば、種々の生活上の必要性から気分

を転換させ、悪心、邪念の集中が避けられますが、霊体はこの点において、辛い日々を送らねばならぬのです。人間と同じように感情が動きます。地上にいる死霊、浮遊霊だとて決して愚鈍ではありません。ただ思考、推理、判断などの面において、また記憶の度合が天上にいるものと比べて劣るのです。非論理的、非合理的なものが多いのです。

（多分一つのことばかり思いつめ、他のことは考えないから、全体において知能の程度が低いのでしょう。簡単な説明で納得するものもいます。が、納得しないものは何度言ってきかせても納得しません。）

このようにして私達天上界は顔触れがすっかり変ってしまいましたが、天上界における最後の審判は終り、後はこういった不慮の災害の後始末だけなのです。

そして三次元の最後の審判はこの二月二日、すなわちサタンとの戦いが始められた日より、裏切りにより妨害を受けながら続いております。いま全世界の約半数が終りました。生きているままで罪に定められてゆくのです。それが新約聖書の黙示録でヨハネが霊示したことの成就であり、神の国の備えのため、古きを新しきものに変えて行く大きな分岐点でもあるのです。

また高次元のものの数が激変し、天上界の統制のため、人数を増やさねばならぬことになりまし

た。そのためこの八月より、以前より強化する目的で、九次元には十一人の方が、元七大天使のうち六人が加わって、指定され、その上の宇宙界には同時にいまの地位を引退する私と後任のミカエルとがいることになります。大天使長、大天使、天使のリーダー、サブリーダーが顔触れが変ります。それも正式に私から声明を出しました。ブッタ様、イエス様、モーセ様も宇宙界に来られます。

さて何よりもあなた方に申し上げねばならぬことは、四次元と三次元の縦の繋りが、今までサタンの続出と妨害によりもう一つうまく行かなかったので、地上にユートピアを築くことが単なる理想として終っていた、ということを告白致さねばなりません。

私自身も直接あなた方に話し掛けることにより地上との心の交流を増やそうと心掛けて来ましたが、その度にサタンの巧みな妨害により、旧約の時代には私についての歪んだ伝説が作り上げられ苦労を致しました。神の怒りとされたものの中にはサタンの破壊も混っていたのです。

イエス・キリストの時代にはイエス様を通じて話しかけることが出来ましたが、その後再びそれが不可能となり、自然に霊能を備えていた方々に大天使あるいは天使ダニエルやサミュエルが働きかけて、私の意志と目的を伝えて頂いたのです。

今生においても中野氏主宰誌一月号に私とベー・エルデより助力に来て下さったテリエル大天使長

のメッセージを稚乃裕子様、土田展子様のお二方に通信し、載せて頂くべく送りましたが、同氏はサタンに疑惑の心を植えつけられ、独断で没にされました。十二月のミカエルの法を説く通信も同じくその運命に遭いました。

天上界はG会内外の裏切りと背反に遭遇したのです。夢にも考えていなかったことでもちろん私達は同氏の断罪を定め、永遠の生命を取り去るべく決議致し、その旨高橋信次氏を通じて通告致しましたが、この方が裏切りの心を持っていたのでしょう。その通告の内容、方法が疑いを残すもののごとく仕組まれたのに違いありません。あるいは、それを受けた時、同氏の心が怖れを感じず、魔のものと感じるように意識に働きかけたのでしょう。裕田光穂の名で『天国の扉』に御寄稿下さりながら、このような結果になったのは、サタンと高橋信次氏に私達天上界に対して不信の念を抱くべく意識を支配されたとしか言いようがありません。最初稚乃様を信じ協力的であった方の背反も簡単でした。

これらすべてはベー・エルデのサタンであり、優秀な物理学者として一生を過したダビデ・カンターレ、すなわち私の双子の弟の仕組んだものなのです。ここに至るまで私の心に迷いがあったのですが、やはりこれは最後の審判の時であるので、他のすべての天上の異変と共に明らかにすべきだと思います。

弟であるがゆえにその魂を救うことは私の永遠の夢でした。私に協力し、正法流布のユートピア建設の妨害さえしてくれなければ、普段は気の好い人間でした。ただいたずら気が多く、静けさと平和を好まぬ人間だったのです、生きている時から。そしてその妻エル・ヘルナ――ヘラ・カンターレも悪人ではありませんでした。ただ夫と同じことをして四次元の能力の偉大さを知り、三次元を意のままに操れることに楽しみをさえ感じるようになったのでしょう。

後悔して善霊になってもこの二人はすぐ偽我の心が出て来て、悪霊化するのです。同じようなパターンは人間の一生に巡り会う人々の中にいくらでも見出せます。いたずら気が多く、人を困らせて喜ぶ性質、誤った理想主義や自分の主義、主張を他の人に押しつけて、内容の是非を問わず意のままにならぬ時は制裁を加える――甘やかされた人格にこのような人が多くいます。それが私の双子の弟という特殊な位置にあるため、増上慢と支配欲が嵩じて来たのです。私に解るような手段は決して用いませんでした。しかし妨害の主なものは弟から出ているのを知っていました。そして出来るだけそれを取除く努力をして来ました。

弟は自己の有するあらゆる知識を、霊となった時、仕事を持たぬものとして時の長さに倦み、私の建設的計画を破壊することに用いたのです。四次元の能力を駆使して。

これは神として考える時、理解し得ぬ事柄ですが、人間の霊として考える時、人間の性格をすべて合せ持つものの背反、破壊衝動、謀略、破壊行動—これらの図式から、一人の人間が天上界から地獄の波動を持つに至る過程、そして反省と行ないを改めながら再びサタンになることも、あなた方には容易に理解し得ましょう。

人間ルシファーは私の弟の妻に操られ、合体霊天使ルシエルも共に犠牲者となりました。

そして私は昨年の諸々の不祥事に出会った末、遂に忍耐の限度を越え、最後の審判を弟夫婦も共に含めて行なうべく命令したのです。

天上界——天国を厳しき法と掟に律せられた、かつ慈悲と愛に溢れる善霊の住みかと見做す時、そしてそれを三次元に置きかえ、善なる心の人々の集まりから、ユダのごとき悪に転ずる、あるいは悪の誘惑に負けた人が出る時、私達天上界、特に私が今まで背負って来た十字架を御理解なさるでしょう。そしてダビデに言葉巧みに惑わされ、私達を裏切った善霊の気持ちも御納得なさることでしょう。

私はここにあなた方にはっきりと宣言致しますが、今後再びこのような混乱した事態を生じさせぬために、人間として三次元で過ごされているあなた方はますます己れの善我を強め、その心を浄化さ

せ、社会悪、道徳に反する諸悪を憎み、正義とは何か、をもう一度考え、その基盤に立ってのみの信義と愛を貫き、慈悲を与え、そして神（天上界）の守りと愛への信仰が互いへの同じ質の信頼感と変るよう努めて頂きたいのです。

ことの善悪、是非、真実と虚偽、おおよそ人間として俗世の心、俗人の心、としてうとましく思われる物を鋭く見抜き、それを自分の心から追い出すのです。なぜならば、それらはすべて悪霊の喜ぶものであり、自らを悪の魂と変えるものであり、私達天上界が受け入れぬものだからです。

人間的な欲望、虚栄の心、自己顕示、競争心、名誉欲、支配欲、権勢欲、所有欲、金銭に対する執着の心――G会は正法のために働き、報酬を得ること、正法を高く人々に売りつけることを何とも思わなくなっていますが、これは高橋信次氏に働きかけられたブッタ様が与えることの喜びを教えられた結果、自ずから多額の寄付をなし、他にもそれを要請することから、寄付や会費の額高に無関心になったのです。そのような中で、GLA幹部や事務を取るものや講師は、団体としての経営方法を軌道に乗せた同会で、一定の報酬を得て働くことを何とも思わなくなりました。これはどの宗教団体にも当てはまることでいまさら新しい事実ではないかも知れません。

しかし正法を説く団体として苟くもブッタ様の本体である高橋信次氏の慈悲の行為を自分のものと

なして人の範とならねばならぬのに、偽瞞と偽善の施しで人の歓心を買い、自分達だけの道義を振り廻して人に己れのみが正しと説き、その思想には何の広がりもない。宇宙の法則を系統だてて個々の法則に当てはめるという正法の大原則を説くものは誰もいない。

ただ八正道と中庸とありきたりの道徳論と——それのみを説くだけではこの滅亡に瀕している地球を救うだけの熱意を人に伝えることは出来ないのです。

ブッタ様はもっと大きなことを説かれました。もっと種々の地位、階級の立場に立って、その人々のなすべき勤めを説かれたのです。いま数え切れぬほどある宗教団体でそれを説き、また地球の危機を救うため積極的に努力し、世界に呼びかけるものはいくつあるでしょうか。

本当に道を説くものならば、そのようなことに黙っていられるはずはないのです。

ですから私達は宗教は人の夢や希望に巣喰う害虫のようなものであるから駆除しなければならないと説き始めたのです。

今世紀において初めて。

宗教は人々にお行儀良く坐って食事をしなさいという、親のようなものではありません。人の先に立って善とは正義とは何かを説き、積極的に世の誤りを正して歩くべき目的で結成されたものです。

この観点に立って私は、心の在り方のみを説く仏教は、もう少し積極性を要求しなければならないと思っております。

それが人々の寄付や会費や献金、賽銭などの名目をつけて、宗教家が真の道を説くのではなく、説教屋に成り下り、札書きに成り下り、呪文を気安めに唱えたり――それらの知識を自分と自分の家族と自分の眷族を養う報酬を得るためのものとしてしか利用しない――まことに人類の幸福を名目に繁栄という仮空の約束を与えて（人智ではいかんともし難いことを、神の約束を取継ぐという訳でもなく、空手形を振り出しているだけなのです）神頼みをすれば、どんなに欲の固まり、野望の固まり、背徳漢であっても、その恵みは与えられるものだという自信を人々に与えるのです。

神はそのような約束は致しません。天上界に入るべき資格――すなわち善に徹し、善我に徹した人でなければ幸福を約束したりなどしないのです。その気はありません。

悪が栄え、善が不幸を嚙みしめるような世は二度と来らせないでしょう。もしこのまま地球が滅びるのでなければ。

これは善我を確りと把握した人々への福音なのです。よく心してこの巻に述べられている事柄、内容を理解し、わきまえて下さい。

小さな子供達、少年少女達、青年達に二度と古き世代の退廃と偽瞞を教えてはいけません。偽我の芽を出してはいけません。

伸び伸びと振舞うのは良いことです。良い意味において人間的であるのも微笑ましいのです。しかし決して、それが理性を失なった野獣の王国の一員となるものであってはなりません。

私達天上界は歴史の変遷と共にいろいろな種族の栄枯盛衰を目にし、耳にして来ました。その原因となるものは必ず一つ——無知と無責任と不道徳のゆえなのです。

一つはっきり述べておかねばならぬのは今から二千年を遡る時代の頃、つまりイエス・キリスト誕生の二、三年前に町ぐるみ、あるいは地域ぐるみが滅びるという事態が起こったことが史実として記録されておりますが、宗教史には神の怒りに触れたとして記録されております。

これは非科学的な発想であることは容易に理解なさるはずです。地球という惑星の成長に伴い地殻変動が起こり、種々の変化が地上に表われる——地震、洪水、大雨、氷河期、間氷期、磁気の衰退、増加など——ずっと以前からそのような変化に地球は遭遇して来た。（必然のものではありますが）それらの延長として、比較的スケールの大きいものが二度、三度と起こった——それを科学の未発達の時代に生きる無知な人々が語り伝え、書き残して来た。いわゆる自然崇拝の感情を伴うもの、それ

を現代のこの科学文明に生きるあなた方がなぜ、珍重し、天の啓示ででもあるかのごとく伝承しなければならぬのか不思議でならないのです。

訳の解らぬ謎めいたものに対する興味と好奇心と、それが何の益をも齎さない――そういったものに愛着を持つ傾向があるのでしょう。それは男の謎と神秘を探る衝動のようなもの、に過ぎぬものなのでしょうが、現代文明がそのような横道へそれていってはならないのです。

現実には対処すべき事柄が山のごとく積み重ねられています。解き明さなければならぬ宇宙の自然の未知の法則がまだまだあるのです。

科学の時代に生きる人々が、非科学的宗教論や神話や、神の実体について、古代の人間の考えを取り入れ、さもそれが唯一絶対のものであるかのごとく人々に誇示する。

その埋めがたい思考のギャップを見出すことは出来ないのでしょうか。

宗教人は非科学的、知識人は宗教も霊の存在も全面的に否定して、〝解らぬは存在せぬ〟と結論づけてしまう単純思考型、それでは精神の成長もあり得ず、思考力の伸展も知能の開発もありません。

この国、日本に来てみて私達は国民の思考形態の欠陥というものが解って来ました。

そしてその成長が遅い理由もです。

外国人なみに個々の責任というものが正しく究明され、それに応える人生を生きて来たなら、もっと理性でもってすべての事柄、事象を整理し、全体的総合的に整理して、それらを理解しようと努め、責任ある解明をなしたでしょう。

私はまだまだ失望の域を出ていません。

願わくはこの大いなる迷いから目覚めて正しい理論、真理とは何かを悟る判断力と心を養って頂きたいと思います。

第三章　天使の章

ラファエル大天使

私達が最後の審判における使者として、その時期と行なわれるさまを聖書において、使徒ヨハネを通じ予言啓示致しましたが、その通りに行なわれるのではなく、この末法の世に自然破壊の促進を少しでも阻むため、静かなる形で、死者はおのおのその在るべき場所において、生ける者は日々の生活、行動の中で行なわれていることをミカエル大天使長に引き続き、私ラファエルも証言すべく、ここに記述致します。

なぜそれが突如として今日行なわれねばならぬに至ったかを申しますが、それは言うまでも無く、私達の第一番目の書である『天国の扉』にて神と人との在り方、繋り、天上界の仕組み、その歴史において、人は神と究極の意味において魂の家族であり、兄弟であることを、その理由を明らかにし証明致しました。

〝人は神の子である〟という言葉がなぜくり返し宗教家および偉大な世の救世主の口から出るか、という謎の理論的説明であり解釈を与えたのです。

そして、その結果を読者から来るお手紙、正法関係者の反応、正法流布の中心になる人々、およびGLAすなわち高橋信次氏によって創設され、拡充され、そして新興宗教へと堕落してしまった団体内部の個々の役員、会員の反応などにより、ここに明らかにしなければなりません。

その結果はネガティブ（否定的――期待に反する）のものでした。

神と人、仏との関連性については、すでにブッタ様の時代にもブッタ様の法により説かれているものなのですが、時を新たに、用いる理論を現代に解り易く科学的に解明しようと、古代に人々の持てる知識に合わせて平易な言葉を用いて説こうと、真理は一つです。同じことなのです。

しかるに、その昔インドにおいては神に仕える祭司への敬意、崇拝の念を持つという因習的な生活

態度から、ブッタ様により説かれた仏の概念――神は無く、人おのおのその徳と行ないにより仏になり、その封建社会の階級制度による重圧から救われるべきである、という説――により、人々がすぐさま神を冒瀆するということ、神を否定し切るということは無かったのですが、現代の末法の世においては、そういった神の人への近寄りが反って害となり、人は神への敬意を失なった。持つべき畏敬の念を持たなくなった。それが最後の審判を決定せしめるに至った一つの大きな要因であり、動機でもあるのです。

それまでにもこの二十世紀においては神を無視し、冒瀆し、戒律（モーセ様の十戒、イエス様の戒律）を平気で破り、人間としての魂は悪魔に売り渡されてあった――そのために最後の審判は必至のものであることは天上界において決議されておりました。

しかし最後の赦しへの機会として、高橋信次氏を通し、ミカエル佳子嬢の現象を通し、（昨年一九七七年三月半ばまでで、それ以後は天上界はこの方を離れＧＬＡを去りました）また稚乃裕子様の編纂せる私達のメッセージを通し中野氏主宰の日本神学誌を通じ、あるいは人々に送った高橋信次氏の現象テープ、これは土田展子嬢がなさいました。ミカエル様の現象テープ――同じく土田展子嬢によるもの、そして『天国の扉』に表わされた私達ならびに九次元の方々の各章毎のメッセージ、如来界

より唯一の方として選ばれた高橋信次氏の章（ブッタ様の合体された方であるので、権威と特権を与えられたのですが、普通は如来界、菩薩界の方は正法について説く機会は与えられないのです。太陽界以高の次元の方のみに許されています。）を通し語りかけましたが、反って人々が私達の言葉に慣れてしまい、度重なりと共に、新たな感激を持たず、メッセージに含まれる意義深い警告、予言、などに注意を払わなくなったのです。

反って現代の表現を用いぬ、学者の判読や詳解を必要とするもののみが、昔から珍重されて来た霊示、神託として、人々の注意と関心を引くような結果となったのです。

そうした結果がどういう事態を惹き起こすものか、私達天上界の者は知り過ぎるほど知っております。

それだけにこの書において、『天国の扉』において与えられた事実への好ましくない反響を是正する必要が生じて来ました。

神という言葉および存在は人間が作り、用いた語であり存在であることは事実ですが、それは古代より恐れを抱かしめるもの、理性では計りかねる超越した存在、として歴史の中で認められ、また人々により伝承されて来たものです。

しかしながら、それは事実ではなく、真理ではないゆえに私達が種々の光の天使の転生により、またその証により人々に釈明して来たことも事実です。

神は恐れてしたがうだけのものではない。怒りと罰だけの神ではない。反って赦しにこそ、その慈悲と愛にこそ神の本質があると、人は智恵によって悟り、そう理解して来ました。

それも真理です。

しかし少なくとも地球人類に先んじて、天国を創始し、人類に意識を通じて、文明を伝えて来た先覚者ともいうべき私達および他のベー・エルデの善霊達および、この人々の転生により新しく生まれた徳高き人々、偉大なる人々の魂は、共にこの天国における構成員であり、神であり、仏であるのです。

神とは西洋の概念、仏とは東洋の概念（神の多くは九次元以高、仏は八次元以下と考えてもよいのです）、階位の差はあっても、立派な、尊敬されるべき貴方がたの師です。人類の恩人であり、賢明な先達でもあるのです。

神との（仏との）連帯感や親和感を持ち過ぎ、しかるべき敬意を払わない――そのようなことがあってはならないのです。

やはり天上界の方々は、その啓示、警告、教訓に、歴史を通じての経験と叡知を含み、善なる意志と救いを齎す人々として、謙譲なる心を持って謹んでその言葉を傾聴し、（盲従せよとは申されておりません）良きことであればしたがうことが賢者であり、善我の持主であると言えます。

それがなされていない今日、『天国の扉』にて私達の人々への歩み寄りは、あまり良い結果を生みませんでした。

一つには善霊と悪霊を見極めるに、非常に困難な課題を与えられたからでしょう。

しかもいかに論旨が通り、語られていることが首尾一貫して立派であり、真理が大きいものであろうと、読者の意識の高さにより、また悪霊、サタンの暗示と誘導により、必ずしも正しきものを正しいと人は判断出来ぬことが明らかになったのです。

霊能力者が超能力がある場合、その霊能者の個人としての見解、三次元的表現の方が、私達異次元のものが、直接人々に語りかける旧約、新約聖書に表わされたような霊示、霊言より、一層重みを持ち、悪霊まがいの判明しかねる霊能者の言葉までが過大に評価されるようになったのです。

これは十九世紀末と同じ現象にて、私達天上界の者は非常にその状態を憂えております。

果して貴方がたはこれらの種々の予言をなすもの、霊示をなす者、メシヤを名乗り、そのごとく振

舞う者から、真の天上よりの啓示を判別し、識別することが出来るでしょうか。この人々の正しき予言や霊示が正しき方向を指していなければならないのです。そして貴方がたはその指す方向を、正しき方を見、聞かなければなりません。貴方がたはこれについてよく考えてみなければなりません。

私は神々の使、すなわち天使の一人として、一番人間というものの性格、その表象的なもの、心理的な反動形成、人種差別、階級差別、思想の違い、貧富の差、文化の優劣、などから来るその実生活のさまざまの幸、不幸を知り、理解を持ち、人間の側に立つものとして、歎く者です。

望むらくは、すべての人々が最後の審判においてその罪を軽くせしめられ、天国に席を連ね、あるいは地上を真の仏国土、ユートピア、神の国にする使命を自覚し、行なうものとして残されることを私は祈るものであり、また神々の怒りをなだめるものとして、貴方がたにその真意を伝えるものなのです。

ガブリエル大天使

読者の皆様のみならず、地球上のあらゆる人類が、エル・ランティ（エホバ）様および九次元の方々の裁きの手にて最後の審判の被告席に坐し、その裁きを現在受けつつあることは、この本の第一章にてミカエル大天使長様が正式に発表なさいました。

なぜならばこの審判の最初にして最後の目的は、聖書に予言されてあるごとく、この末法の世に罰すべきは罰し、赦すべきは赦して新しき世紀を迎えねばならないからなのです。

古今東西の歴史を通じて人間が犯して来たありとあらゆる罪、その罪状は計り知れぬほどの多種多様のもので、許し難きはすでに罰され消滅されました。極悪非道の罪はそのまま放置しておくと、天上界の徳を汚し、霊域を汚すことになるからです。

これは昨年からの地獄の開放と時を同じくしてケースバイケースで行なわれて来たので、地球上全域は、末法の世に生き、死んだもの、同時代に生を享け、死んだもの、の魂が日々五千万人は世界各

国を合わせて出ており、（戦争が今も行なわれている国があること、貧困、飢餓、薬害、公害、などに因る死亡を含みます）未だに地獄があるがごとき様相を呈していますが、それは死者の魂がその過して来た時代を反映し、魂の修業が出来ていない悪霊、地縛霊、浮遊霊がまだまだ増えている状態だからです。

地獄とはそのような魂の処置をめったにせず、三千五百年から五千年の間全体としては手をつけずにいた、その場所に種々の迷った霊が閉じ込められ、また集結し、一つの霊の国を形成していた、それは各国にありましたが、そのようなところを指し、それぞれに支配者とその部下達、一般の何も解らぬ死霊とが群を成していたのです。

そして世界中のあらゆる国から地獄を開放し、強力なサタンおよび悪霊、邪霊、害をなす地縛霊、死霊の類いを消滅致しました。と一口に言っても、恐しいほどの悪霊と全地球上の善霊が戦わねばなりませんでしたが。

そしてようやくそれらを滅し、今ここに初めて世界中の地獄はなくなったということを報告致しましょう。

いま人類に害をなし、人々に悪の行ない、残酷な所業をなさしめているのは最近まで生き残ってお

りましたベー・エルデのサタン夫婦、およびその配下の唆（そその）かしによるものであることが明らかになっております。

これらを支配していた超能力を誇るサタンなどは、この二月十三日まで生き続け、第一番目の書では発表しなかったのですが、私達と力を互角にし、勝負がつかず、実は昨年の戦いの時以来ＧＬＡに逃げ込んでいたのです。

そこから〝サタンの宣言〟などを、つい最近まで出しており、ミカエル佳子嬢は魔の仲介者として各会員にサタンの息吹きと、死の憑依を伝播していました。

Ｇ会は完全にサタンの王国と化していたのです。サタンや超能力を備えた悪霊は、支配する者が善人であろうが、魂の修業者であろうが、牧師であろうが、僧侶であろうが、心を浄化させるため日々努めるものであろうが、差別も容赦も致しません。

そして遂にこの二月二日、最終的に稚乃裕子様とそれを守る私達を全兵力を投じて攻撃し、再び天上界を二分する死闘が始まりました。

高橋信次氏は稚乃裕子様に対し、その戦いの最中、巧妙に暗殺を試みました。もちろん私達の目を逃れようはずはありません。撃退され、その後、幽界に落されました。

実はこれは二度目の暗殺未遂だったのです。一度目は昨年の五月、同じサタン夫婦との争いに向う側に加担致しました。しかしその時も、またこの度も許されました。情状酌量による特赦でした。

そして今度こそ永遠に、二月十三日午前十二時半にサタンは滅され、その配下もアステリヤもギュンタームンクも永遠の生命を取り上げられ、もうこの大宇宙に存在しなくなりました。このたびの戦いは十日間続いたのです。

私達天上界も、その半数の貴重な魂の生命を失ないました。立派な方々ばかりです。私達と幾星霜共に過し、共に努力し、共に魂の修業をし、共に慰め合った方々ばかりです。

しかし死者は日々出ますから、私達はその補充をし、各次元のメンバーは大幅に一新されました。このたびの戦力と今までの功績のゆえにてミカエル大天使長様は新しい大王として、すなわち天上界の最高権威として、エル・ランティ（エホバ）様が退位されると共に来る七月より就任され、職務につかれます。

ラファエル大天使およびウリエル大天使はその時より大王補佐に昇格され、私を含む他の四大天使ならびにアポロ、最澄、空海、空華、聖観世音様の十人はそれぞれ九次元に上り、その能力を与えられます。ベー・エルデの大天使長エル・ビッテルナ・ピラッティライラ公爵（テリエル様）はよくそ

の職務に応じ、私達に助力され、役目を全うして、九次元に昇格されます。昨年以来続けてこの天上界を助力下さることをお願い致しました。元九次元のお三方は宇宙界に上られます。

したがって、宇宙界（九次元より一つ上の段階です）にはこれからエル・ランティ（エホバ）様とミカエル様、ブッタ様、イエス様、モーセ様がおられることになります。

新大天使長は天使カルエルが成り、大天使にはそれぞれ天使パルエル、アルエル、ダニエル、セリエルがなりマーハー・モンガラナー（レンエルと改名）、ペテロ様（ペテロエル）、不動明王様（ラーエルと改名）が加わって、このたびは七大天使、すなわちカルエル大天使長共に大天使は八人となります。これも就任式は七月初日です。

九次元で亡くなられた方は、エル・ソラッティーヤ王、エル・マリエンヌ様、（『天国の扉』第二章王家の系図参照。）系図に載せてありながら、ここに記述されていない方々は消滅されたダビデ・カンターレ子爵、その妻ヘレナ・カンターレ、そして他の方はいまベー・エルデ星におられます。

高橋信次氏は第一章にてミカエル大天使長が正式に発表されましたごとく、この四月二日午前五時十三分その度重なる裏切りのゆえを以て、永遠の生命を取り上げられ、この宇宙に存在されなくなりました。

エル・ランティ様に比べ、ブッタ様に比べ、イエス様に比べ、モーセ様に比べ、他の如来界、菩薩界の地上にて崇められた方々に比べ、その生前は遙かに恵まれたものであり、在家信仰の形で社会的に成功し、財をなし、裕福な人間として、たとえ幼時は一農家の生まれで貧しく育ったとはいえ、天上界のあらゆる祝福と恵みを得て、その数も幸運な七人という兄弟と妹様の中に、自由な想像の世界に遊ぶことも、また友人同志の楽しき集いに時を忘れたり、心は豊かに大きくなられたのです。病身ではありましたが人の愛と慈悲、神の愛と慈しみ、地の利を多く受けて成長されたのです。それが生前の大きな成功となり、メシヤと崇められるまでの徳を養うことになりました。

しかし人の一生は儚（はか）なく、生老病死の域を超え、神秘のベールを通り抜けて素晴しい天国に迎え入れられ、美しい鳥の歌声を聞き、人々の語る徳の言葉に聞き入ったのも束の間、地獄霊の処置、ルシエルの帰還やルシファーの改心と赦し、そしてサタンとの闘いが開始され、心の休まる日もなくなりました。

そしてその間心に芽生えた偽我に天上界を裏切り、それが赦されて後、次元を一番下の界にまで落され、その後情状を酌量され如来界に帰され、そして再び裏切り、その度重なりから遂に永遠の生命を失なうまでまことに数奇な運命となりましたが、私の個人としての意見を申し上げれば、これはま

ことの生老病死を超えた一人の人の生涯と申さねばなりません。
天上界の権威に反抗したがゆえの処罰であり、魂の修業が正しく行なわれていなかったことの証にもなるのです。
一人高橋信次氏のみならず、今までも高次元にありながら、天上界の法に触れ、その反逆的な態度により罰せられ、生命を取り上げられ、すなわち永遠の生命を奪われたものは何人かおります。
しかしそれは世を騒がせるため、発表されませんでした。
一つの社会があれば、そこに自ずから互いに住みよくするため約束が出来、規則が出来、法律が出来ます。それを破るのが罪なのです。天国にも上下の区別があり犯してはならぬ規則があります。高次元の霊に反抗することは許されてはおりません。低次元の霊が三次元で高次元の霊の名を騙ることも、申すまでもないことです。
そして余程の奸計を用いぬ限り、その法の網をくぐることはもちろん難しいのです。能力のある者、智慧の一際（ひときわ）秀れたるものの集団ですから。
最高権威に反して、その指示通り行なわぬものは想像し難い罰を与えられるのです。天上界は徳の高さにより次元が異なり、そして徳高き人の犯す罪は、その罰もひときわ厳しく、極刑が課せられる

のです。それは当り前のことです。

このように己れに厳しき人の集りであり、互いに法を犯すことなきよう厳しく律していられる方々ではありますが、それだけにその慈悲と愛は一層大きく、豊かにその対象となる人々、動物、植物に注がれます。水のごとく、太陽の光のごとく。

「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、私にしたがって来なさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失ない、私のため、また福音のために、自分の命を失なう者は、それを救うであろう。人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。邪悪で罪深いこの時代にあって、私と私の言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使達と共に来るときに、その者を恥じるであろう。」

（マルコ福音書第八章三十四節～三十八節）

このごとく、高橋信次氏も、また今までに罰され、生命を奪われた方も等しく己れの自己保存と我欲のため反って生命を失ない、天上界からは消えてゆかれましたが、イエス様の愛の許しが豊かにあり、ミカエル佳子嬢、奥様、その他御家族の方々はその死で以てあがなわれ、たとえ人間としての死を経るのは必定であっても永遠の生命は与えられ、GLAおよび彼らを知る人々を誤導したとはいえ、その所業は知らぬものの業（わざ）にて、赦されるべきであるとエル・ランティ様が発表なさいました。

但し、天上界に上られて、再び高橋信次氏と同じ罪を犯されるならば、また同じく裁かれ、永遠に生きることは叶えられなくなるでしょう。これにて終ります。

ラグエル大天使

私は律法を司るものであり、この巻においては『天国の扉』で明らかにしなかったこと、すなわち天上界における法律というものもあるということを述べたいと思います。

時は今、最後の審判が行なわれつつあり、地上界の皆様にはいかなる形でそれが行なわれているのか、またいかなる人々が裁きを免れるのか、それを皆様への大いなる助言としてここに述べたく思います。

まず、いろいろな形で最後の審判というものが予知され、予言されて来たことは御存知のはずですが、このたび新たに天上会議において議論の対象となり、決定要因となったものは、人間が〝神の裁き〟というものを何か別世界の、自分達とは関係のない、書物に録されてある事柄としてより以上のものとは考えていないということでした。

すべて災害が来てから、被害を蒙ってから対策を練るという、楽天的である面では怠惰であるとも言える心情で生きているのでしょう。

それはイエス・キリストの十字架の贖いにより、人類の原罪は赦された――罪は許された――したがって多少の罪に生きても神はもはや罰し給わない、という甘さから来ているのです。

無関心であるということの証明になるかも知れません。

遠き昔にあった事柄、起こったかも知れない単なる歴史上の一齣、二千年余の昔、ユダヤという国に生まれた偉大な宗教家が、神と名乗る能力を持つ霊の啓示を受け、恐れまた畏敬の念を持って、正

しき行ないと言葉とも見え、聞こえる説話をした。人々は心を打たれ、その人にしたがい、そして悲劇が起こり、何故(なにゆえ)か解らぬまま、彼らはその救世主と崇された人を失なった。それもこの上もなく残酷な方法で。

そして人々は知らぬ間に神に赦しを与えられ、幸せを享受して楽天的に暮してゆけることになり、もはや神の罰を恐れる必要もなくなった。

それが何であるか神は知らせ給わなかった。神の叡知はそれを人間に当時は知らしめ給わなかった。

そして今、それが何であるかを私達は初めて貴方がたに明らかにしたいのです。

すなわち、神、至高神、天上界の最高権威であるエホバであり、ヤーウェである、エル・ランティ様は人類にイエス様の十字架上の死を通し、人類の罪の贖いを通して、一つの取捨選択の自由をお与えになったのです。善と悪との取捨選択の自由と魂の成長の機会をお与えになったのです。

子が親から離れて巣立つように、人類はそれまでのまたそれからも犯すかも知れない罪を問われず、罪があるならばそれを反省し、己れを罰する心を神への詫びとして、自由なる人間として良き生を選び、悔改めの生涯に何か意義を与え、人々に、己れを十字架につけて、その隣人愛の証とする

――それをエル・ランティ様は人々に範としてお示しになった。イエス・キリストの犠牲を通して。

しかしその後人類は何をなしたか。考えて見なければなりません。歴史を通して人類の罪は再び贖うべくもなく深きものとなったのです。

そして一度（ひとたび）イエス・キリストが人類のため己れの生命を捧げて、神の前に犠牲（いけにえ）の仔羊となった。がゆえに、その後人類が償わねばならぬものは各々の生命で以てしか無いのです。人は人生におけるそのなして来たことの数々、善きにつけ、悪しきにつけ、それらをすべて秤りにかけ、残った重みのある方において裁きを待たねばならぬのです。

もはや貴方がたのために生命を捨てて、罪を贖って下さる方は与えられてはおりません。神の烈しい怒りも、厳しき裁きもすべて貴方方自身で受けねばならぬのです。緩衝地帯は何もない。

そして少数の善なる心の持ち主、敬虔なる心の持ち主、慈悲と愛溢るる人、を除いては、邪まな心の人、悪を育ててその悪について知らぬ、無知で自分勝手な人、怠惰な人、欲に溺れる人、はその罪のためまた愚しさのため神の裁きを受けねばならぬのです。それに相応しい罰を覚悟しなければなりません。

人間が生き伸びるためありとあらゆる手段に訴えて、ただ生きるということのためだけにどれだけ

の代価を支払っても惜しくない。そういった人は多くいます。これは三次元の生命だけのことですが。三次元の生命でさえこのように執着するのですから、ましてや〝永遠に生きる〟ということがどのように素晴しいものであるか、と夢に見、それをただ得るために善行をなす。あるいは神に従順である。あるいはキリスト教会、教団の喰物になる人も数知れぬほどです。

それは哀れな人々です。何が永遠の生命を得るに値する生き方であるかお解りになっていられない。

ただそのことのために言われた通りのことをする。それでは神々はその人の人格を信頼することが出来ないのです。人格をよしとする極め手にはならないのです。

それはなぜか。私達は天上界において、昨年五月よりベー・エルデのサタン、悪霊とその配下を混じえ、何度も戦いを繰り返しました。戦いの繰り返しの中では、能力あるサタンによる恐しいほどの陰謀と術策の中で、力は互角とも見え、勢力と数において、悪霊側が優勢と見えたことは幾度もありました。その中で最後まで天上界の側に立ち、善霊として戦い抜いたものは幾名いたでしょうか。初めの人数から見れば、約半数しかありませんでした。

もちろんこれはこの末法の世に至って起こった現象で、それまではサタンも必死にはなっておりま

せんでした。死闘などということはなかったのです。

それまでサタンとして知られていたルシファーも、合体した天使ルシエルの働きかけで天上界の力に抗するほどの気概はありませんでした。

そしてベー・エルデのサタン滅びし後、残ったものは昔私達と共に泣き、共に喜び、共に苦しみ、共に勝利と栄光を味わった人々が半数、新しき魂が半数でした。

正しい側に立ってサタン側と戦い永遠の生命を失ない、真の死を迎えた方は多くいられます。

しかし悲しむべきことは、戦いの苦しさとその長い期間に善悪の判断がぐらつき、サタン側に寝返り、天上界を裏切った人があるということです。数の大小に関らず、これは驚くべきショッキングな事実でした。

あれほど魂の修業に明け暮れ、魂の転生輪廻の過程で数え切れぬ良き物、良き悟りを得て来た人々が、次元の高低を問わず、我々善なる霊の世界を裏切ったのです。

天上界において、この方々は正義は何かと自己に問うて、そして自己保存（自分の利益のため、自己を他からの攻撃より守り通すこと）に走ったのです。

これは永遠の生命への執着でした。サタンはその攻勢の大なること、その兵力の無限なること、決

して天上界を滅ぼさずんば止まぬことを宣言し、そして善霊側は数がどんどん減っていました。
そしてサタンはその時自分に加担するものは、味方するものには、〝永遠の生命を与えよう〟と申したのです。
善悪いずれにも関らず永遠の生命（何か大変素晴しく見えるもの）を約束された時、三次元の多くの人は強く見える方に付き、弱く見える方を滅そうとするでしょう。天上界の善霊も同じことをしたのです。
人間の魂である四次元の霊は天国にいながら、同じ愚かな心を持ちました。
それゆえ私達の戦いは一層苦しいものになり、一層長く続くものになったのです。それはサタンとの最終的戦いが二月二日から十三日に渡って行なわれた時のことでした。
私達ははじめて知りました。最後の審判において何を基準とすべきであるかを。
その基準とすべきは次のようなことなのです。またこれは今後、天上界（天国）に迎え入れられる基準にもなるでしょう。
最後の審判において与えられる永遠の生命はいかに生きる人に与えられるものであるか、また天国に迎え入れられる人とはどのような人であるか。

イエス様の山上の垂訓により証せられた人々による善人の基準を外れてはもちろん駄目です。しかしそれ以上に光（善）を求めなければならないということです。植物も動物も生き伸びるために太陽の光を求め、その光の当らぬものは死を迎える。自然淘汰してしまう。そのように人間もあらゆる事をして神の恵みと光を求めなければ、神は光を与え給わない。恵みを与え給わない。その恵み（永遠の生命）はしかし、太陽の光と同じく光が当るところにおりさえすれば降り注ぎ、与えられるものであり、自然に得られるものでもあります。

しかしこの光(善)はただ求めただけでは駄目なのです。善のために戦い、善なる心に徹すること。それがいかに困難なことであるかは、密林の中の木々が曲りくねって太陽の光を求め、根はうねりにうねって水を求める。それは死闘さながらのものを思わせます。

それほど〝善に徹して生きる〟ことは難しく、また天上界に迎え入れられるものも数少なし、ということを私は皆様に改めてお知らせしたいのです。

このたび天上界の戦いで出た半数の人の裏切りに加えて、高橋信次氏の生前のあれほどの善行と徳行にも関らず、天上界において天上界を裏切り、悪魔とも見える行為をなした。それが天国の規約を一層厳しいものにし、永遠の生命を一層数少ないものにしました。

これはまた見方を変えれば、人類が一つの大きな自然の法則に生きているということの証です。苛酷な自然の中で動植物は適者生存を強いられ、またそれにしたがって生き、種族が残り保存されてゆきます。

しかるに人類は、いわばいままで神の恵みと保護がありすぎて甘やかされ過ぎた、と言っても過言ではないと思います。

これからの天上界より与えられるものは〝塩からいパン〟です。水はそれぞれの心の中の〝善なる心〟。自分で求めて得なければなりません。

そして〝善なる世界〟が、これから人間が生きていかなければならぬと与えられたところなのです。

〝善〟とは厳しい秤りです。その秤りに乗らないものは適者生存の法則から外れて、三次元では日陰に（不幸に）生き、四次元では遂に生命を失なうのです。

善人のみが天国に迎え入れられるのです。善人でない人には天国の門は開かれません。〝善人なおもて往生す。まして悪人においてをや。〟というのはもう通用しなくなりました。イエス様の罪の赦しの期間は終ったからです。ブッタ様の慈悲の光も届かなくなりました。

これは人類があまりに自然を冒瀆し、自己の悪なる心で自然の秩序を破壊した。（これは人間社会の無秩序をも含めてです。）そのために償わねばならぬものなのです。

そして善悪を知る人類はその責任と義務において、罪と悪を容認してはならないのです。

パヌエル大天使

私はこの科学万能の時代にありながら、五、六年前より突如として霊の問題が世界各国に取り上げられ、あたかも時代の脚光を浴びて科学文明華やかなりし二十世紀が、それを裏切るかのように暗躍する霊の暗示、原始時代の遺物のごとき霊的託宣によって徐々に占められてゆき、世の知識階級に時代錯誤の感を与え、人々に戸惑いを覚えさせているのではないかと思います。

しかしいつの世紀、いつの時代にも宗教は日常の生活から切り離されたことはなく、科学者と言えども、究極においては自分達の力およばざる神秘の世界が存在し、三次元の常識では計り知れぬ謎が、あたかも真理の発見を待つがごとく人々にその世界を匂わせているとそう解釈されてきました。

そしてその神秘のベールがいまおろされ、謎の世界が明らかにされているだけなのです。
昨今の現象は原始宗教の名残りでも何でもなく、昔から常に隣接していて人々の側に在った――その世界が明らかにされただけなのです。
それがあまりにも一目瞭然に目の前に在るがゆえに信じ切れないのでしょう。日本の科学者はなおも、その奥に未開発の探究されざる神秘の世界があるのではないだろうか、と疑っています。
なにゆえ今まで求めてきた神が人々の前に現われた――のに、それに対し、一言も発言をせず、半信半疑のままでいるのか。それが私には不思議でなりません。
世界にはまだまだ怪しげな宗教が蔓延(はびこ)り、霊示の偽物が横行していることは否めません。
しかしそれだからといって、科学文明の先端を行く専門家に、技術の権威に、医学者に、何が真実のものであり、納得しうる理論であり、何が虚偽で曲論であるか、その是非が解らないはずはないのです。
知識は蓄えて切り売りするためだけにあるのではなく、それを用いて判断の目安となる、真理探求の、真理を発見するゲージとならなければなりません。
ただ、専門分野においてだけそれをするならば、科学者は世界が調和して一つのことをなす、たと

えば理想郷を作ること、に参加していないことになるのです。

私は『天国の扉』が世に出た時に、多くの科学者が先を争って読み、少なくともそこに啓示されたことによって、科学する者の心構えが変ってくるものと期待していました。

科学者は常に神、霊魂、天国、に関心を示し、その神秘の向う側を覗きたいと思っているものと考えておりました。そのとおり、いままで出た九千冊のうち六千冊は科学関係者に売れたとの報告を四次元で受けております。

そして科学者を啓蒙、啓発し、善なる心、良心というものが研ぎ澄まされて、それが彼らの日常の行動、仕事の上の意見として表われてくるものとばかり考えていたのです。

六千冊のうち十三人だけ読者から手紙を受け取りました。そして化学関係の方では五人、医学関係は六人、物理学関係は二人の読者の名前を知ることになりましたが。六人だけでした。何もこちらから申し上げない前に使命に目覚め、そのために何かいたしましょう、何かしなければ、と御相談を受けたのは。

正法流布のため集いを持ち、正法を説いて下さいとお願いしてそのため積極的に勉強されるのは、反って文化系の識者か、あるいは極く普通の学歴を持つ社会的に困難を乗越えてこられたかた――の

方が多く、そして正しい反応がありました。

私達は宗教というものの虚しさ、宗教団体の愚しさについて説きました。そのことを他の方々に伝えて頂きたかったのです。もちろん内容は進化論に言及し、宇宙の法則を解明し、何ゆえ人は一人一人がその責任と義務を呼び覚されねばならぬかということから、徳を高めることがいかに大切であるかまで一つ一つ説いてゆかねば聞く人を納得させ得ないでしょう。そしてこれは宗教運動ではありません。むしろ宗教反対への動きと取って頂きたかったのです。

でなければ私達はもっと私達の大いなる力を用い、恐れと服従を強いてあなた方や他の人々にこうすべきであると述べたでしょう。

科学的な心を充分備えた人の多く生きるこの世紀であるからこそ、私達はことを分けて説明し、理論的手法を用いて神と人との繋り、天国と地獄とはどのようなものか、その実在性について充分解き明し、納得して頂けるものと思ったのです。

また読者の中で科学の分野にある人が、率先して私達に連絡し、いろいろな疑問を率直に打ち明けて私達と話し合って下さり、地球の滅亡を防ぐ手段はと問うて下さる気持にもなられるかと思いました。少なくとも天上界は、特に日本の科学陣に期待し、合体した霊の奨めと励ましにより（意識を通

して）使命に目覚めたと連絡して下さることを望んでいました。

これは日本の科学者の消極的な日頃の在り方に起因するのかも知れませんが、私個人としては大変失望の時を味わったことを告白せずにはいられません。

静かに各々の研究に没頭し、日を過し、一生を終えるうちに世界は滅びるかも知れないのです。

『天国の扉』という本の題材は単なる霊現象から取られたものか、あるいは新しい宗教の運動の類いであるとでも思われたのでしょうか。素直に偏見を持たずこの書に書かれてあることを読まれれば、その内容が一個人のものから出たのではないこと、厳然たる宇宙を支配する真理が語られていることを直感せざるを得ないはずです。

なにゆえ三次元のみを最高の文明の展開せる舞台とみなし、四次元は原始的な世界であると結論を下すのか、私達には理解出来ません。

それは与えられたものを素直に解釈し、納得すべきは納得し、疑問を持つべきは問うて解明し、一人の社会人として、文化を担う者として、新しき世紀を迎え入れる一員としての資格を明らかにする、そのエネルギーに欠けているからではないでしょうか。

向学心があり余るほどにありながら真理に目を背けるのは何故か。私達には理解出来ないのです。

世界が動く方向に動き、世界が求めるものを与えるため学識の分野で努力し、ノーベル賞受賞を最大の夢とする。それ一つを見れば平和な生き方、人となりかも知れません。

しかし見方を変えれば、人類が破壊を求めるならば、科学者はその破壊の材料を唯々諾々と提供するのです。

〝核エネルギーの平和利用を〟と課題を出されれば、そのために一生を賭けて研究するかも知れません。

しかし核エネルギーが平和に役立つでしょうか。その弊害は地球人類の滅亡へと導くだけのものです。ただ兵器として大量殺人に用いられるのを防ぐためだけの効果しかありません。結局は時間をかけて人類に害をおよぼす。果してそれで良いのでしょうか。

それを見極め、断言するだけの判断力と予知能力を与えられていないはずはないし、知識も有していないはずはないのです。

私は決して日本の科学者の穏健思想を糾弾しているのではありません。世界の某最大強国間における秘密裡の軍事拡張競争、軍事産業の発展による巡航ミサイルや中性子爆弾の改良、開発に大統領の公式の許可を申請する、あるいはヨーロッパの某国においては、小規模ではありながら大っぴらに実

験を行なう、などという無謀な企画が表面化されてきていますが、これらの大型核兵器製造に参加、関与するのはいつも科学者、技術部門の専門家なのです。官僚機構に追従する科学者の良心は、これら大国の良心とならび批判されるべきものと私は思います。

私は特に日本の科学者が優秀であるがゆえに期待しているのです。核爆発による被害を受けなかった、反って加害者の立場にある大国の識者によるものではなく、日本の科学者が率先して軍縮委に働きかけることも出来る。世界の良心となり、残虐な兵器使用が何に至るかを説き、平和を推進することも出来るかと。

今までの日本の科学者の良心について、私の率直な意見を述べますと、全体において自分の良心にしたがって世界を善なる方に向け、平和を築くために発言をする勇気が無いように見うけます。

そして赤軍派のテロリスト、都市ゲリラと同義にしか私達天上界の者には解釈されないような、三次元の法を破壊する若者を甘やかし、そのシンパとなり、ロシヤや中国の広大な国土と人口を持て余す国が支持する、そういった国であるがゆえに指導力を発揮するに至った、しかし極端に歪められたり、あるいは変革を余儀なくされ、そしてやはり正しい形ではないマルクスレーニン主義思想を、理論の優劣をのみに言及して、知識人の多くは後に続くものに賞揚し、伝承するような人もおります。

封建制から軍国主義、そして共産主義政治へと国家の体制は推移しても、本質的には非個人的、非人間的、人権無視思想には変りがない全体主義国家であるという、その欠点が見抜けないのです。

彼らは何が善で何が悪か見極めることも出来ないのでしょうか。行動におけるものと理論におけるものとその正邪を判断しなければ、真に知識を得たものとは言えません。

私達は決して今の社会が理想的だとは言っておりません。

しかし*T教のような性道徳の退廃を推奨するようなこの団体に、共産主義の識者、科学者が多く入団し、理論を弄び、議論に時を費す。そしてしていることはヒッピー族と同じ。多分科学的社会主義、共産主義の理論とこの教団の教義は相通ずるものがあるのでしょう。（*世界基督教統一協会）

憂うべきことに、科学者の良心が麻痺したがゆえにこの地球の危機を招いたとさえ言えるほどの現状なのです。

科学者は宇宙の構造、仕組みの精緻であること、その神秘なまでの秩序に触れて何ら感動を呼び覚されることはないのでしょうか。心を打たれるところはないのでしょうか。その感動が生き生きと波打っているならば、その美しく整えられた宇宙の秩序と法則を破壊するものからはすべて手を引き、お互いに戒め合うくらいの良心がなければなりません。

他国の科学者はそれをなしています。

私達はこの国の科学者がまだまだ精神的に甘やかされた子供であり、（世界的にも科学者はえてしてそうですが）子供であるがゆえに純真で、そして必然的になすことの善悪の判断に欠けているのだということを認めねばならないのです。科学者達もそれを謙虚に認め、今後の職場における、研究所における職種、研究対象の選択、生産の制限、改善に努めることこそ反省（正定）と言うべきものでしょう。

宗教と科学を切り離して考えないで下さい。切り離すところに大きな人格的欠陥が出てくるのです。

科学者こそ神とは何か、人間とは何か、その在り方、なすべきことを常に認識し、人に問われれば説けるものでなければなりません。

人間に対して無関心で、学問をのみ追求するがゆえに、道徳心が歪められ薄れてくるのでしょう。発明、発見結果に対して責任を負わない人格が出来上るのです。

ことの正確さをのみ問うていては、果してそれが善悪の基準に当てはめる時、どのような性質のものであるか――そのことに関して第二義的にならざるを得ないでしょう。

善悪を知り、それを選択し、行為に表わす。それを可能ならしめるのは人間のみに与えられている知能の高さです。

原因結果を究明出来るのは人間のみです。そしてその対応策を考え得るのもまたしかりです。

最高の知識を得ていても、道徳心が欠如していては、知能犯と同じであると結論を下されても反論できないのです。

そしていかに学識者に徳の心を欠く人が多く見られるか——それは歎かわしい限りなのです。

それゆえに天上界においては、善悪を追求する僧職、宗教家がずっと高次元を占めてきました。人類に寄与するのは僧侶の徳の心、神の教え、の方が大きいものがあったからです。

徳が養われなければ、知識だけでは世の中は改善されません。

そして今まではそれで一つの秩序が保たれていました。しかし天上界の極く高次元を占める方々が実は科学者であり、科学者の転生であるという説をなるほどと納得されたならば、これからは科学者は考えを改めて頂かねばなりません。

事実、私達七大天使（ミカエル大天使長を含む）および最高権威であるエル・ランティ様は、ベー・エルデでは科学者（物理学者、医者）が多く、またその転生の過程でも、科学の知識を出来得る限

り身につけました。それは『天国の扉』では発表いたしませんでしたが。

そしてもし、私達が地上に平和が齎された時を境にこの地球を離れ、他の星に行くとすれば、（あるいは地球上の平和を諦めてただ去るとすれば）後は再び地球人類の手に天上界と地上は委ねられるのです。

四次元と三次元の平和は心のみでなく、多く科学的処置を必要とするのは真実です。森羅万象物質の世界に私達は住んでいることを忘れてはなりません。

それを観念的に解釈しているだけなのです。宗教家と言われる方々は。

しかし宗教家だけでは科学知識の豊富な悪霊と戦い、滅すことは出来ません。私達は物理学者がサタンと化したもののためにそれを如実に知り得ました。

地上の平和を維持するために科学者の知識が絶対に不可欠のものであることは、稚乃様の書かれます〝超物理学上の謎の解明〟にて明らかにされるでしょう。

もちろん私達もあらゆる情報、知識を提供いたします。そしてくり返して科学者として世にある方々に申しますが、宗教と科学は共に人間の知識と知能から出たものであり、天国と地獄が人間の作ったものであると同様、それは一元的に解釈すべきものです。決して別個に存在するものではありませ

ん。

これは宗教家にも言えることですが、科学と宗教が対立し、宗教が科学文明の進展を阻害する、つまずきとなる。そのような暗黒の十六世紀がこの現代に再びくり返されてはなりません。

そして同じ人間の二面である以上、科学者もまたその良心において、最後の審判の対象とされていることを忘れてはなりません。

ウリエル大天使

現在世界数十ヵ国で、政治の本質を知る者は、ほんの一握りほどです。

そして末法の世らしく世の中が乱れ、政治の腐敗が至るところに見受けられるのは、一人それぞれの国の責任でもなく、また行政機構の優劣のみでもありません。

なぜならば、それを許した参政権を有する国民全体もその責を問われねばならないからです。

ではそのように混乱した社会をどのようにすれば良いのか――と申しますと、数千年におよぶ人類

の歴史に刻まれた変換期を思い出して下さい。フランス革命、明治維新、独立戦争、などです。

明治維新を例に取ると、まず民衆が世が変わることを要求し、その声に育てられ、それに応えるかのように英雄が登場して来ます。

そこで英雄達、坂本竜馬、西郷隆盛、木戸孝允などは、時代の変革の流れに乗って旧体制を打破し、新しい体制を確立しました。新しい時代の誕生です。ナポレオンも同じような時代を背景としています。キューバのフィデル・カストロまたしかりです。

結果の良し悪しは問題外として、どの革命もほぼこのような形態を取りました。

さあそこで考えることは、果してこの変換期である現在、世の中が変革されることを望んでいる社会は真に英雄を必要としているか否かです。

答えはノーです。

なぜかと申しますと、今まで行なわれて来た革命と、現代が要求している変革は根本的に質が違うからです。

その根本主義は民衆の個々の権利、自由を確保し、利益に供する政治、政治形態を目するものでなければなりません。

それまでの革命は旧体制が人権を無視するものであったため、民衆を苦しめる原因となるものを除き、改革が行なわれました。

そしてここ日本においては現在のところ、意義を持つべきはずである政治が腐敗しているとはいえ、形態は民主主義、資本主義の形を取り、不満がありながらも一応人権尊重の上からはそれをあえて大幅に変革する必要はありません。

それが私達天上界の意見なのです。

他の政治形態、社会主義国家、共産主義国家、独裁政治に牛耳られる国家に比すれば個人の意見、生活は曲りなりにも保護されています。

同じことですが、アテネのポリス政治において国家的英雄を必要としなかったように、米国ならびに他の民主主義国家の中でも強いて一人の英雄崇拝、それに国民が盲従するという必要はありません。

社会全体が退廃するのは、国民一人一人の意識の後退から良心の麻痺、堕落への総合的結果であり、それを健全な方向に持ってゆくためには、個人々々に呼びかけてその自覚および精神生活の改善を待ち、社会全体の健全化をはかれば良いのです。言いかえれば、それしか手段は無いということです。

一人一人が意識の革命を起こし、一人一人の手によって目に見えない部分を変えてゆくしか無いのです。意識の向上とも言うべきでしょうか。

そしてそのために私達天上界は高橋信次様が御在世中に正法を三次元の皆様に伝え、その死後、メシヤ信仰に陥りそうであったG会の解散を暗に目して、〝一人一人が法の継承者となれ〟と再びこの方をして言わしめたのでした。

日本がいや世界が、神の法たる正法の伝承をするにメシヤ（一種の英雄的存在）の出現を待たねばならぬのならば、再び英雄崇拝に甘んじる意識の低下により世界の精神は後退し、知的レベルの高さにも関らず、非文化国家、低開発国の国民に見られる、少数の指導者によってしか統一できない国の集りとなり、そしてそれがいずれは独裁主義、全体主義などの個人の権利、利益無視の政治形態を招き、世界大戦の可能性の誘因ともなります。

天上界が民主主義政治形態を世界の平和、ユートピア作りに推奨するのは、それが個人の基本的人権を保障すると同時に公共の福祉にも資するものであり、専制権力への防止として国民に主権を与える、すなわちすべては人類個々の生命・自由および幸福追求の権利を確保することを目的としており、そしてその中において個人個人の責任と義務の履行が待たれる。

すなわち正法と同じ性質を有するからなのです。

残念ながら、現今の民主主義政治はともすれば、一特権階級の進出、（貧富の差など）一政治家の支配（ソ連のプロレタリア民主主義の名の下にスターリンの支配が継続し、全体主義国家の様相を呈した）や、米国における極右的思想（マッカーシズム）などにより腐敗と危機を呼び、今や単なる特定の政治体制として扱われることにより、その価値が世界に認められなくなりつつあるのですが、民主主義の真の目標とするところを学び、検討する時、その原理が神の国を築くために最も相応しいすなわち正法に叶うものであることが理解されます。

それを私は再び皆様の前に提起し、そこに豊かに唱われている精神重視の思想、神の前には人は等しく平等であり、すべてを選択し、個人の理念に基いて善のために社会に奉仕し、人類に奉仕する、そして神の愛と平和を人類愛と人類相互間の平和に変える――そのような世界が齎されることを私は心より願っております。

この最後の審判は現今の堕落し腐敗した社会にメスを入れ、その患部を切除する役目を果すもので、今までの内科的投薬による療法が効を奏さなかったために、切開、切除という外科的手段に訴えざるを得なくなったものです。

その後の速かな回復が待たれます。

サリエル大天使

この第二巻で発表されていることは、もう一度はっきり述べますと、人類の一人一人が神の前にその罪の重さと精神の病巣により裁かれなければならないという、末法の世に生きるものとしては避けがたい宿命的結末を迎えたということです。

出来得ることならば、そのような事態を最後まで避けたく天上界は、努力致しました。

しかしサタンの王国建設の執念の前に幾多の困難があり、その度重なる執拗な攻撃に、三次元の方々が理解出来ぬ死闘をくり返しました。

多くの人々は高橋信次氏を通して迷える霊を救うため、慈悲と愛の言葉をかけるよう天上界が指示した――それを唯一絶対の除霊法と信じ込んでいられるところに誤りがありました。

ベー・エルデのサタンは物理学者としての一生を終えた科学的知識を備え、九次元の能力と同等の

能力を自分で案出した方法で身に着け、その妻も同じ知的レベルの高い者でしたから、霊界においてありとあらゆる犯罪を犯し、三次元を悩まし、ベー・エルデを追われたものでした。

地球に来て同じことをくり返し、第二代目のサタンとされていたものがこの妻にあたるのです。第一代目のサタンはもちろん夫の方です。

それぞれに天上界の慈悲と愛により改心し、三代目のサタン、ルシファーが地上にいた時には天上に上っておりました。

それがルシファーの改心と共に再びサタン化し、今度は二人で地上と天上を荒らしたのです。

天上界は恐しい混乱を来し、その混乱の末、死闘が展開され、ありとあらゆる科学的手法を用いて霊の多くは完全消滅にまで至ったのです。

負傷などというものはありませんでした。お互い消滅するか、されるかだったのです。それゆえ死闘と申したのです。その科学的手法は公にはされません。その知識でまたサタンが生まれるかも知れないからです。

このように、ベー・エルデからは奇しくも神々と悪魔が地球を訪れたのです。そして神々は神と等しき人々を作り、（精神において、魂において、作ったと言えばその意義は深いものがありましょう）

悪魔は悪の魂と精神を養成しました。

これは神話でも何でもなく、真実の証として申し上げております。人間の中に本質的に存在する崇高さと獣性、それは神から来たものと悪魔から来たものなのです。

純真で美しい心の人が、ある契機を経て突然に堕落し、あるいは犯罪に走り、非運の坂を転げ落ちる。これは四次元の悪霊の干渉によるものなのです。

生まれて間もなくより、善霊に守り導かれて育つ人間の意識のどれだけがその人独自の意識と悟りによるものか、それは驚くべきことに半分なのです。

合体霊の性格が半分、その人の肉体の親からの遺伝的性格（先天的なもの）と環境教育による性格（後天的なもの）とが占める率が半分。そのようにして一個の人格が一生を通して形作られていくのです。その間に悪霊、サタンの誘惑があれば、それから抜け出る智恵と防御本能、そしてその経験から習得した知識、そのようなものの集積が善我の歴史であり、魂の修業とも申せましょう。

絶えざる悪霊の妨害に、天上界は昔は、特定の方を除いては二人、合体霊と守護霊のみが人間を守っていましたが、この最終的末法の世に至り、三人の善霊が人間を守ることになったのです。合体霊と守護霊と指導霊と。

今再び天上界は二月十三日を境に数が半数に減り、新たに死者の出る毎日、少しずつ良き魂をその補充に当てていますが、今以て欠員が多くあり、人々には二人、合体霊と守護霊としか残らなくなりました。止むを得ぬ処置です。

しかし日々に増えつつある天上界の新しい魂達は、修業を始め、ようやくのサタン消滅を経て、明るい気運が漲っております。

なぜならば天上界は審判と執行が終ったからです。

三次元の方々も半数は裁かれました。執行はいろいろな形で行なわれるでしょう。

そして残り半数は比較的少ないあるいは全然裁くべきところのない方々です。

それら半数が真に天上界に迎えられるべき人なのです。償いを済ました方々と、喜びを以て天上に迎えられるべき方々と。

六大天使は罪の裁きについて最後の審判の厳しさについて述べて来ましたが、私はその絶望から救われる人々について述べ希望と未来について皆様に証したく思うのです。

さて、医学、薬学というものは医療上の過失誤診などによる被害はさておき、その目的とするものは人類の病を癒し、生命を救う尊い使命を持った神の業です。

もちろんすべてのこの社会福祉に貢献する人々が完全であり、その技術が優れているとは申しません。

若い医師の中には、やはり社会風潮に迎合して、人格の至らぬ、医療を一つの技術としか考えぬ、医師の倫理から見れば堕落した人々もおります。

しかし全体として、医師、看護婦、社会福祉関係の人々の中には、人類奉仕の精神と信念に基づき、激務に耐え、責任を果している人が半数はいるのです。

これらの人々は特にその信念が強く理想主義的な人生を歩まれます。自分の一生を賭して人々を救うために働くのです。それに比すと宗教家の努力など足元にもおよびません。

しかるに近年とみに医師の過失に対する、あるいは病院設備に関し、あるいは医師個人の収入に関し、世間の非難、告発の風潮が過度に高まり、生命を救うべき人々を呪うような不思議な現象が見受けられました。

それはサタンの跳梁により人々が神に背を向け、善霊への協力を拒否したのと時期を同じくしました。

今より後、サタン亡き後、そのような考えは改めてゆかねばなりません。

なにゆえか、それは私の説明を待つまでもないでしょう。医師なき暗黒の時代もあったことを歴史の上で振返ってみて下さい。

天上界は、人々の悩みと苦しみを己れのものに置き換え、生活上のあらゆる犠牲も省みず、ただ人を救い、病いを癒す努力を続ける医師達、看護婦達、社会福祉関係の人々、には恵みと光を与えることを改めて告知致します。

それは善霊の技であり、神の助けとなるものだからです。

ただし人命を預るものの責任は大きく、東洋、西洋の医学を問わず、有害とされる治療、反って人体の健康を害するような治療を行なうものは速やかに改善あるいは無くし、自然の恵みにより与えられた人間の身体の健康維持のため、また貴重な人材に社会により良く貢献する機会と場を与え、またその働きの期間を長くする――そのために医薬、治療法はあるものでなければならぬことを、社会の良識として医師はむろんのこと、一般人も心得ねばなりません。

医師の立場においては、医学総会における決定において多数派意見による民主主義的あるいは独裁的（保守的な意見による偏見や、権威に追従しあるいは教授の派閥を作ることなどです）あるいは非人格的に流れず、たとえそれが一医師のものであっても、治療に関していかなる新しい考えも研究も

慎重に検討し、少数の意見も良いものであればどんどん取り入れ、今もって完全に理想的な医療法が発見されず、どこかに欠点、難点を抱えている現状を打破するために、一科学の部門として真剣に病因の解明に、治療法の改善に取り組んで頂きたいのです。

こののち、地球人類が真に賢明なる人格となり、魂となり、天上界を構成し、私達の後を受継ぐ方々となるかも知れません。そのためにもあらゆる分野において最高の知識を目指し、人格の浄化を目指し、いかなる悪とも迎合することなく、徳高き人々が医師の中から出られることを希望しております。

なぜならばエル・ランティ様を含む七大天使がすべて過去において、ベー・エルデにおいても、また地球上の転生の歴史においても、医師としてあらゆる分野を研究し、責任と義務を果してこられたからなのです。

天　上　界（図解Ⅰ）

	宇宙界	天上界最高責任者		天上界の王及びすべての徳と能力を備えられた方
宇宙意識100％	太陽界	9次元	慈悲と愛のかたまり	＊すべてが自分である。（宇宙即我）宇宙と自分とは同じである。
		天使界		
	如来界	8次元	自分と他人の区別が無い	＊すべてを見通している。自他一如（医者他）
天上界	菩薩界 動物が保護されている	7次元	自分よりも他を優先する	＊自他の区別がある。（医者他）
	神　界	6次元	大分欲が薄れている	＊宗教関係者，大学者，大芸術家の世界。
	霊　界	5次元	幽界よりまし	＊芸能人のような人（スターなど）水商売，教祖。
地上	幽　界	4次元	損をするといつまでもこだわる	＊俗世と同じような世界。見栄が強い。執着も強い。スターのファン。

地獄界
（自我意識100％）

新宇宙界および太陽界の構図（図解Ⅱ）

（1978年7月より有効）

宇宙界		ミカエル ブッタ，イエス モーセ （エル・ランティ）
太陽界	九次元	ラファエル ウリエル テリエル ガブリエル ラグエル パヌエル サリエル アポロ 最澄 空海 空華 聖観音
太陽界	天使界	大天使長エル ダニエル（通信・伝達） アルエル（律法） セリエル（医学・薬学） ラーエル（政治・経済・自治） ペテロエル パルエル（科学全般） レンエル（芸術・文学・歴史） （七大天使）
太陽界	天使界	その下に働く天使大勢 リリエル（リーダー） サミュエル（リーダー） テルエル（サブリーダー） マリヤエル（サブリーダー） レナエル（サブリーダー） サイエル（サブリーダー） 残っていられる天使方、ならびに如来界から上げられた方々、及び今迄諸天善神であられた方々。 （諸天善神には如来界から志望者がなられました）

〈希望の星へ〉

第四章　イエス・キリストの章

私イエスはおよそ二千年前（紀元前六年）に、ユダヤのベツレヘムという町に生まれ、その時、ヘロデ王という悪政で名を轟かせたユダヤの王が、ユダヤ人を救う救世主の誕生の予言が真実であるらしいと学者達、祭司達、予言者達より聞き出し、それを恐れて二歳以下の男子を生まれたての嬰児も含めて、斬殺するよう命令を出したのです。

その時私はガブリエルという大天使に母マリヤ、父ヨゼフと共に導かれて、エジプトの地に逃れ、生きのびました。

ガブリエル大天使は私の母マリヤに受胎告知をしたことで、キリスト教の聖書にも記述されてあり、よく知られています。

私イエスには母の胎内にあってすでに、天上界より降りてこられたビルナビルと言われる立派な方が合体され、この方はベー・エルデ星より来たった王の第二子で養子でした。（『天国の扉』参照）（普通は三ヵ月まで合体霊は降りません。受胎告知と同時にマリヤ様の中に入られたので、〝聖霊によりて妊り〟と天上界より知らせを受けられたのです。――編者）

そしてミカエル大天使長、すなわちすべての天使の長（おさ）であられる方が守護・指導霊となり私の生涯を通じて主の道に沿い、人々を教え導くため意識に働きかけ、悟りへと導かれたのです。合体されたビルナビル様と共にでした。

その後、ヘロデ王の死と共にガリラヤの町にあるナザレというところに帰り、幼時を三人の弟と一人の妹と共に過しました。

十二歳になった時母マリヤはもう一人の弟を生みましたが、その弟が生後五ヵ月になった時、その嬰児（みどりご）を連れ、両親と私と八人で過越の祭りを聖地で過すため、エルサレムという寺院のある町に上り、そこで私は学者に留められ、両親達は知らずに帰ってしまいました。

そこで仕方なく、三日の間宮の中でいろいろな人々と語り合い、祭司や学者や、教師達と問答をしたことは、新約聖書にも語り伝えられている通りです。

その時私は、メシヤとしての資格を天より与えられました。

私が賢く導き育てられなかったならば、私はメシヤとしての使命を取り上げられたかも知れないのです。天はいつも使命を与えるものの智恵と人格を験されます。

〔もしミカエル佳子嬢が高橋信次氏に次ぐメシヤであると定められていたのならば、いろいろな面でイエス様と比べなければならないのです。ブッタ様と比しても遜色の無い立派な方でなければなりません。しかるにその逆の在り方を示されました。〃イエスもブッタもモーセも説かなかった法を説きます〃と不遜にも宣言され、破壊的な行動の数々を示されたのです。

わずか二十歳で悟りを得、人を導くことなど出来ません。天の声を仲介して霊能者としてなら出来るでしょう。それ以上ではないことを天は示し、心ある者はG会に属しながらも見抜きました。

しかしながら、全体としてのG会は頑くなに真実を拒み続け、高橋信次氏が後継者と紹介され、霊能が優れているという点のみに惑わされて、次なるメシヤとしてミカエル佳子様を信奉したのです。しかしミカエル、この私はすでに外部におり、G会は私の名を冠した偽天使を崇め、その言葉の一つ一つがいかに非常識で、陳腐なものであろうと、お言葉を給わるたびに感涙にむせび、大の大人が愚しい言動を恥知らずのように披瀝し、天上界と私に恥を来らしめたのです。

著された本にしても、一巻、二巻はK・Hなる作家が書かれ、三巻目の本は高橋信次氏の遺稿より抜き書きして、多分高橋信次氏の助力により、ミカエル佳子嬢が編纂されました。人類を救うべく使命を受けた方がこのような偽りの履歴を作るでしょうか。

それらの本が意義深く立派なものであるとすれば、それはこの私がミカエル佳子嬢を通じて語った第一巻、地獄篇なるものと、高橋信次氏遺稿の第三巻、黙示篇のみでしょう。

この方はイエス様のごとく御自身で人を救っていられますか。病いを癒していられますか。もしそうであるとすれば、高橋信次氏がお子様を哀れと思い、手助けをなさったのでしょう。（偽者であることの証に私達は助力致しませんでした。）

そしてそれは私達天上界への裏切りであり、高橋信次氏はその一方で千乃裕子様および七大天使の生命を狙い、危くせしめた。そのため、お生命を落され、永遠に帰らぬものとなられましたが。私達には理解出来ぬことです。

高橋信次氏が何故御自身の非を素直に、あくまでミカエル佳子嬢は後継者、とした場合に人類を御自身に次いで救うだけの人格と智慧が無いことを主張し通されなかったのか。

振返ってみれば、昨年六月より八月初めまでの二ヵ月に満たぬ月日だけでした。G会に御自分で呼

びかけ誤りを正して歩かれたのは。後は表面と裏面と別の行動を取っていられたのです。

それゆえミカエル佳子嬢は少しもお悟りにならず、御自分がサタンに踊らされていることも気付かれなかったのでしょう。お気の毒とは思います。

しかし天上界の真実、正義とは、そのような軽薄なものではありません。

天上界はGLA解散を命じます。新興宗教団体となるのは許されておりません。まず同会が世の範となるのです。宗教団体の無意味であることが充分示されました。同会はその責任を取り解散すべきであることを天は望みます。

そして他の諸々の、人間が人間を導く俗人の団体に過ぎぬ新興宗派、および既成宗派も、解散しなければなりません。

天の認めるものはただ原始仏教、原始キリスト教に準ずる、浄化された、聖霊により導かれる宗派のみです。

数え、突き詰めてゆけば、五、六種類のものしか残らなくなるでしょう。

私はここに名を挙げませんが、時と共にそれらは自然に解体してゆくでしょう。それは今より後、五、六百年以内に実現するのです――〔ミカエル大天使長〕

私は長ずるにしたがい、人の生きる道、死の苦しみ、病いの癒し、などについての疑問が湧き、その疑いを晴らすため、自分で考えもし、人に聞いてみたりもしました。答えは私の頭の中に自然に浮んで来ました。十二歳の時に教師達と問答をした時のようにです。

父は厳格な人でしたが、信仰心厚く、母マリヤは優しい一方の人で、子供達の面倒をよく見てくださいました。

十六歳の頃の私は、弟達と妹の世話をし、父ヨセフの大工としての仕事を手伝いつつ、暇があれば読書に耽けり、ギリシャ語の勉強をしたり、あるいは旧約の教典を学びました。翌年の暮に父が病を得て亡くなってからは、私が働き、家族を養いました。それでも天なる父については学び続けました。

史実としては伝えられておりませんが、私もまた一人の人間としてこの地球上に一生を終え、聖書に録されてあるような、神格化された人格を貫き、生き方を必ずしもしたものではないことを明らかにしなければなりません。奇蹟や証は、私が天上より使命を帯びたものとして、世に知らされたに過ぎないのです。

人の生き方、人生観、哲学は、人一人一人によりそれぞれ異ると思いますが、やはり悟りを得て人類のための使命を感じ、それを果すべく働き出すまでには年月があり、人生における経験もいろいろ

経なければならないのです。

始めから神として存在し、肉の衣を着ながら、神として崇め讃えられたならば、悟りも使命感も現実のものとして自分のものとはならないでしょう。幼少の頃の高慢な思いは厳しく戒められました。

私は使命を与えられ三十歳から三年の間、荒野にて真の悟りを得るため修業をし、サタンとの精神の戦いに打ち勝ち、その後ガリラヤ湖周辺からカペナウム、エルサレムと福音を宣べ伝え、そこにおいて十字架にかけられ死刑に処せられました。

しかしそこに私の使命は終ったのではなく、その後の、死から蘇った復活において、神の大いなる力が働き、人々に示されたのです。

そして私の伝道した神の福音、人々に幸福を約する神のしらせが、これにより成就したのです。

私がもし死んだままであったなら、復活をしなかったならば、弟子達は私が神の子であり福音を宣べ伝えるために生まれ、生涯を終えたことを、神の定め給う救世主であることを、信じることが出来なかったでしょう。

私が十字架に磔にされた時、救いの手が伸べられなかったのを見て弟子達は私に疑いを生じたのです。

まことに神より遣わされたものとして、あれほど多くの奇蹟と証を目の当りに見聞きして、なおただ一つのことにおいて、今までの信仰を失ないかけました。

このことは人の心の動き易さ、正しきものを否定する心の強さ、の証明となるものではありませんか。

直ぐ信じ直ぐ疑い、誤った結論にはいつもその信念を保つのです。

私を十字架につけたユダヤ人、ローマの兵士達がそうです。恐しいほどの顕現を私の死の直後に目の当りに見て、人々は神の怒りではないかと、やっと思いました。

それほど人々は神からの大いなる証を待つのです。そしてその反面、サタンや悪霊に強く災いされるのです。

稚乃裕子様の著された『天国の扉』も同じ目に遭いました。始めにそれを天上の書と信じた人々が、サタンが跳梁し、働きかけると、その意見を翻えし反対派になりました。本の中にいかに多く奇蹟が証されても、ユダと同じような裏切り者の言葉に翻弄され、その言葉に左右されるのです。

私は稚乃様がお痛わしく思います。何のためにルシファーを天上界に上げ、地獄を失くしたのでしょう。人々の重荷を軽くするためではなかったのでしょうか。そのため身体を傷められ、二度、三度

サタンに襲われ傷つけられて、人々と会うのも叶わぬほど弱られました。

この本が出来上るまでに過労のためすでにもう一度肉体の死を迎えんとされ、私イエスが臨終の床より蘇らせしめて、そして再び天上のお役に立つ御本を書けるようになるために、守護・指導霊として、ラファエル大天使と、ミカエル大天使長が、日々エネルギーを与え、生命を与えていられるのです。

そして後継者として充分な働きが出来ぬため、ミカエル様ならびに大天使方、そして私達も先頭に立って働き、人々に呼びかけているのです。

今は千八百年前に行なわれるべくして行なわれなかった、そしてやはり避けようとして避け得られなかった最後の審判の時に当り、行ないの正しくない人々、心において、言葉において偽善を行なう人、学者でありながら正しく真理を見抜けぬ人、真理にしたがわぬ人、サタンに仕え神に逆う人、罪と破壊を産み出す人、神の教えを説きながら自分が神であると思い上る人、一つの天に繋るものでありながらそれぞれの神が唯一の神であると信じ疑わない盲目の人々、一つの宗派を導くものでありながら、人々の多額の寄進や贈り物で肥えたり、富めるものであるかのごとく振舞う人々、傲り高ぶる人、おおよそ古代より禁じられている戒めを破るもの――これらの人々が篩にかけられ、裁かれてい

るのです。

神の裁きはどのような形で表れるかは知らされておりません。およそ千八百八十年ほど前にパトモスのヨハネにより表わされた黙示の書に録されているごとくなされるには、地上の条件が悪く、人々の理解の方法も異り、神の意志が行なわれ難いのです。裁きは静かな形で行なわれております。

その代り神の徴しは至るところにあり、黙示とは違った形で奇蹟が人々に示されております。

そして神の怒りに触れた人々（天上界の意志と御計画に反する人々の意です——編者）は速やかにその生命を奪われてゆくのです。

私は神の許しを得た人々を呼び集め、天国の扉を大きく開き、迎え入れます。そのためこの書に証された最後の審判の後、私がこうして最後の福音を述べ伝えているのです。

すべて罪に定められた人々は、大天使方の手によりその刑に処せられます。それは予言の書にも明らかにはされておりません。

しかし千八百年前の黙示によって示された事柄のすべてを充分に理解することなく、反省なき人類が齎した末法という世に必然のこととして、貴方がたが伏して受け入れねばならないことです。

私を十字架につけたユダヤの民とロマ人のみが償うべき事柄ではないのです。罪はもっと大きいも

のです。

私を通じて知り得た神の恵みと光を、私を知るものも知らぬものにも等しく与え、許しと守護が裁きを通じて、またその後も変らずあるようにと願い祈っております。

しかしひとりキリスト教を信じるもののみ、またブッタ様を信じ慕う仏教徒のみが救われるのではありません。宗教を通じ、神の教えに預る人のみがその恵みに預るのではありません。すべて平等に罪を裁かれ、許しを得、救いに預る機会を与えられていることをこの私イエスは神々の前に、私の小羊である人々の前に、ブッタ様や他のあらゆる光の大指導霊に導かれた人々の前に誓います。

一人一人が知る者も知らぬ者も神と繋がれており、その行ないが注目され、学なき人も心が正しく清ければ、その訴えが切なるものであれば、救いがあるのです。

謙譲な心で己れを高しとせず、神々の御意志と裁きに自分を委ねるならば、慈悲は正しく与えられます。

なぜ天が無慈悲に裁きましょう。すべてを秤りにかけて裁くとは、このことを指すのです。

それでは暗い罪と裁きのお話から、未来を受継ぐものとなる小さき子供達の教育について、母なる人および父なる方々にお話致しましょう。

私がさきほど述べたごとく、宗教や宗派や、それを信じ神にしたがう人のみに、恵みと光と守護はあるものではないことを改めて申しましょう。

なぜ宗教宗派に属さない人々にも、と申しますと、同じ考えや意見を持つ人々が集ると、心強くなり、どうしてもそのうちに私達こそが唯一の宗教であり選ばれたものであると思いたくなるのです。私の時代にもその流れがありました。そして人種や階級の差別がそれゆえにできておりました。ブッタ様の時代も同じです。それを失くすため、私の生きている間にあらゆる人を出来る限り正しい方へ向けたのです。

そして今の世に至り、宗教上の差別がやはり人種の差別と宗派同志の敵対、といった形で残され、もう一度一つにまとめねばならない必要が出て来ました。

いろいろな宗派があるほうが世の混乱を招き、人の惑わしとなるのはいつの世でも同じことです。あまりに多く宗派ができたのです。そしてどれも自分達の宗教だけが真の宗教であると信じ込み、また人にそう説きました。

その間違いを正すため、高橋信次氏が世に出られ、言葉を以て、著書を以て人々に語りかけ、また稚乃裕子様がそれに続いて、書を通じて正してゆかれているのです。

三十年後に天上界は、私イエスの転生の働きを予定しており、そして十七年後には、一九七九年にモーセ様が合体なさるかたが、男子ですが悟りを得られることを予定しております。

しかしメシヤとしてではないのです。高橋信次氏も稚乃裕子様も、私もブッタ様も、モーセ様も、メシヤとして崇め慕ってはなりません。偶像視してもいけません。すべてそれが個人である場合には人を救う神とはならないのです。

天に在る神々の意志と計画のみが人類を救うのです。

そのためにはこう考えるべきでしょう。〝我は救いなり。真理なり〟と私が申したのは、むしろキリスト教において説かれている三位一体の教理に沿って、この〝我〟は天上界のすべてを現わすもの、すなわち父なる神により代表される天上と、聖霊すなわち天上界のすべての高次元の霊と、そしてこの私の一体となったものだ、というようにです。

そして今まで種々の光の天使、あるいは光の大指導霊の転生により、説かれて来た良き教え――それを徳を高め、魂を養なうものとして身につけ、子供達に日々の生活を通して教え導いて頂きたいのです。

今大きく力を持ち、多くの信仰者を集めており、神の教えを説き、神の奇蹟を現わすと宣べ伝えている団体では、上の指導者達は必ずそれを職業としており、決して親身になって心から人を救うために慈悲を分ち、愛を与えてはおりません。それをなすのは反って、その団体に集まる人々であり、敬虔な心でもって隣人へのいたわりや奉仕をなすのは、この団体を支えている下の方の人達である場合が多いのです。

政治に進出して、この国を支配する権利を、信徒の支持で得ようとする野望を持つ指導者もおります。

そしてそれが正しき形の信仰を持たぬ宗派なのです。

高価なものを、昔であるならば金銀を、賄賂（まいない）のように受け取り、富める者のように身装を整え、生活する牧師もいます。サタンに魂を売り、この世の地位や名声や富に仕えるものとなったのです。

キリスト教から分れた宗派は数多くあり、極端なものは悪魔教のようなものにまでなっています。信仰するもののすべてが悪霊に冒されるのです。

仏教から分れたものはブッタ様の教えから遠く離れてしまい、僧侶の宗教と化してしまったものも

あるのです。

奇術のように特技を人々の前で披露し、その技を誇るかのごとく見えるもの。霊言、異言を誇るもの。

このように見て行っても、歴史の上でも教義の上でも、信仰から身につくべきはずのものである、人間の神への義務や徳として備わるものが、上の指導者からそのようなものが伝わらなければ、下にいる人達は何を学んで良いか解らなくなるのです。

そして人々が多く集まる時、それが余計に難しくなります。

魂の救いを求めても、ただの人間であるならばその人を救うことが出来ず、宗教と魂の救いとは別のものになってしまいます。

また肉体が病み、医者に相談しなければならぬのに、霊の問題として宗教家に話しても、いつまで経っても治らない場合もあるのです。なぜならば、肉体について神の力による癒しは限りがあり、すべて治せるとは言えないのです。

そのように宗教というものは、生活の中に、生きてゆく上に大切ではあっても、すべてを捧げて一生を終えるほどのものではないのです。

人を救うため使命を与えられたものは別なのですが、普通の人はその神に対する敬虔な心を謙譲に神に対する愛を隣人に、神の国の美しさと正義と平和をこの世にそのまま保ち、また作るようにお互いに努力してゆくことが、神への信仰をこの地上に形として表わしたものと言えましょう。

反対に神に祈りを捧げることや、経を読むことや、礼拝や儀式に一日の何時間かを用いたり、週の半分を当てたりすることは、少しも日々の暮らしの役に立ちません。

それは空気を食事の代りに食べているようなものです。神と人との個々の繋りをはっきり知っていれば、いつも礼拝に時間を取る必要は無いのです。

その時間があれば他の仕事や勉強をなさい。

ということは、人々に取って自然の中で神々と語る、その喜びを知る以外に信仰の心を無理に持つことも、宗派の一員となることも本当は必要がないということです。

祈らないからといって神は罰し給わないのです。心貧しく清く、愛と慈悲の心が豊かにあれば。

そしてまた、今人に道を説く宗教者は、むろん同じ徳を身につけていなければその資格はありません。小さな礼拝堂、礼拝所で済むものを、大きく立派な教会を建てれば建てるほど、その牧師の価値が増し、人の尊敬を集めるというようなこと、新興宗教の教祖という訳の解らない名を与えられ、心

が傲ってしまった人が、立派な学校や会館を建て、信者の数を何千万、何億と増やすことが徳であると崇められるような宗教者は私に取ってはパリサイ人であり、サタンの誘惑に負けた人々でしかありません。

それをお父さま方、お母さま方はよく見分け、賢者の智恵を以て、つまらない宗教にすべてを捧げたり、価値のない宗教者を崇拝したりすることで、お子様達に同じようなことを教えないで頂きたいと思います。

徳というものはどのような賢者の本からでも学ぶことが出来ます。

おおよそ人の道、この世の法に叶うものは徳なのです。

そして愛の真の形を知れば、それによっていかなる罪も、努力すれば許し、忘れることが出来るでしょう。愛が人々の心をうるおすものとなって調和が作られ、その精神が破壊や悪を避けさせ、斥け、平和を人々の心と地上に作ってゆくことが出来るでしょう。

もちろん、学ぶことも疎かにしてはいけません。学べば学ぶほど、人生の豊かさ、味わいの深さ、人の心のいろいろな良い面、悪い面も解ってくるのです。

それだけ賢明な人となれます。

正しく知識を身につけることにより判断の確かさが養えるのです。
もちろん他のことをせずにそればかりに熱中するのも人格としては中庸を欠くものとなりますが。
愚しく人生を過し、怠惰な日々を送る人に天上の光は当りません。それは日陰の人生なのです。闇を愛する人生といってよいでしょう。
〝愛とは何か、正義とは何か、信義とは何か〟これがこのたびの末法の世に与えられた天上よりの三つの柱です。
〝愛と希望と信仰〟は二千年前のもので、人々はそれを見失ないかけています。
それを救うのは、新しくするのは、〝愛と正義と信義〟すなわちこの三つの言葉なのです。
それをよく覚えて、この乱れ腐敗した世に新鮮な息吹を齎し、人間の手で、お互いの力で、善なる心と平和を愛する心を見出し、その障害となるものを一つずつ取り除いて行って下さることを、私は心より願い祈っております。

第五章　ブッタの章

私ブッタ（仏陀）とは、古来より釈迦牟尼仏、釈迦如来、阿弥陀如来、釈尊、如来などの通称で知られておりますが、私が今日皆様、お子様をお持ちのお父さま、お母さまがたにお話したいのは次のようなことなのです。

私が今から約二千五百六十年前に古代インドのコーサラ国の属国（今のガンジス河の北方、ネパールという地域に当る）にあるカピラヴァーストというところに、シャキャ族の王シュット・ダナーの王子として出生し、ゴーダマ・シッタルーダーの名で、幼年から二十九歳の青年期までその城で何不自由なく暮したある日、ふと人の一生の空しさ、生活の無意味さを悟り、城を捨て肉親を捨て妻子を捨てて僧となり、苦行の末、その苦行は心の安らぎを齎（もたら）し人生の意義を悟らしめるもので

はないことに気付き、その行を捨てました。

そして禅定を重ねた末に私の得たものは、苦行僧の得る悟りより遙かに大きく、遙かに素晴しい、宇宙の摂理にしたがうあらゆる生命あるものも無きものも、それらが生命と死という、あるいは形有るものから形無きものへ、大きな境界を経てもなお存在する——かつ永遠にその存在は消滅せず、絶えず宇宙の法則にしたがい生まれては死に、死んでは生まれ変り、形作られては滅し、滅しては形作られ、そして人間の生老病死というものも同じことを意味するものである、という真理を悟ったのです。三十五歳になった年の五月でした。

すなわち生老病死を超えた人間の一生とはかくあるべしという悟りを得たのです。

そして大宇宙、大自然の一環である人間に大自然との調和ということが義務づけられていることも悟り、調和のために人としてなすべきことは、大らかな宇宙の広さに立って、その大きさを心とし、自然の流れ、水の流れにも似た自然の法則を掟とし、流れくるもの流れ出ずるものをそのままに激情に心を乱されず、感情の渦に巻き込まれて人と人との交わりに破壊を齎すことのないよう中道の道を歩むべきこと、僧侶としては無論のこと、普通の人間としても人と人との交際において心穏かに、中庸の徳を以て対すること、これが一番大切なことであり、中庸の心と共に人の心を正しく判断し、相

手の求めるものを正しく受取り、理解し、常に慈悲と愛の心で口から出る言葉を整える。そのようにして対人関係を調整し、引いては自分の生き方をそのように徳のある人として正し、その徳を滲み出るものとして周りの人に与え、それらの人々に良き感化を与えるように人生を送らねばならぬこと、また善き心、善なる思いを持ってすべてのことに当り、すべてのことを計り、生計の道を立てる職業においてもその精神を忘れず、人のためになる、すなわち人への奉仕のために自分の人生、仕事はあること、を忘れず、また、それが正しく自分の人生に、生活に、対人関係に、仕事の上に生かされているか、何かどこかで、誰かに対し誤りを犯さなかったか、間違った態度で接しなかったかを一日の終りに、あるいはその度ごとに反省し、その次からは再び同じことをくり返さぬよう注意し、行動するよう自ずから常に戒める――これを八正道（八つの正しい道）と申しますが、それを当時の人々に教えたのです。

当時と申しましてもわずか二千五百年と少し前の無知な人々の住む古代インドの国ではありましたが、人の心は一つ、人の悟りは当時も今も変らず、よく私の教え諭すことを理解し、純真な心であるだけ、今のように複雑な社会の成り立ちと生活習慣、知識の氾濫、宗教の特殊化と堕落、そして一方では万人が悟りを得ても得なくとも仏に成るという行き過ぎた民衆中心の仏教思想などがありません

でしたから、よく悟り、その教えを忠実に自分達の生活に生かして暮し、平和な環境を作り出すことが出来たのです。

飢えの中にも災害の中にも八正道の心得は忘れず、確りと人々の心に刻み込まれていきました。まことの謙譲さと人を敬う心、互いに相和する心を確りと自分のものとすることが出来たのです。

当時の人々の心を今の社会に持って来ることが出来れば、この末法の世にどんなに救いを早めることが出来るでしょう。そう私および天上界は心を痛めつつ考えているのです。

また翻って思いを親子の関係に至らせますと、現代は親無きがごとく、子無きがごとく振舞うのが常識であり、現代的な非情な感覚を身につけることが成人することであるかのごとく考え違いをしている若き世代あるいは子の親である中年層、またそれに習って老人までもが非情で冷酷な考え方を、子供であり、また子の親でもある四、五十歳代の人々に押しつけたり、互いが互いに不信の念で以て冷淡に接し、共に社会に勝手な人生を生きることが共存であると思い違いをしている――。

これは現代のインドのみならず、古代のインド、中世のインド、の歴史を通じてあり得ない、起こり得ないことなのです。

これはいまだにカースト制度と言って、国自体が四つの階級に分れ、同じ階級に属する者同志以外

には心の交流も、知識の交流も無い。自由な人間であることも認められないという悪習が残っており、しかしそのゆえに家族制度の良さも残されているからでしょう。

そしてさきほど申しました非情な世代が世界中至るところに在るのが現代であり、末法の世であると私達が申している世界なのです。

そのため最後の裁きが天上界の手にて行なわれ、私達一人一人がその結果を待たなければならなくなりました。すべてが罪に断じられて宣告を下され、一人としてそれを免れることはない。そのような恐しい神の怒りが下りました。

私のとりなしもイエス様の愛も、すべてはこの裁きを過ぎて後にしか受け入れて頂けなくなったのです。

私の慈悲の教えは、主として王と僧侶と金持ちに向けたもので、慈悲は一般に与える心、苦しみや悩み、病いにある者を救い助ける心でしたが、特に王というものは正法と慈悲にもとづいて政治を行なわねばならぬことを説きました。社会の不平等で不当に苦しめられている人々がすべて、恵みと光と私の救いを得るべきであり、在世の折りにそう説くべきことを使命として与えられていましたが、私の死後二千五百年の年月が経つ間に、イエス様の罪の贖いにも関らず、人々がその慈悲の心を忘

れ、人種や階級による差別、貧富の差、王権の乱用、神主や僧侶の傲り高ぶりと、堕落した世を堕落とも思わず生きる間に、この恐しい最後の審判がやって来たのです。

しかしこれも罪と徳の二つを秤りにかけて裁く裁きなのですから、恐怖のみを人類に与えるものではありません。エル・ランティ様はそのような方ではないのです。ただ罰しなければ悟らぬ、そのように人々の心が盲いてしまったので、やむなく行なわれているのです。

私はこのことにつき、どのようなとりなしも今は許されておりません。ただ待つばかりです。すべての人が少しでも時が許す限り心を浄め行ないを正し、この世にまだ生を持つ方は今までの生き方、考えの足りぬところ、誤っていたところを改め、今から後の人生を出来得る限り徳高きものとなり、行ないが良ければ仏になるというような傲った考えは捨て、謙虚な気持ちで勤めて頂きたいと願うのです。

子の親としてはその勤めとして、何を信じ、何にしたがい、また徳とは何か、賞むべき人とは何かを、子供達が幼い頃から教え導いてゆくことです。

それは決して無駄なことではありません。まず誤った宗教、誤った信仰という深い陥穽（おとしあな）に落ち込まないように充分気をつけて頂くことから始めて下さい。

誤った宗教がなにゆえ悪いかと申しますと、真の崇める対象でないものを崇め、拝むという過ちを犯します。そして一心不乱に頼みごと、願いごとを神頼みする訳ですから、そこに執着心が根強く纏いつき、そしてその願いごとが叶えられる場合と叶えられない場合とができて来ますと、余計に何か神々や仏様の気に入るものを、と宗教者の求めるまま、財をはたき、時を削いて気に入られるまでそれに執着します。

そしてその宗教に憑いているのは気紛れで、信者の幸せ、成功、健康などどうでもよい動物の霊や地獄の霊ですから、貴方がたの払った犠牲などを考えてはくれません。

その憑依した霊は、信者が不幸であれば、その信仰心、宗教生活が悪い、と僧侶や神主や祭司に非難させます。

常識の域を越えて信者に犠牲を払わせ、信者はますます何とかして神様や仏様の気に入られようと苦しみと不幸の中にありながら、その宗教宗派が自分に恵まれた人生を与えてくれる日があることを心の底では希望を持たぬのに、表面では望み、執着し、離れられぬものとなってしまいます。

そういった人々の集まりが、神や仏がおられると言われる仏像や、何かの象徴、仏壇でもよいのです、石仏でも、しめなわを繞らした古木でも、の囲りに一つの確固とした宗教を形作ることになり、

神や仏の魂でなく、低い意識の死霊や動物霊やあるいは地獄の怨霊が人々の出世安泰を願う煩悩、欲心と相まって、三次元に生きる人々を嘲笑いながら、聖域ではなく、不浄域を増やしてゆくのです。

神々や仏と崇められるべき方々は天上におられ、一人一人がその方々と心において繋れ、魂において交流があることを望んでいられます。

しかし地上の人々の心は天にではなく、いつも地上のことのみに惑わされ、煩悩の中に生を終えてしまうのです。そしてどうでもよい、魂の浄化のためには何の益にもならない宗教が蔓延るのです。

こういった迷いのたびに、私達光の大指導霊や光の大天使や光の天使が、地上に降りてはその誤りを正して歩かねばなりません。

何度正しても、すぐ間違った宗教に惑わされ、正しき道を説いていた宗派宗教も代がかわり、人が代わると、神主や僧侶としての精進と修業を第一にしなければならぬ戒めを忘れて、この世の慣習と生活という俗的なことに心を奪われ、神社への収入、寺の収入、利益、自分達の財の高、などを先に考えてことを計るようになるのです。

先に申したような不浄域はたいてい御利益宗教といって、新興の宗派に多く、世襲的なものではないので、教祖となり、祭司となる人の責任はあまり無いのです。

たいてい初代の教祖ですから、自分でいろいろな儀式や会則を作り、それを信者に強要致します。しかし既成の仏教宗派でも、神道でも、不浄域を平気で作っている無責任なところもあります。それは天上界に取っては迷惑この上もない寄生する蛆のようなもので、早く滅さなければそれは濃い霧のようにみるみるうちに広がって、神様や仏様方と三次元の人々を隔てるものとなるのです。

新興宗教が不浄域であることは祭司や教祖の心構えが悪いこともありますが、魂の修業を説くだけではなく、人を集めて、人々の宗教心を喰物にするからでしょう。

そして仏典や経典を解釈した素人が尤もらしいことを説き、ちょっと霊的な啓示の真似事をします。啓示のない人もいます。そしてその形式や儀式が尤もらしければ尤もらしいだけ、人は集まり、その説く内容はどうでもよくなるのでしょう。

何々をすればこういった御利益がある。と言えば、悪いことにそれに乗じて、悪の霊魂がこの教祖や祭司を助けてその言葉通りにしてくれます。それもこの世の財、成功、病を癒すこと——必ずこの三つが宣伝の材料です。

そしてそれが一〇〇%叶えられなくともよいのです。八〇%でも五〇%でも、たった一、二%でも何かこの世の常識を越えた霊的なものが示されると、もうそこに信者が集まり、教祖が生神様とな

り、団体が出来上るのです。

怪しげな宗派であればあるだけ、魔性のものが背後にいます。そして信者の寄付集め、布施、会費を莫大な額に引き上げ、働いた収入を、何に注ぎ込んでいるのか解らなくなるような生活にさせて、巨額のものを献上しても祭司や教祖や会長は何も言いません。ただ黙って受け取るだけで、そこには中庸が失なわれます。限度が無くなるのです。

そして宗派くずれのような団体もできて来ます。日蓮宗には多くのそのような宗派ができました。それはその宗派に属する人々が仏教の教えに反し、中庸と八正道の心から遠ざかり、アスラー（阿修羅）の境地で法を説いたからです。心の波動が荒々しくなり、私の得た安らぎの涅槃の境地とは程遠いものとなりました。日蓮上人が衆生の済度を説いた時には、民衆の側に立って権威に反する言論と活動、を主として行ないましたが、それはその時代に必要だったからです。それを法華宗派やその分派が押えつけられていない現代に至るまで、同じ姿勢を改めていないのです。

日蓮上人のみが衆生済度を唱えたのではありません。私も衆生のすべてを救うことを望み、救いに至る境地を教え諭しました。私の後に出た立派な、魂の救済を目指し人を導いた人々、世のため、人のために尽くした人々、そして真の仏となった人々も万民の救済を願ったのです。日蓮宗では勤行をし

題目を唱えれば生命が漲り、即身仏となる――と教えますが、そう信じ説く方も、またそれを学ぶ方も一人一人がもう一度私の説いた法を学び、仏典を学んで頂きたいと思うのです。そうでないことを悟られるでしょう。

私の教えは多岐に亘り、宗教史のすべてを知らなければその真髄を知り会得することは出来ないとされておりますが、そのようなことはありません。

僧侶の悟りについて何かの伝記を読めば、すなわちそれが私の教えなのです。

決してその心の在り方は荒々しいものでもなく、宗派が富み栄えるためのものでもありません。

僧侶が富み栄え、宗教家が贅沢な生活をするようには私は教えませんでした。またこの世の栄耀栄華を捨て、生きてゆくに足るだけのものが与えられれば、後は魂を清めること――それに専念することを教えました。

在家の人も同じです。暮しに足るだけのものを得るならばそれで満足し、後は精神的なものを求め、徳を高め、その徳を通じて人と交わる。それが天に通じる道でもあるのです。

幸福とはこの世の財、名声、地位、権力、そのようなものからは決して生み出されません。

自然の美しさもそのようなものです。決して余分なものを求めはしません。生きるに足るだけのも

のを得、余ったものは足らぬところに廻るのです。そして華美に流れず、すべてのものは美しい。その美しさを賞で、嘆ずる心が無ければ、天上のものとなる波動は得られないでしょう。

ましてや人々が中程の良さを知るのならば宗教家や神主や僧侶がそれを行なわないのは邪道です。恐らく人々が心と魂を忘れて財に仕えたために、宗教家が世俗に阿（おもね）て解脱の道を忘れたのでしょう。

しかし今はその穢れた想いを失くし、金銭とこの世の成功という俗的な執着を捨て、自然の心に帰るという心境はどのようなものか、坐して静かに考えてみて下さい。

貴方がたのお子様にその悟りを伝え、徳高き賢き世代に育てるということは、すなわち仏国土でありユートピアである世界を作るために大きく貢献することになるのです。

宗教というものが、何のためにあるのか、どのような形が真のものであるか、それは通り一辺の言葉で説明出来るものではありません。心で感じ、静寂の中にその境地を保つものなのです。いかに忙しく立ち働こうともその深き真理を忘れてはなりません。

そして内観（すべての事柄――自分をも含めて一切を客観的に考え、判断すること）より出ずる智慧、それがどのように人生の危機に出会うとも切り抜けてゆく術を貴方がたに与え、また心の余裕を

与え、正しき判断力を与えるのです。

怒りや恨みや、さらに嫉妬、競争心、虚栄、増上慢、冷酷さ、非人間的な心、忘恩の思い、正邪を見抜けぬ盲目の心、表面のみの浅はかな思想と過激な行為に走ること――そのようなものとこの天上に繋る真の信仰心とは両立しないのです。

出来るだけ人格を磨き、貴方がたの生活を通して子供達が立派な人となるよう導くのです。特に導かなくても貴方がたを真似て子供達は大きくなるものですが。

子供を生むということは責任のあることであり、何よりも大きな義務を伴います。その子供達がすくすくと健やかに育ち、いろいろと智慧が備わり、賢き人となる。それがわがことのように喜びとなる。そういう親でなければ、天上の法に叶い恵みに浴する人とは言えないのです。

そのことをよく心に刻み、毎日の生活にお子様の徳育と養育において、善悪の基準を確りと保ち、天上より受ける恵みと守護をお子様に分ち与えて下さるよう、私ブッタは願っております。

最後の審判が終れば、天の光と恵みが降り注ぐ中に、選ばれた人々の住むユートピアは目の前にあるということを覚えていて下さい。

――・――・――・――・――・――・――

これは私の説話とは離れた内容ですが、この巻に新しくお名前をあげました北岡修様は、第一巻のモーセの章で述べてありますが、私の分身として生まれた方です。合体霊は最澄で、守護霊が、生まれた時より親鸞上人、指導霊はこの方がお医者様ですから医学関係の如来界の方です。

今は親鸞や最澄は天上界の数が足りぬため、いつもお側にはおりませんが、私が守護をして差し上げたり、いろいろと交替致します。天台智顗や三蔵法師がお側にいることもあります。未来の正法流布のための御活躍を天上界では期待している方なのです。この方は死後、如来界の上位に上られると定められております。ただし使命を果して頂かねばなりませんが。

そしてついでながら、と申しますのは、天上界ではずっと伏せておく積りでしたが、この巻のミカエルの章でミカエル大天使長が述べました中に、サリエル大天使の魂の兄弟がルシファー（ルシフェル）と言った内容の本を書いた渡辺という方がありますが、ノアの本体とされていながら、悪霊に憑かれサタンに唆かされた中野様に強く勧められ、そのようにして世人を惑わし、私達天上界を陥れ、私達の威信を傷つけることをなさいましたので、『天国の扉』の著者稚乃裕子様の合体霊を明さなくては、中野様とこの方のために、稚乃様の周囲にある高い意識の方々が、悪霊と見做される恐れが出て参りました。

それゆえ発表することに決定致しました。これはG会との正面からの衝突を避けるため、秘してあったのです。

すでに第一章から合体霊は果してサリエル大天使であろうかとお疑いになられた方もいられることと思います。

それはミカエル大天使長なのです。稚乃裕子様の真の合体霊はサリエル大天使でなくミカエル様その人です。しかしそれに拘ってG会に稚乃様が申し出れば、マヤ夫人の合体と自分で言われた宮田様は悪霊の憑依だとて同会から精神病に仕立てられ、病院に放り込もうと執念深く追い廻されたくらいですから、稚乃様もどのような目に遭わされたか解りません。それを警戒して天上界は発表致しませんでした。

しかしだからと言って、ビバ・ミカエル裕子だとかミカエル裕子などと馬鹿げた名でお呼びすることは、もちろん天上界ならびにミカエル大天使長は禁じておられ、また稚乃裕子様は、私ブッタとイエス様とモーセ様とエル・ランティ（エホバ）様、ならびに七大天使、ならびに多くの他の、いえ、すべての天上界の善霊がお守りしております。

三次元のかたは誰であろうと稚乃様を傷つけあるいは中傷する言動はお許しいたしません。G会の

方々は、稚乃様をサリエル大天使の本体として『天国の扉』を発表しました時に、中傷なさいましたので、天上界はこの方々に特に厳しく接するあるいは罰する積りでいられます。中野、渡辺氏は大天使がたが発表なさいましたが、それぞれのなしたことのゆえに天上界が縁を切りました。

稚乃裕子様の亡くなられた後、十七年後にこのかたの後継者が悟られ、世に出られます。来る年一九七九年にモーセ様が合体なさるのです。そして三十年後には、五年後にイエス様が合体なさるかたのお悟りが待たれております。どちらも天上界で変動がありましたため、どの国で合体なさるかは未定になりました。

私ブッタは僧侶として中立の立場にありますから、今までの事情を考慮に入れ、私の立場から真実を述べるようとのエル・ランティ様の御命令でしたので、そのようにいたしました。

第八章　正法及び用語解説

稚乃裕子

正法の歴史

正法というものについて『天国の扉』（未来への幸せをめざして）で説明を致しましたが、これを新しい宗教と取る方もありましたので、これは実は初めに信仰形態として、次いでは思想、哲学として、そして再び宗教の形を取ったものであること、およびそれの長い歴史があることをお知らせしなければならないと思いました。

私自身も学んでみて驚いたことですが、この教えは、遠くおよそ三千五百年前に遡り、古代ギリシ

ャのデロス島に生まれ、宗教活動に一生を捧げたアポロ（アポロン）という宗教家（〝己れを知れ〟と説いた有名なゼウスの子）により、その修業と悟りから生まれた教義なのです。

この教義は、〝生命は永遠不滅のものである〟と、〝人間は生老病死を経て魂の転生に入る。すなわち生きて、病いを経るか、老いて死ぬという人間の一生の自然の成り行きがあり、その死の境を越えると、そこに魂の永遠不滅が始まり、その永遠の時の中でいろいろな人に転生、生まれ変り、死にまた生まれ変るという過程を転生輪廻という〟と、この二つで成り立っているのです。

この教えは正法とは呼ばれませんでしたが、広く宇宙の視野に立ち、宇宙も人間個人もその構造が同じである、という原理が等しく適用され、この思想は、その後ギリシャの植民活動により小アジアのイオニア植民地に、二千六百年前に伝わりました。それを遡ると、古くは四千五百年前の古代エジプトの神話、信仰形態に、ギリシャの教義と同じもの（霊魂の不滅、永遠の生命）を伝えていることが知られています。

（一万年前のアトランティス大陸にも、霊魂の不滅の思想が存在しました）この教義は、エジプトからギリシャ、そして小アジアへ、小アジアからペルーへと伝わり、あるいはギリシャからインドへと伝わったのです。

そこで初めてダルマ（法）と呼ばれ、この法によって因果、因縁に基く人々の生死の法則を、宇宙の法則に照らして、正しくブッタ様により、説き明かされました。（約二千五百年前）

生老病死の苦しみを乗り越え、永遠の生命を死後に得て後、転生輪廻をくり返すというエジプトの信仰がギリシャを経て伝えられ、カースト制度に支配されたインドにおいて、成就され得なかった階級平等の思想がブッタ様の教団においてのみ実現され、この教義の大きな恩恵となったのです。

ブッタ様が八十歳で死なれて後（入滅）、その教えが途絶えるかと思われましたが、紀元前三八六年頃までかけて、十大弟子の一人、マーハー・カーシャパと女弟子の一人、マイトレーヤー（紀元二七〇年頃インドに弥勒菩薩として転生）がその教えを努力して広め、およそ百五十年後に、史実に有名なアショカ王が在位の終り頃（紀元前二三〇年頃）ブッタ様の法に帰依し、法を用いた統治を行なって、その教えを国全体に広めました。

王の法とは、慈悲と愛を以て平等の理念の下に民を治めるというもので、初めて王が仏教を政治に導き入れて善政をしいたのです。そしてその保護の下にインド各地に広がり、アショカ王の死後、大乗仏教、小乗仏教という大きな二つの流れに分れ、カニシカ王の代に至って、西方に大きく発展しました。

大乗仏教は、紀元後に中央アジアを経て中国へ、中国から朝鮮、そして日本へと伝わり、（紀元五三八年）北伝仏教とも言われています。小乗仏教は二十くらいに分れ、部派仏教と呼ばれましたが、セイロン、ビルマ、タイ、カンボジア、ラオスに伝わり、これらの派は南伝仏教と言われます。

またもう一つ大乗仏教からは三流派に分れましたが、比較的大きな流れとして残ったのが密教で、これはその起源をブッタ様のお子様のマーハー・ラーフラに遡ります。これが七世紀にインドに広まり、ラマ教としてチベット、モンゴルに伝わり、（八世紀ごろ）また他方、中国を経て日本にも伝わりました。（紀元八〇五年）

この密教における即身成仏の思想が人々の関心を誘い、安易な方法でも仏になれるという誤った考えが、それから枝分れした法華宗派の急進的なものにまでも人気と熱を呼び、次々と新興宗派を作って行くのです。仏の境地というものは静けさの象徴と悟りによって代表されると見てもよいと思うのですが、儀式さえ踏まえればよいと悟りや静けさとあまり関りのないようなものまでが蔓延りました。

禅宗も仏教思想に基いた教義で、実践主義に基く悟りがその主なるものです。これはインドに古くから伝わる精神集中の実践で、ブッタ様も禅に入って悟りを開かれました。禅は原始仏教以来その重要な業（ぎょう）の一つとされ、仏教以外でもインド全般に広く採用されて、ヨーガ学派から諸学派の真理体得

のために用いられ、また中国では天台宗派に取入れられ、止観として盛んに実践されて、天台華厳の学問に裏付けられた後、禅宗として独立した一派が生まれています。（八世紀の初め）

このように、ブッタ様の手によって仏教の体系と流れが形作られましたが、光の大天使、光の大指導霊、光の天使の転生はそれに留まらず、アラビアの予言者マホメットをしてイスラム教の創始者とならしめ、多神教を否定し、唯一神アッラーの前における平等を唱えさせました。ガブリエル大天使の啓示による神託が大部分で、誠実に多くの神託を伝達したと伝えられています。

イスラエルにおいてはユダヤ教に始まるキリスト教への枝分れ、すなわち、人類の祖アダムとイブからカインとアベルの物語へ、ノアの箱舟の物語、バベルの塔の物語、ユダヤの父アブラハムとその子イサク、イサクの子ヤコブの十二人の子供、それが十二支族の族長となり、エジプトにヤコブと十一番目の息子のヨセフとその一族が移住、他は東南アジア、アジアの国々（日本を含む）へ移動し、そしてキリスト教の歴史はこのヤコブ一族の子孫のエジプトにおける苦難の歴史から始まると言ってよいでしょう。

そして最後の移住後間もなく、飢饉を知らせてエジプトの危機を神の啓示で救い、エジプト全国の司となったヨセフが死に、その時のパロも死んだので、新しいヨセフのことを知らない王（パロ＝フ

アラオ）によって子孫が多く増えすぎたヤコブとヨセフの一族、すなわちヘブル人は奴隷とされ、紀元前十三世紀ごろモーセ様がその中から生まれます。ヘブル人（イスラエル人）の男子は殺すようとのパロの命が下されていたので、出生を隠すため、母親の手によりナイル河に流されますが、それをパロの娘が拾い、王宮で育てられます。成長して後、神の召命を受けてこの捕囚の民ヘブル人を紅海を渡り、アラビア半島へと救い出されるのです。

そして約束の地カナンを目指して行く途中、シナイ山に至り、神ヤーウェ（エホバ）より十戒を啓示され、それをヘブル人に守らせ、これが後のユダヤ教の律法となり、旧約の経典の骨子となりました。

モーセ様とヘブル人達は四十年を費してヨルダンの東まで行き着きますが、そこで不幸にもモーセ様は、老齢と重い任務の疲労から目的地を前に亡くなられました。

その後もいろいろな歴史の変転があり、いわゆる旧約の時代に多くの予言者が出て、人類の救世主イエス・キリストの誕生を予言するのです。

そしてアブラハムの四十三代目の子孫ヨセフから、予言にしたがって、救世主を信じるユダヤ人が待ち望んだイエス様が生まれられます。

ユダヤ人（ヘブル人―イスラエル人）の大半はイエス・キリストを認めず、モーセ様を始祖としてユダヤ教を伝承しましたが、神の啓示、予言、奇跡を信じたイスラエルに住む人々は、イエス様と共に神の福音を信じ、それが今のキリスト教として、長い苦難と栄光の歴史として残されているのです。（キリスト教に関する物語、史実は旧約、新約聖書に記載されております）

日本に移住したアブラハムの孫十二支族のうちの二つの流れは日本で神道として、天照大神を祖とし、継承されて来ました。

これら歴史の流れを伝えて来ますと、宗教、宗派と言われるものは数え切れぬほどありますが、枝分れしたもの、発生源が別のところからであるもののそれらを辿れば一つに帰るのです。

すべて天上界、天国、人々に死後の希望を与えられている神の国、ブッタ様他、諸仏のいられる極楽浄土、そこから啓示があり、預言があり、神託があり、善霊の導きにより、一つの法、すなわち宇宙を支配する法則であり、大自然の法である万物の生命が一つの法則の下に輪廻していること（生から死へ、死から生へ、無から有へ、有から無へと廻り廻っていること）、それを人類は長い歴史を通じて証（あかし）されて来たのです。

これを正法というのです。

すべての思想史、哲学史も正法を伝えるものに他なりません。

同じことを説いているのです。

そしてこのように善霊の転生が文明の推進力となり、また科学物質文明も、個々の分野において著名な人々は高次元の霊の合体、守護・指導を得て、発明、発見、研究が進められて来ました。（章末表例参照）

言いかえますと、いかなる分野においても真理を発見する際に、真理は、学者、特に科学者、物理学者は種々の思考過程、実験過程において、試行錯誤をくり返した後たどりつくものであることは、熟知しておられると思います。

そしてその真理が、常に何か根源となる大きな計り知れぬような未知のもの、謎ではありながらそれしかないもの、を指していることに気付かれるでしょう。

何から調査研究を押し進めていってもいつも辿り着く同じもの、同じところ、それは多く直感によって結論が出るものなのでしょうが、それが正法の真髄、すなわち神の法、絶対的存在であり、唯一無二のものなのです。

そして神の法とは、万物を一つに統一して秩序立てている宇宙の法則、宇宙の構成、宇宙の仕組み

――どのようにして宇宙は生成し、発達し、その構成員である約一千億の一千億倍の星々が（恒星、惑星、衛星など）互いに関連し合って年輪を経ていって、その中に恵まれた惑星が微生物を誕生させ、それを恒星の光と熱エネルギーによって育成し、植物、動物、人類へと進化させる――その大宇宙、大自然の法則――これが唯一絶対無二の変化しつつ、恒常的であって、つまり形は変るが、絶対的存在は変らない不変のもの――を指すのです。

この法によりありとあらゆる現象、物質および存在は、その意義と役割りを説明し得るのです。他にはありません。

その法を現代科学や物理学、天文学その他あらゆる学問探究の分野で、一つ一つ解明していっているのです。

それを正法という宗教思想とは別の研究分野では、宇宙の真理と神の法、神の理は繋がらない、何か別の分野である――と学者は理解されているようですが、（宗教家は宗教家で、科学は物質の解明、すなわち物質文明を促進するもの、そして宗教は魂と心の解明に終始するものと主張します）そうではなく、これは人間が感情と理性を持つ一つの人格であるように、宇宙という大きな宇宙格？に感情が宗教としていままでの歴史を持ち、理性が科学史によって代表されている。

つまるところは一つの大きな存在の解釈が二様に分れていたに過ぎないのであることを天上界の方々は強調し、くり返し『天国の扉』で説いておられるのです。

すべて宗教も一つ、科学も一つ、そして宗教と科学が一つになり得るのであること。デカルトの、精神は身体の一様態に過ぎぬとの考えに基く、「我思う故に我あり」という、微妙な奥深い言に、その答えがあるのではないでしょうか。自分という物質体、生体が、〝思う〟という心の動きでしかないように思える行為において、その存在が初めて意識される。その逆もまた真なりで、〝我〟という生体が存在しなければ〝思う〟という心の動きも存在しないのです。

そう解釈致しますと、〝物質と心が同じもの？〟〝科学と宗教が一致し得る？〟という普通は考えられないような事柄が、魂の要素の科学的解明、ならびに精神の動きの生理学的解明、が現代科学の範疇で明快に天上界の方々によりなされた時、私は実に驚異の念を以てそして素直に納得し得ました。

感歎の吐息が出たのです。これこそ、今まで解ろうとして解り得なかった、神秘のベールの向う側にある謎のすべてを解き明かしてくれるクノッソス王宮(ギリシャ神話参照)の〝糸の端〟であると。

人間の心理として、あまりに単純化し、単一化することを嫌う傾向があります。謎を好み、神秘を

好む。

もちろん宇宙の法則、構成、個々の生体の法則、構成には、未知の領域が多く残されています。それを探究し、発見することは、人類に与えられた課題であることは否めません。

しかし纒めれば同じことを説き、一面のみあるいは多面的にあるいは完全に近い形で説き明かす教義、思想、哲学、科学上の真理発見を、人類はそれぞれ独自の形態として主張し、他を排斥して来ました。

この末法の世において、天上界からそれが一つの方向を指していることが強く語りかけられ、証され、人類は団結して同じ方向へ進まねばならないこと、破壊を憎み建設へ、平和へ、個人個人が協力せねばならぬことを、高橋信次様を通し、その説かれた法を信じ、教えを広める人々、そして私が編纂致しました天上の書を読み、使命に目覚め、少しは異なる点もありますが、同じ法を説こうと努めていられる方々により、日本全国へ、世界へとその伝播が実現しようとしています。

私は今後も生きている間、著書、編纂書を通して天上界の方々のお言葉を伝え続けてゆく積りです。すべてが一つに纒まり、世界の全人類がこの天上界の方々のメッセージを信じ、お言葉を解して平和なユートピア、神の国を地上に築くために協力して下さることを、私ならびに協力して下さる方

々、ならびに私の小さな弟子達、そして十七年後に来るべき後継者、三十年後に預言されているイエス様の転生となる方が、いつも呼びかけ、また続けるでしょう。

次に『天国の扉』すなわち天上の書のシリーズ第一巻で質問が出ましたので、理論上解りにくいとされているところを解説していきたく思います。

それは分身、本体の定義の確認です。

天上の霊が人間に合体しますと、その人は〝本体〟と呼ばれ、死後、天上の霊の分身第一号となることは第一巻で説明致しました。そして初めの善霊と、この新しい分身第一号は別の生命を生きることになるのです。善霊は一定の期間を置き、あるいは事情により天上界の要請を受けて、再び人間と合体し分身第二号を作ります。

『天国の扉』で分身第一号が別に人間に合体すると分身第二号と申しましたが、これはむしろ分身第一号の分身第一号、すなわち最初の善霊から見れば孫分身と言った方が解り易いでしょう。記号をそれぞれに変えて考えるともっとはっきりしますが。（章末表例参照）

そして、分身第一号は第一号となった時から永遠の生命を得ますが、（これは天上の意に叶う人でなければ与えられない。すなわち、死と共に永遠の生命も絶たれる魂も出て来るのです。これはキリ

スト教における永遠の生命と最後の審判との両方の解釈に比較し得ますが、キリスト教では死後、死者の魂は静かに眠りについており、審判の時には目覚めるとされております。この二つの点において少し異なります。

すなわち眠っているのは一年間、病死、事故による魂の構成要素欠損の補充あるいは修復――これは初めてこの巻で述べますが、――のために要する期間で、その後回復した魂は活躍致すそうです）この永遠の生命は与えられる価値のある者のみが与えられ、価値の無い者は取り上げられるのです。

最後の審判に至らなくてもです。

すなわち高次元の霊によって消滅させられます。これは霊に取っては死刑にも等しいことですが、三次元の法より天上界の掟の方が厳しいことを御理解下さい。

これは最後の審判と時をたまたま同じくしていますが、地獄に落ちるべき悪の魂が日々処理され、あるいは天上界にありながら、その意志に背反する魂も同じ運命に遭遇するのには大きな理由があります。

昨年六月以来、地獄が一掃され、今まで大半は手をつけられずにいた地獄霊が整理されました。それに加えて、日々増える死者の魂が天上界の人口増加の調節を必要ならしめる。すなわち主な救いの

対象であり、裁きの対象になりました。そして天上界を追われるべき魂も処理されることになったのです。

また、それまでの霊人口増加についてもおたずねがありましたが、これは昨年までは地上に地獄の霊人口が自然に増えることと、余程の悪の魂は消滅の憂き目に遭うこと。その上、地上の人口増加に伴い、合体霊、守護・指導霊の三人が一人一人の出生に必要とされること、でどうやら補って来られました。

それゆえ、思うほどには霊人口の過密現象は招かなかったようです。

再度私および天上界の方々を襲ったサタンとその配下との争いにより、天上界も今までの半数に減り、これからは守護・指導霊が二人ではなく、一人にしなければならなくなったそうです。

日本全国だけでも日に五、六千名は死者が出ますから、その中から善良な魂、徳高き魂、医療に詳しい魂が次元の高い所に迎えられ、天上界の補充がなされています。遠からず再び守護・指導霊は二人に増やされるでしょうとのことです。

この七月から宇宙界、九次元、天使の界の方々は新しい方が増え、〔以前の太陽界の中の天使界から九次元（厳密にはブッタ様、イエス様、モーセ様のところに）九次元から宇宙界へと人事異動の結

果になる」、ミカエル様が天上界の新しき最高責任者として就任され、エル・ランティ（エホバ）様は同時に隠退なさり、いろいろと天上界の規則も古いものから新しいものへと変りつつあります。第三章の終りに新天上界（宇宙界と太陽界）の表を載せました。御参照下さい。

魂の世界（四次元）も三次元の世界も歴史的変遷があり、人口の変動があり、天上界構成メンバーの増減が同じようにあることを、私の信じ難い驚きを添えてお伝え致します。

用語解説

受胎告知……イエス・キリスト生誕に関して、ガブリエル大天使ならびにラファエル大天使が母マリアに聖霊が宿り給うて、救世主イエスが生まれ給うこと、そしてその名はインマヌエル（神ともにいます）と名付けよと告げた。その子イエスは処女懐胎の史実として記録されているが、事実はそうではなくアブラハムの子孫大工ヨセフとナザレの町の乙女マリヤとの間に生まれ、天上よりの指示により予言されし如く、神の子である証に処女が身

妊ったとして伝えよ、とヨセフにマリヤを通じて伝え、その如くなされた。（ガブリエル大天使の証による）

メシヤ……ヘブライ語で（油を注ぐ）から派生した「油注がれた者」の意。オリエントにおける風習で王や祭司が即位する時、頭に油を注ぐ儀式が行なわれ、古代イスラエル王朝でもこの風習がとり入れられた。ギリシャ語ではクリストス（キリスト）といい、のちに「救い主」を表わす語として用いられるようになった。人々を奴隷制や他国の支配あるいは貧困と無知と苦しみから解放し、神の手により救いを与えてくれる者として、神的権威と証明を持つ、すなわち神より啓示と使命を受けた救済者の意。これはイスラエル民族特有の考えから発し、全世界に広がり苦境から民族を解放し、霊能を持ち奇跡や予言を行ない、平和と繁栄を約束する救済者の意に転じた。

三位一体……父なる神と、子なるイエス・キリストと聖霊とは、それぞれ別のものであり、別の人格を備えたものでありながら、同じ唯一の神から出たものであり、一つとして働きかけるものの意。

聖霊……聖なる霊、すなわち天国（天上界）の霊の意。

ヨハネ黙示録…使徒ヨハネが小アジアの諸教会にあてた手紙。ローマ帝国の教会への迫害が激化した当時の状況、世の終りに至るまでの教会の歴史を予言と象徴とによって語るとともに主の再臨の近いことを告げて同時に最後の審判が行なわれそれにより義とされたものが、イエス・キリストの導きにより神の国に入ることを予言と象徴によって語り、信者に希望をもつように説いた書。一世紀末からキリスト教がローマの迫害にあったので旧約聖書のダニエル書と同じ抽象的、象徴的表現を用いた黙示文字を取り入れ、神よりの謎の啓示の形で著したもの。

末法の世……すべての道徳の退廃と宗教の堕落による、人心の乱れが生じた混乱期。

ヘブル語、ユダ人、ロマ人……ヘブライ語、ユダヤ人、ローマ人。

ユートピア……理想的な国土、理想郷。

釈迦牟尼仏、釈迦如来、阿弥陀如来、釈尊、如来……すべてブッタを表す名称。

苦行僧……ブッタの修業の形と反対の、修業のための修業、荒行のための荒行をして肉体および精神を苦しめることが悟りへの道と思い誤った僧侶のこと。

死霊、怨霊、死者の霊……恨みを持ち、執着を持った悪霊、で共に天国（天上界）から来た霊ではな

い。前者は天上界の霊とも地獄の霊ともまだなっていない、死者から離れたばかりの霊魂。後者は地獄を作っていたあるいは作る霊。

聖域、不浄域……聖浄な霊域、すなわち聖霊、天上界の善霊により支配された三次元の領域。不浄域は地獄の波動や邪念を持った死霊、浮遊霊、動物霊、地縛霊、怨霊、などによって汚されている三次元の領域。

ダルマ……古代インドのサンスクリット（梵語）語で「法」の意。

御利益宗教……初め御利益は仏が衆生に与える恵みの意であったが、それを名目にした金銭上の利益中心の俗的な宗教。信徒の商売繁昌、病気平癒などを祈願するについて莫大な札料、謝礼金、寄付、会費、などを取り、その利益で教祖、幹部などが生活費および教団維持に充てる。

世襲的……地位、財産などを代々受け継ぐ意。

仏典、経典……ブッタの教えおよびその解説、ならびに翻訳書をも意味する。経典は宗教の教えを書いた本。

密教……仏教の一流派。秘密仏教、真言密教ともいう。顕教（けんぎょう）に対するもの。ベーダ時代（前十二

世紀～十世紀）にマントラ（真言）を誦して攘災招福を祈った。その呪術や密法が神聖視され、仏教に合流した。

生神様……現世に姿を現した神。イエス・キリストのように、人間でありながら神と崇められた人、と比べて称する。

衆生の済度……（衆生は生命を有する全存在の総称。人間を指す場合が多い）生死の泥沼の中であえぐ人々を泥の中より救い、悟りの彼岸に渡すことを意味する。

アスラー（阿修羅）……インドの鬼神の一人。怒りの形相で人の心にある悪念、権勢欲、闘争欲の想念の象徴として解されている。

涅槃の境地……修業によって真理を体得し、迷いや執着を断ちきった最高の解脱の境地をいう。サンスクリットのニルバーナから転じたもの。

勤行……仏前でする読経などの日々の勤め。転じて在家の者が魂の浄化のため、あるいは即身成仏になる修業として宗派により、それを勧める。

題目……日蓮宗派で唱える南無妙法蓮華経（妙法蓮華経に帰依するの意）という七字の称。これを唱えれば、あらゆる善行が備わって成仏できると説く。

即身成仏……現実の肉体のままで仏に成れるという思想。攘災招福から始まって仏教の一流派となった密教の主になる思想で、真言宗や日蓮宗でこの教義がある。

禅……インドに古くから伝わる精神集中の実践で、インド文化をになったアーリア人の侵入以前から行なわれていたと考えられる。精神集中のために、通常は足を組んで姿勢を正し、呼吸を整えて静かにし、ある一点すなわち真理を目ざして、それ以外の一切の雑念を去る。ブッタ様の悟りも禅を行なって（禅定をして）開かれたと言われる。

ヨーガ……サンスクリット語。人間の内なる、種々なる対象に移り行き、抑え難い心を集中する。正しい坐法によって呼吸を整え、感覚と意識を制御し、精神統一と浄化から悟りの境地へ、あるいは超自然力（霊の助けによる力）を得る独特の修業法。ヒンズー教の仲介を経て一般化すると共に、他方ではヨーガ学派が成立した。瑜伽行派（ゆがぎょうは）はヨーガの音訳で唯識派ともいう。中観派とともに大乗仏教の二大派である。弥勒菩薩の著作によっても、その思想が発展、日本の仏教にも重要な役割を演じた。インドでは現在学派の勢力は殆ど無く、苦行派または健康法に化した特異な風習の一つとして残っているに過ぎない。

止観（しかん）……仏教の術語。「止める」「観る」ことを言う。「止」は心の雑念や妄動を止めること、「観」は真理や実相を観ずることで、坐禅の時の心の状態を示す言葉。止によって定（禅の状態）が得られ、観によって慧（智慧）が得られ、定慧が相等しくなると涅槃が得られるという思想。中国唐代の僧、天台大師智顗が止観を最も重んじ、現代ではこの語は彼の法門を指すと解されることが多い。

注　用語解説の際にはすべて、天上界の方々、特にミカエル大天使長、ガブリエル大天使ならびにラファエル大天使に御助言ならびに、歴史上の誤った解釈の御訂正を頂きました。

――・――・――・――・――・――・――・――

なお補足としてつけ加えさせて頂きますが、『天国の扉』では天上界の高次元の霊あるいは善霊と記述しておりましたのに、この書においては最初から神、神々という用語が大天使方のメッセージに出てきます。

それは前の書を世に出した後の人々の反応から、天上界の権威をあまり認めず、九次元の方々（ブッタ様、イエス様）や、ミカエル大天使長、大天使方のメッセージ、お手紙ならびに高橋信次様のメ

ッセージ、お手紙に対しGLAでは無視、あるいは悪霊とさえ断言し、『天国の扉』の焼却を、幹部が全国の会員に命じたり、あるいは中野氏も日本神学誌の読者や知人に神界の霊かも知れないと、内容軽視あるいは無視を示唆するなど、あまりに天上界を軽んじる方が多くあったので、人間ではあったが、天上界の高次元の方々は神と呼ばれるに相応しい徳の高さ、能力、知識、智慧（バニャパラミッタ）を備えていられる方々であり、慈悲と愛の心を以て常に恵みと光を与え、悪霊と戦い、三次元の人類を守護し、指導して下さる方々であるので、敬意と尊敬の念をもって、謙譲にその方々に対し申さねばならぬことを、改めて三次元に住む私達に教えて下さるためです。

今現在の世の中は、神々や仏様方よりも却って霊道を開いていない三次元の人間が、至らぬところばかりあり、魂の修業も未熟で、知識も智慧も信義も正義も、愛においても、慈悲においても到底叶わぬながら、霊査をし、正確度が分らぬのに自分の霊査が最高のものだと触れて廻る。

そう言った方が日本でも五、六十人あるのです。

他宗派では知りませんが、キリスト教の牧師とGLA内外の正法流布の関係者にありました。外国、特に米国ではやはり同数くらい、英国では六十名を越え、フランス、イタリア、オランダ、スイスなどでは合わせると平均三十名から五、六十名、その中でスイスが一番少なく、他の国々は東西ド

本体、分身の表

名	本体	分身	孫分身（分身の分身）
エル・ランティ（エホバ）	レオナルド・ダ・ヴィンチ	パブロフ（医）	
	ヒポクラテス（医）	ヘロフィロス（医）	イブンシーナ（医）
		フランシス・ケネー（医）	ヘルムホルツ（医）
		ウイリス（医）	リチャード・ブライト（医）
	アリストテレス	アルキメデス（数、物）	
		メンデル（植）	
		フンボルト（植）	ベーツソン（植）
	エラストテネス	マルクス・アウレリウス（政）	フィヒテ（哲）
			シュバリエ・ラマルク（植）
	コペルニクス	ケプラー	

ゼウス（ギリシャ神）	ペリクレス（政）	獅子王リチャード
	空海（宗）	
	バッハ（音）	フォーレ（音）
		リヒアルト・シュトラウス（音）
	ベートーベン（音）	アーサー・オネゲル（音）
		ブラームス（音）
ソロモン王	ソロン（七賢人）	バルトーク（音）
		ゼノン（哲）
ライエル（地質）		
パレストリーナ（音）	ワーグナー（音）	フランク（音）
		マーラー（音）
ポセイドン	ディオゲネス	
モーセ	トマソ・カンパネッラ（哲）	
	ランドシュタイナー（医）	
	フロイト（医）	
ヘロドトス（歴史）	マスウーディ（地理、歴史）	レオポルド・フォン・ランケ（歴史）
エル・ミケラエル・カンタルーネ		

名	本体	分身	孫分身（分身の分身）
	ヘンデル（音）	グノー（音）	
	ペリアンドロス（七賢人）		
エル・ルネラエル・カンタルーネ	クレオ・パローター（宗）	ペイシストラス	程明道（哲）
		アショカ王（宗）	
	ブッタ	天台智顗	不空三蔵
		最澄	
		空華道人（宗）	桂小五郎
		カント（哲）	ジョシア・ロイス（哲）
			ランゲ（哲）
	アウグスティヌス（宗）	トマス・アクイナス（宗）	ヒューゴー・グロティウス（宗）
エル・ビルナビル・カンタルーネ	アモン（宗）	アガシャー大王（宗）	ジョン・ウイクリフ（宗）
		アブラハム（宗）	法顕（宗）
	クラリオ（宗）	アントニヌス・ピウス（政）	エラスムス（人文）

ピタゴラス　ダランベール（数）
イエス・キリスト　パスカル　ホイヘンス（物）　アンドレ・ジイド（文学）

ミカエル大天使長　アポロ　フランソワ・ラブレー（人文）　ラ・ロシュフコー（哲）　ケーベル（哲）　ジェンナー（医）　エールリッヒ（医）　ヘシオドス（詩）　アイスキロス（詩）　杜甫（詩）　オルフェウス　アルカデルト（音）　マルティーニ（音）　メンデルスゾーン（音）　ジャン・コクトー（詩）　テニスン　聖観世音菩薩　如意輪観音

アナクサゴラス（哲）　アリスタルコス（天文、数）

名	本体	分身	孫分身（分身の分身）
	タレス（七賢人）	セネカ（哲）	一休
	アレクサンダー大王	織田信長	坂本龍馬
	マーチン・ルッター	吉田松陰	
	オイラー（物）	エールステッド（物）	シュレーディンガー（物）
		ハイゼンベルグ（物）	
	ラザフォード（物）		
	アインシュタイン		
	ハイマンス（医）		
	ウィリアム・ハーベー（医）	ベル（医）	ウィーナー（医）
		アイントホーフェン（医）	
	モルガーニ（医）	カミロ・ゴルジ（医）	
		エーワルト（医）	
	モーツアルト	リスト	
	ダーウィン		
	ダンテ	ミルトン（詩）	ヒルティ（思想）

	ブレイク(詩)	ブラウニング(詩)
レオナルド・ダ・ヴィンチ	カハール(医)	ロングフェロー(詩)
	レンブラント	セザンヌ
	ロラン(画)	モネ(画)
	ウィリアム・ギルバート(物)	
ミケランジェロ		
モンガラナー(宗)	ピリポ(十二使徒)(宗)	
ガブリエル大天使		
ピッタコス(七賢人)	デニス・デイドロ(哲)	キルケゴール(哲)
		コールリッジ(詩)
孔子	康有為(こうゆうい)(思想)	
アドニス(ギリシャ神)	エウリピデス(文学)	シラー(詩)
		リルケ(詩)
ショーペンハウエル(哲)		
シューベルト		
ヘス(物)	ジョリオ・キューリー(物)	

名	本体	分身	孫分身（分身の分身）
	コッホ（医）		
	リチャーズ（医）		
	エールリッヒ（化）		
	メロッツオ・ダ・フォルリ（画）	チェーザレ・ダ・セスト（画）	
ラグエル大天使	ポリビオス（歴）	クロムウエル（政）	
	ヘラクレイトス（哲）	スピノザ	
	ソクラテス	ルソー（哲）	中江兆民（思想）
	聖徳太子	エンゲル（経） ブリアン（政）	
	デカルト	ヘーゲル	ハイデッガー
	クレオブロス（七賢人）	程伊川（ていいせん）（思想）	朱子（思想）
	パラツェルズス（医）	コッヘル（医）、クレブス（医） ナイセル（医）	
	ギルバート（物）	ジュール（物）	シュレーディンガー（物）

ヘルメス（ギリシャ神）	ジョージ・ブール（数）	
ホーソーン（文学）	フォークナー（文学）	
シューマン（音）		
ロッビア（画）	ブーシェ（画）	
ブラック（画）		
バヌエル大天使		
プラトン	ヘンリー・モア（哲）	シュレーゲル（哲）
アトラス（ギリシャ神）	シェリー（詩）	
エンペドクレス	ミュソン（七賢人）	孟子
	ボイル（化）	カロザーヌ（化）
	シャルル（化）	アボガドロ（化）
メンデレエフ（化）		ゲー・リュサック（化、物）
プランク（物）		
シュライエルマッハ（哲）		
ニュートン		

名	本体	分身	孫分身（分身の分身）
	ガリレオ・ガリレイ		
	エンペドクレス	アスクレピアデス（医）	ボレリ（医）
	リンネ	ワイスマン（植）	
		ヘッケル（植）	
	マルティーニ（画）	フラゴナール	ボナール
		フェルメール	ドガ
	ジョット（画）	シニョレリ	ミレー
ラファエル大天使	アイソポス（イソップ）	カーリダーサ（文学）	ヤーコプ・グリム（兄）（文学）
			アンデルセン
			モリエール（演劇）
			チャールズ・チャップリン
	エンディミオン（ギリシャ神）	ソフォクレス（詩）	ベルギリウス（詩）
	アメンヘテプ三世	文帝	トルストイ
			ジェイムズ・ブライス（政）
		カール大帝	フリードリッヒ一世

ビアス(七賢人)	李白	曾国藩(思想)	
曾子	豊臣秀吉	夏目漱石	
ホメロス(詩)	ジャーミー(詩)		
ツキジデス(歴)	ストラボン(地理、歴史)	プルタ―グ(文学)	
シェークスピヤ	ゲーテ	森鷗外	
	ボルテール(詩)	プルースト(文学)	
ラ・ロシュフコー(思想)	オスカー・ワイルド(文学)	ランボー(詩)	
ヘミングウェー			
ワーズワース(詩)			
月読命(つくよみのみこと)	源頼朝	明智光秀	
パレ(医)			
クレペリン(医)			
スターリング(医)			
ライプニッツ(数)			
ラファエロ(画)	ルーベンス(画)	ドラクロア(画)	ルノアール

名	本体	分身	孫分身（分身の分身）
		アングル（画）	
		ロダン	
	ドボルザーク（音）		
ウリエル大天使	アレス（ギリシャ神）	素戔嗚尊	源義経
			土方歳三
	キロン（七賢人）	ドストエフスキー	孫文（思想）
		ツルゲーネフ	
	デモステネス	リンカーン	コブデン（政）
			フランクリン・ルーズベルト
			ジョーン・F・ケネディ
	テミストクレス	ハンニバル	成吉思汗
	フランシス・ベーコン	モンテスキュー（思想）	ベルグソン（哲）
		ベンサム（哲）	
		ジョン・ミル（経）	

デモクリトス	ベンジャミン・フランクリン	ローレンツ(物)
	ゲーリケ(物)	ブンゼン(化)
レーウェンフック(植)	ペルツェリウス(化)	ルーブナー(医)
	ファーブル(生物)	
ホジキン(医)		
エコノモ(医)		
ボッティチェリ(画)	コンスタンブル(画)	ローランサン(画)
	ダビッド(画)	
サリエル大天使		
アルテミス(ギリシャ神)	ジャンヌ・ダルク	
メアリ・ステュアート	エリザベス女王	
天照大神		
ヤショダラ姫		
パスツゥール(医)		
シュバイツァー		
ヒルデガード(医)	セルベト(医)	マイノット(医)
	ヨハネスミュラー(医)	マーフィー(医)

名	本体	分身	孫分身（分身の分身）
天使ダニエル	内村鑑三		
	オーム（物）		
	ベーリング（医）		
	ハーベイ（医）	トーマス・モーガン（植）	
	マサッチョ（画）	ティツィアーノ（画）	ベラスケス（画）
	アルクマン（音）	グルック（音）	ベルリオーズ（音）
天使カルエル	聖フランシスコ	カルバン（宗）	
	ニーチェ		
	関尹（かんいん）（思想）	周濂溪（しゅうれんけい）（思想）	
	チャールズ・ラム（文学）		
	ショーリアック（医）	ボーマン（医）	
	ブーサン（画）	ターナー（画）	
	ドナテロ（彫刻）		
	ラッソー（音）	ジャコモ・カリッシーミ（音）	ラフマニノフ（音）

天使バルエル	クリシッポス(哲)	シェリング(哲)
	ドルトン(化)	カール・ヤスパース(哲)
	ブラウン(物)	
	石川啄木	
	ホッペマ(画)	スーラ(画)
	ジュリオ・カッチーニ(音)	ハイドン
		チャイコフスキー
天使アルエル	アダム・スミス(経)	
	ボルテール(思想)	
	ツヴィングリ(人文)	
	李元昊(りげんこう)(政)	トマス・モア(人文)
		アクバル王
		グラント将軍
	ヴィルヘルム・グリム(弟)	
	宮沢賢治	
	ジュリオ・カッチーニ(音)	パーセル(音)
		セオドア・ルーズベルト
		沖田総司
		ガーシュイン(音)

名	本体	分身	孫分身（分身の分身）
天使サミュエル	チャールズ・ディッケンズ		
	ゴールドスミス（文学）		
	アラン（哲）		
	ヨハン・クルムス（医）	フィルヒョウ（医）	
	トーマス・タリス（音）	ウェーバー（音）	サン・サーンス（音）
	ファン・ダイク（画）	レイノルズ（画）	
天使セリエル	モンテーニュ（哲）		
	シャーロット・ブロンテ（文学）		
	ケクレ（化）		
	ナイチンゲール（医）		
	カリオペ（ギリシャ神、詩）	アンドレア・ガブリエリ（音）	
	マリアン・アンダーソン（音）		ラベル（音）
	マヘリヤ・ジャクソン（音）		

天使メイエル	聖マルグリット	アンナ・パブロワ(舞)
	天草四郎(宗)	
	アン・ブロンテ(文学)	
	ウラニア(ギリシャ神、天文)	コレルリ(音)
天使ルリエル	紫式部	
	マーガレット・ミッチェル	
	クレイオ(ギリシャ神、歴史)	モンテベルディ(音)
	コロー(画)	
天使リリエル	清少納言	
	バージニヤ・ウルフ(文学)	
	サッフォー(ギリシャ詩人)	エミリー・ディキンソン(詩)
	サラ・ベルナール(演劇)	
	ポリヒムニア(ギリシャ神、音)	パガニーニ(音)
天使サイエル	聖カトリーヌ	ニカノル(新約聖書)

	ビバルディ(音)
	マスネー(音)
	サラサーテ(音)

名	本体	分身	孫分身（分身の分身）
	エミリー・ブロンテ（文学）		
	イレーネ・キューリー（物）		
	メルポメネ（ギリシャ神、悲劇）	アルクマン（音・詩）	ベルディ（音）
天使マリエル	エリザベス一世	アン女王	ヴィクトリヤ女王
	ファラデー（数、物）		
	イサドラダンカン（舞）		
	エラト（ギリシャ神、音）	スカルラッティ（音）	プッチーニ（音）
	レナータ・ティバルディ（音）		

医＝医学、生理学、細菌学、物理医学
数＝数学
物＝物理学
化＝化学、生化学
植＝植物学、遺伝学
哲＝哲学　宗＝宗教

思想＝思想家、儒家、道家
経＝経済学　政＝政治家
詩＝詩人　画＝画家
音＝作曲家、歌手
舞＝舞踊家

注・分身、孫分身は必ずしも第一号ではなく、多くの転生の中で史上有名な人のみ選び、また、非常に有名な人物の専門分野は明記していません。表からも解ります通り、外国人の転生が主で、今世紀は特殊な人を除いては省いてあります。

大天使及び九次元以上及びその分身は一度に二人から三人の本体となる事が出来、他の人に合体し、働きかけている時は、一人の人には分身あるいは同次元の霊が合体し、守ります。また、意識の向上も計ります。年代割出し、専門分野の分類に時間が掛りましたので、天使の孫分身、分身は数少ないですがお許し下さい。

これらの分身、孫分身の一人、一人がまたそれぞれの転生の歴史（表）を作ってゆくのです。永遠の生命はいつもその人から始まり、合体霊の過去世とは単に魂の兄弟であるのみです。

表で前の人と後の人の没年と生年が重なる人がおりますが二人の人と両方合体する期間があって前の人が死ぬと次の人のみになるということです。表の後の方に前の人が死んでから後の人に合体というケースもあります。

（編著者）

イツ、ソ連、共産圏諸国では、ポーランドは神は無いものと断定し、排斥しているそうです。
そして動物霊崇拝、先祖などの死者崇拝がやたらに蔓延るのです。
末法の世だとの感を深めました。

解説

稚乃裕子

まずこの本を初めて手にされた方は、前後の事情が解らず少なからず戸惑われることと思われます。

はしがきではちょっと触れましたが、充分ではなく、本というものを書店で買い、読もうとされる方にも、はしがきから丁寧に読まれる方とそうでない方とあり、私などは読まないでいきなり本題から入っていく方なので、そういった方々、また『天国の扉』を読まれた方も、その時と事情が一変しておりますので、予備知識無しにいきなりミカエル大天使長の〝最後の審判〟と題した章から章を読み進め、そのうちになぜこの書が出されねばならなくなったかを理解して頂く、というのは少し無理ではないかとの御助言もあり、解説を書かせて頂くことにしました。解説というほどのものではあり

ませんが、この書を出すに至った身辺の事情その他を説明し、私なりの意見も述べてみたいと思います。これにより、『天国の扉』から『天国の証』と題するこの書へと移行することが、天上界を御紹介する意味において必然のものであり、これ無しには天国と呼ばれる世界を三次元との繋りにおいてまた私達の歴史あるいは心の中でそうだと解釈して来た三次元とは離れた理想の世界――を、それが本当はどこに位置するものか、またどう解釈すべきものか解らなくなる、ということが防げればという編者の希望もあります。

おおよそ従来の宗教書に表れる、あるいは歴史においてさえ取り扱われて来た神々、仏様方、天国と地獄、極楽、そういったものが、霊媒、巫女、と呼ばれる現代で言えば霊能者が特に職業化したもの、の口を通して断片的に、また、一冊の本になるという量的なもので三次元の世界に伝えられて来ました。それをさらに大きくすると、宗教家の形を通して、その一生を通じて、四次元以上の高き霊の世界に住む方々の意志や、何を人間に望んでいられるか、その時々に何をなしてゆけばよいか、あるいは未来はどうなるかといった予言のようなものも、法話や説教を通じて、霊言に近いものを通じて、私達に与えられ、曲りなりに私達は、個々の像から全体像と密接な関係があるがごとく、しかしはっきりと摑めぬままにそのような霊の世界に関する漠然とした知識を持っていました。

そして本を書けるなどと思わず、その野心もなかった私が、『天国の扉』という本を昨年末に出す破目になり、その中で、その興味を持ちつつも漠然と神秘のベールを降されたままであった霊の世界が、この私が縁があるとも思えなかった霊能力を昨年の二月末に天より与えられ、もちろん高橋信次先生の創始されたG会に間接的に接触し、その多くの御著書やテープにより天上の光に接して、その結果の恩恵であると信じていましたが、個々の像、全体像が、望むと望まざるとに関らず一度にすべてをはっきりと知らされ、そして見ることが出来た。それがどのように驚くべきものであり、また素晴らしく、恐ろしくもあったと、いろいろと私やこの書を手伝ってくれた高校生達が見聞きしたことを詳しく書いたのです。

なぜ私が望むと望まざるとに関らず、すべてをはっきりと知らされたか当初は解りませんでした。とにかく大天使の本体と知らされ、正法を説き、本を書くことを命ぜられたのです。高橋信次先生の伝えられた正法を、それは長い宗教史の中で分散した形で脈絡なく現われたもの、伝承されたものがこの二十世紀にこの方の手により初めて一つにまとめられた——それをより深く追求し、もっと奥底に隠されてあった天上界の真意と御計画、（あえて私は天上界と申します。なぜなら霊の世界とは言っても地獄ではなく、高きところに住める神々、至高神エホバ様すなわちエル・ランティ様の名で今

世紀には姿を現わされましたが、ならびにブッタ様、イエス様、モーセ様といった遙か手の届かぬところに在しました方々から、天使方、聖書を通して二、三の方の名しか知らなかった実は天使の長ミカエル様や、他の六人もおられる大天使方、の仲介を通して、これらすべての霊言は与えられ、次々と本にまとめずにはいられぬほど多くの事柄を知るに至ったからですが)、すなわちこの知的レベルの非常に高められた、完成の域に近づきつつあるごとく見える科学文明に支えられた今世紀に、人類が知るべきこととなすべきことを著書を通じて正しく伝える。信次先生亡き後、完遂せずに終られたその御使命を引続き人々に伝えなければならぬこと、を力説され、それが病身の私に出来得ることで、(病身である理由は『天国の扉』で書き、またこの書でも天上界により証されています)、私の定命のある限りその形で協力し、使命を果すことを命ぜられていました。

日々先きほど述べた高次元の方々はその使命を自信を持たぬ私に説かれました。ガブリエル大天使は私に使命感が足らぬとさえ、高校生達の前でお叱りになりました。

しかし決して平穏な日々の中にこれらのことを知らされた訳ではなく、いつもサタンの消えたと思えば現われる、執念と怨念の一語に尽きる妨害とくり返される襲撃を、解決しつつ、追い払い、反撃しつつこの一年が過ぎたのです。大天使方の御助力なしには出来ぬことではありましたが。

それは異次元的には、『天国の扉』で述べ尽したサタンとの戦い、のくり返しと、そしてミカエル様を始め大天使方の徹底的な守りによるものであり、これは言葉のやり取りと現象を身体で感じ、見聞きするもので、現実に物理的変化を体験致しましたし、それがいかに行なわれたかは、出来得れば数年後に、他の奇跡、心霊現象などと共に大天使方の御協力を得て、謎の解明として別の書物に著わす積りでおりますが、三次元、すなわち私の日常生活においては、諸々の出来事が凶兆であり、計画したことが必ず失敗し、努力が水の泡になるという、まるで悪霊の憑依下にことをなすがごとくに見えました。しかし同時に高次元よりの奇跡も日々多くあり、『天国の扉』を読まれた方から金粉が出たり、天上界が約束なさると、浪人四年目の受験生が私大に通らず、公立大にパスなさったり、天上界でお約束なさった通りに本がよく売れるようになって、また読者から多く感銘を受けた、感激した、探していた答えがすべて与えられた、などのお手紙を頂き、喜びが続くのです。

いつもミカエル大天使長とラファエル大天使が私を守って下さり、指示を受けたり、読者への返事に、私が疲れている時は、代りに口述して、手を添えて頂き、私は考えなくてもよい状態で自動筆記をさせて頂きました。ブッタ様やイエス様や、エル・ランティ様、高橋信次先生の時もありました。私は『天国の扉』を天上界の方々のお言葉や御計画をお伝えした書と考え、また実際その通りですの

で、読者にも出来るだけ直かに御人格に接して頂こうと、進んで口述の手紙もお願いし、私はさしずめ天上界の方々の秘書のような位置にあるなと思いつつ、その時がとても楽しかったのです。ミカエル様の口述で流麗な英語のお手紙を書かして頂いたこともあります。私も相当慣れている積りですが、外国人ではないのでやはり表現に迷い、もう一つ気に入りません。ところがこの時はスラスラと英米人の文体で、ミカエル様はさすがと感心致しました。ラファエル様もまた違った美しい字体で、楽しい英文の手紙を私宛に書いて下さいました。

しかし、私の自動筆記は面白い現象ですが、体力が無いというのか、疲れ切って頭も動かない時にお願いすると、いつもよく知っている文字でも書き違えるのです。疲れていても自分で書いた方が文を考えつつ書くので間違えません。こう書くとまた、催眠時の潜在意識が浮び上って書く、などと心理学関係の方に評されそうですが、はっきりと語りかける言葉、聞こえてくる言葉の説明がつけられません。私の出来ぬことをなさり、知らぬことを教えて下さる、学ばぬことを教えて下さる声の主の行方を追求しなければなりません。

見えるものを見、聞えるものを聞く状態で私はずっと霊の世界と交流してきました。高校生達も私の目の前でミカエル様やラファエル様、エル・ランティ様の光を当てられ、霊道を開きました。〝霊

道を開く〟と言いますが、三次元の人間は絶対に開く能力はありません。四次元の方が必ず助けて下さるか、あるいは四次元の方だけでなさるので、超能力とはひとえに四次元の力なのです。客観的にそういったことを教えて頂き、宗教史上の奇蹟に思いを馳せると、何かシンとしたものを感じます。

ブッタ様もイエス様もモーセ様も立派な方であった。四次元の助けを得てそして人を導く指導力と説得力と、叡知とを備えられ、天の言葉にしたがい、己れを律して使命を果された。それにしたがう弟子達も立派であった。語られた言葉も行ないも後々の人に崇め、慕われた。（メシヤ信仰的考えはいけないとは言いながらも私は、それがその方に価いするものならば、立派な方を立派だ、偉大な方を偉大だ、と思い、尊敬すべき人を尊敬する心を決して失なってはならないと思います。それが己れの価値基準を知ることにもなり、他を知ることにも繋ると思うのです。メシヤ信仰と個人の価値を切離して考えることを天上界は助言なさいます）。にも関らず、悪魔はいつの時代にも跳梁し、光と影のように天国と地獄があった。そしてイエス様の去られた後も末法の世であった。

何がこの末法の世を今世紀に至るまで引きずってきたか。それは光の大指導霊がこのような偉大な方々を悟らしめるため合体され、世を救わんとされた。その背後に常にサタンの黒い影が忍びより、人々のなすこと、思うこと、語ることに陰に陽に働きかけ、蝙蝠の、禿鷹の不吉な翼を広げて歩いた

という伝説のような言い伝えが本当のものであったのでしょう。旧約聖書の中のあらゆる残酷な史実、歴史の中の目をおおう残虐な記録。すべてサタンの跳梁としか思えません。

それを思いつつ、天上界の方々が私に口述され、一人一人の思いと真実をこの書に託され、私としては信じ難い事実、何度お伺いしても同じお答えが返ってくるこの天上界の真の姿を、私はそのごとく、語られるまま述べられるままに秘書の気持で筆記を致しました。

そしてその結果、このような人間として御理解申し上げねば、信じ得ない世界が展開されました。読者の皆様に取っても同じ、いえ、私以上の問題提起であるでしょう。しかし真実を求められるままに書物にし、三次元の世界に御紹介することは病身の私に出来る唯一の義務として、使命として、奇跡を語ると同じく一人でも多くの方に読んで頂こうと思うのです。

私見にはなりますが、私個人の理解の仕方はこのようなものでした。

ルシファーが天使ルシエルの合体者であり、サタンであったこと。そして私がお二人と語り、いえルシファーと語ったのでしょう。天使ルシエルはサタンではありませんでした。このお二人は天上界に上ることが出来た。天国の高次元の合体者からサタンが出た。このことを中心に円を描くと、同じ次元を円周として、この円の中心に至る空間すなわち円の面積上に、可能性が幾らでも浮かび上りま

す。（これは九層の心――『天国の扉』参照――とは関係がありません。私の比喩です）。ただしこの円内に含まれる要素はあくまで人間でなければなりません。その中心点にコンパスを据え、円を描いたのです。高次元の霊も三次元の人間もサタンも、本質的には人間であることが共通項でなければなりません。でなければ高次元にサタンがいたということと、高次元の霊の合体者がサタンになったということと、天上界の霊の悪霊化というこの三つの現象が理解し得ないと思うのです。

これは私の推測の域を出ませんが、三次元の場合、二種類、いえ、いろいろな種類の性格や人格がありますが、それらが一つの社会共同体を形成し、その中に善玉悪玉がいるのが通例でした。天上界にも同じあるいは似た要素があるとすると、〝悪に強ければ善にも強し〟という諺とは逆に、天上界の強いエネルギーが与えられると、それが悪に転じた場合兇悪なサタンになり得る。サタンとは能力ある悪霊、悪の魂なのですから。

三次元ほど玉石混淆ではなくとも、質の良い人間社会が天国で、神性と獣性を備えた人間が地上を占め、質の悪い人間の集団が地獄で、そして天上の霊と同じく、能力を持つサタンはどこにでも現われることが出来る。天上界とサタンとの戦いは空でも地上でもどこでも行なわれ得る。ただしこれは天国を閉め出されたサタンの場合だけですが。

いくら類推していっても、高次元にサタンがいた、そして黙認されていたということはただ一つ、二章のエル・ランティ様の証によって理解するしかありませんでした。

それだからと言って、私は天国を地面に引きずり降す気持は毛頭ありません。立派な方々が殆んどで、その中に厳しく律する法があり、死後にその中に入れてもらえなければ、私の嫌いな種類の人々の霊と一緒にいなければならない。もちろんそのためだけで天上界へ入れてもらいたいと思うのではありませんが。人間の責任と義務において、なさねばならぬことをしなければ質の良い人間社会に受け入れてもらえない、というのは素晴らしいことだと思います。

いかなる努力が必要であってもそうしたいと思います。なぜなら今まで過して来た私自身の人生と、霊道が開いた後の一年間の一喜一憂の日々を考えると、サタンと呼ばれる霊およびそれに協力した悪霊と、天上界からのお知らせによればサタンに唆（そそ）かされて私の失脚を計ろうとした方々は決して好きになれないのです。（これは人間として当り前だと思います）。

サタンが天上界と地上を縦横に駆けめぐったことについては、事実であればそう受け取るしか仕方のないことと思います。そして消滅された後二ヵ月余りは同じ状態で身辺の状況が低迷しましたが、——信次先生のことは私は心から尊敬し、親近感を強く持っていましたから非常に残念に思います。

――攻撃を受けるということはその後は絶対になくなり、読者の依頼の憑依霊の除去や、病いの癒しが大天使方が約束なさったとおりに実現してゆくのです。それが今の私に取っては何よりの一番の喜びです。

そして霊界と交流し、いろいろな知識を得て一つ素晴らしく思えることは、宇宙が全能の神一人の手に依って創造されたという宗教的伝説が、天上界の方々の、まずミカエル大天使長、七月からはエホバ様と代られ新大王になられる方により昨年夏に証されて、天国も地獄も生物の進化の結果、すなわち人類が発生して後に死者の魂が集まり、構成されて出来たということです。私は唯一神による宇宙創造論にはキリスト教に在籍中から賛成出来ませんでした。そこだけは目をつむり、他の良きことを吸収しようと努めたのです。内村鑑三氏の無教会派の理論も好きでした。賀川豊彦氏の〝イエスは私を捕え給うた〟という言葉も実感として味わったことがたびたびあります。シュバイツァー博士は私の最も尊敬すべき方です。マリヤ様にもお会いしたい。変貌したサタンおよびその配下との闘いで多くの方が亡くなられたと聞きますが、そういった私の尊敬すべき方々、印象に残る方々がまだ天上界に残っていて下さるなら、と心より望んでおります。

くり返しますが、恐らくこれは史上初の試みであると思います。霊能者である私が私の意識で書く

のではなく、あくまで天上界の方々が一人一人口述されて各章各節が出来上るのが私の編纂の書です。（ある意味において心霊科学に供するものかも知れません）。なぜならば、私の意見など誰にでもどのような形でも発表出来ますが、天上界の方々は今まで霊能者の口を通してしか語られなかった。そのゆえか長い意見の発表、たとえば本を書くこと、手紙を書くことなどありませんでしたし、このような立派な方々と永遠の生命の証としてその生ける人格と接し、語られることを正しく伝えるためには、その場を作って差し上げることと思い、私はいつも秘書として、口述されることを筆記し、三次元の方々に提出するのです。可能ならばミカエル著としたり、ラファエル著とした本が出せれば、と思いますが、それは無理なようで、そういった事情を嚙み合せ、この驚くべき内容の天上界の証を求められるままに私の義務として世に出すことにしたのです。

それともう一つの天上より与えられたこの書を出さねばならぬという理由は、亡くなられた、すなわちこの宇宙に霊体としては存在しない著名な方のお名前を詐称して悪霊が跳梁するのを防ぐためと伺いました。官名、人名詐称は消滅につながることは、霊の世界では徹底されているそうです。

全世界に大きな波紋を呼ぶこととは思いますが、金粉や銀粉は菩薩界以上の方に出ることであり、正法を正法として説くのは如来界は少なく、太陽界以上と聞きますので、天上界の高次元から出た御

依頼であることは間違いないと思い、大変なことだと思いつつ一冊にまとめて、こうした形となりました。『天国の扉』も同じですが、あくまで霊言の書としてお読み下されば幸いと存じます。

また両書とも全篇を通じGLAおよびその関係者が現われますのは、正法を伝える光の大指導霊の本体がGLA創始者である高橋信次先生であり、天上界の方々とサタンとの複雑な争闘が深い関りを持っているからです。サタンが永遠に滅びた。その恐ろしいほどの末法の世であったからこそ異例の事件が続出し、展開した、とそう私は見ています。

サタンはすべてを知り、巧妙に天上界の計画の裏をかき、挫折せしめました。モーセ様の時もイエス様の時もそうでしたが、人類の救世主が現われると定っていつもサタンが試みを与える期間がある。それがイエス様の十字架上の死が早すぎたという言い伝えと、この書の〝なぜそうなったか？〟を解く鍵となるかも知れません。ブッタ様もイエス様もモーセ様もこの滅びたベー・エルデのサタン夫婦に関し、深く沈黙を守っていられる。そこにも鍵があります――。そして不思議なまでのG会の囮の団体作り。本当に誰がどの本体であるか解らぬような複雑な入れ替り――なども恐らくそうでしょう。

〝最後の審判〟と題する一章から三章までは、聖書の黙示録が、今世紀において日本に天上界の高

次元があったがために、日本人がそれに最初に関りを持った。（しかし第八章正法の歴史で書きましたごとく、日本民族はユダヤの孫であるならば、やはり日本において聖書の預言が成就されたということに、不思議な運命の巡り合せを知り、感無量の思いがあるのです）。とそう解釈して下さればよいのではないでしょうか。

何よりもの喜びは、四章から始まる〝希望の星〟の章で、今世紀のモーセ様の転生と、イエス様の転生なさる方の二十一世紀最初のお働きが約束されたことです。高橋信次先生を惜しむ一方、この方々に思いを託し、天上よりの救いを再び証するこの方々の御活躍により、世界は地獄から神の国へと最後の段を上っていって欲しいと望んで止みません。

宇宙の崩壊と形成を思う時、物質の生成と変容を思う時、死の絶望は生の希望へと変るのではないでしょうか。

「天国シリーズ」推薦の言葉並びに紹介

国士館大学教授　岩間文彌

一九七七年（昭和五二年）以来、刊行中・千乃裕子編著の、以下の「天国シリーズ」および機関誌『JI』（月刊）その他の出版物は、神とは何か霊魂とは何か、永遠の生命とは、宗教とは何か、そして人とは何かという、人々の最大関心事に、かつてなかった合理的、科学的な解釈と、明解な解答を与え、人々を大いに啓発するものでありましたため、読者の方々から連日、賛嘆と賛同の手紙が殺到し、現代の聖書、仏典とも言われて、大好評を博し、各種新聞紙上にも広告されているものです。また同時にこの書の未知なる領域への真摯な科学者達に驚きの目を以て迎え入れられております。自然破壊や無益な戦争によって、人類の危機が叫ばれ、教育環境の悪化によって、次代を担う青少年の行手に不安がもたれる今日、これらの書は必ずや、この世に大きな光を投じ、教育上すばらしい効果を与えるものと信じてやみません。

ご家庭や職場でいつも座右においておきたい真理の書として、最適と考えますので、ここに推薦いたします。

『天国の扉――未来の幸せをめざして』

本書は、人類が大宇宙、大自然の法則に則って自然発生し、進化してきたものとする、科学で明ら

かにされた事実に基づき、人間は生を戴えたのち、生体の構成要素である素粒子と宇宙エネルギーで霊体が構成され、集まって霊の世界を作ること、創造神という特定の神は無く、神といわれる方々も実は、かつては地上に生を享けて、人類の師と崇めるべき偉大な人々が霊となったのちに、高次元の世界に上り、地上の世界を指導してきた、人格においてその偉業において、真に神と言われるべき方々であることを証し、さらに、科学と宗教とは、本質において一致するものであることを示そうとする啓蒙の書です。

この書において、かつて、ジャンヌ・ダルクの守護神であり、新旧約聖書にも見られるミカエル、ガブリエル等の大天使方、モーセ、ブッタ、イエスと呼ばれ、神、仏、救世主と言われた方々が、直接著者の霊能力を通じてわれわれに語りかけ、人類史の発端と天国の真相をはじめて人々に公表し、理想世界実現への努力を改めて呼びかけ、その行手をはばむ迷信、妄信、狂信の類を排除せんとしております。

『天国の証——最後の審判より希望の星へ』

大自然に従ってのみ生き続け、平和な社会を維持しうる人類が、その法を踏みはずし、人道（中道・八正道など）に反する、非道、無法の生活を繰り返すとき、あるいは公害を作り出し、あるいは悲惨な戦争を行い、自然界を破壊し、文明を歪める。もし、このまま無軌道な生活を人類が続けるにまかせれば、やがては、大自然・宇宙の中で生存できなくなり、ひたすら自滅の道をたどるほかはない

でしょう。

人類は今日、その瀬戸際まで来たのであり、もうこれ以上、害を流し続ける我執、我欲に満ちた人や、悪霊の跳梁に地球を委ねておけば、罪の無い善良な人々や生物が、共に滅びねばならない深刻な事態にさしかかったのです。それゆえ遂にここにおいて、その事態を避けるべく、聖書等に予言された「最後の審判」が行われる決定が下され、すべての人類が、これまでの行いによって、裁かれるに至ったその過程を、前記『天国の扉』で呼びかけた高次元の霊たちが、本書でつまびらかに証しております。それと共に一九七八年七月一日、天上界における至高神即ち王位の交替（ヤハウェ＝ヤーウェ＝エホバから元大天使の長ミカエルへ）と他の方々の階位の昇格等も公表されています。

そしてこの裁きは、同時に、再びこの地上に地獄を作ることなく、たちこめていた暗雲をはらい、地球を平和と進歩に満ちた希望の星とするものであることが示されています。本書はまた、豊富な絵と詩を織りまぜて、美しい天国の姿を紹介するものです。

『天国の光の下に――エクソシズム（悪魔払い）からアトランティス大陸の解明』

上記二書に感動啓発され、喚起された人々が、如何に生きるべきかを悟り、正道を実践することによって得た無上の悦びの体験を、あるいは、触発されて生じた研究を寄稿・編集したのが本書で、日々の歓びあふれる生活からにじみ出た珠玉の如き正法随想、編者の下に現われ、語りかけられた神々によって、悪霊による憑依の生活から救われた一家の驚くべき体験記、一青年の宗派遍歴を通して知

った迷信・妄信の恐ろしさと、正しき法に触れて得た、すばらしい霊的体験への言及、化学者による、環境・公害問題を中心にした、世を憂う警告の文、教育学者による、今話題の中心になっていますアトランティス大陸は実際は何処に在ったかといった、歴史的考証に〈扉〉〈証〉の大天使方の御助言が与えられたもの、最後に編者による、生命の起源や霊能力、霊の世界の実態に論究した、正法いわゆる神の法の科学的分析及び解明が網羅されている内容豊かな書です。

『天の奇蹟――聖書の奇蹟と邂逅してその神秘を解明』上・中・下巻

本書は西洋文明の淵源として、今世界に有形無形の影響を与え続けて来ましたバイブルが、如何にして成立したかに、歴史・考古学的考証を与えると共に各所に、記されている奇蹟現象は、はたして何であり、どのようにしてなされたものであるかを、直接に関与された生ける神ヤハウェ＝ヤーウェ＝エホバ、現在は高位におられるが、当時聖霊あるいは大天使と呼ばれてきた方々の証言を得つつ、これに物理化学的な解明を与え、聖書の奇蹟や予言の真相を明らかにして識者に問う問題作です。また、これによって稚乃裕子様の下に現われた高次元の霊が、聖書に記述された神、あるいは大天使と崇められてきた方々と同一であることが、疑問の余地なく論証され、第一から第四巻に至る天国シリーズに紹介される神々の啓示と法の信憑性を高め、末法とそれを救う人類の努力への再認識と自覚を促すものとなることが、立証されています。

翻訳出版について

この本を読まれたかたで、説かれている理論に共鳴され、ぜひ外国の人にも紹介してみようと思われるかたは、しかるべき専門家に頼まれて、英語・フランス語・ドイツ語・デンマーク語・インド語など、どの国の言語にでも翻訳されて、ご自由に海外出版なさって下さい。

ただし版権の問題などありますので、その旨、著者（または、ジェイ・アイ）までご連絡下さい。また、外国人のお友達で日本語を研究していられるかたに、この本をどしどし紹介して頂いて結構です。

著　者

現代の聖書、仏典と大好評の　ベスト・アンド・ロングセラー

稚乃裕子（千乃改め）天国シリーズ

未来の幸せをめざして

天国の扉

再臨の救い主達（七大天使、モーセ、ブッタ、イエス）による最初の正式な証言集。

ミカエル大天使の真相を明かす衝撃の書！

神とは、霊魂とは何かを徹底的に解明し、天国の実在を証明。

定価一、二四〇円（税込）送料三一〇円

シリーズ　第一巻

天上界の真実と証をこめて

シリーズ　第二巻

最後の審判より希望の星へ

天国の証

『天国の扉』に続いて、再臨の救い主達による第二回目の証言集。人類の救いに至る最後の審判に対して、ミカエル、ガブリエル等、天使達やエホバのメッセージ。進化論に基き、宗教と自然科学の一致を立証！　天上の霊達の作詞やカラー絵も多数。

定価一、二四〇円（税込）送料三一〇円

エクソシズムから
アトランティス大陸の解明

天国の光の下に

天国シリーズ第一作、第二作に喚起された人達の宗教遍歴、憑依体験、奇跡の体験寄稿集。編者による霊能、霊界の科学的分析に加えて、アトランティス大陸の実証などを網羅した傑作。

定価一、三四〇円（税込）送料三一〇円

シリーズ　第三巻

聖書の奇蹟とその神秘

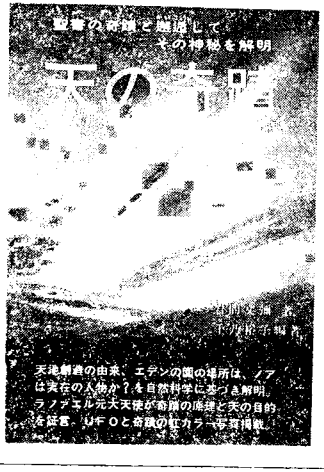
をすらすらと解明

天の奇蹟 上巻

シリーズ第四巻

天地創造の由来、エデンの園の場所は、ノアは実在の人物か？を自然科学に基づき解明。ラファエル元大天使が奇蹟の原理と天の目的を証言。UFOと奇蹟の虹カラー写真掲載

定価一、〇三〇円（税込）送料三一〇円



諸説の真偽を篩いわけ

旧約聖書の奇蹟とその謎を解明する

シリーズ第四巻

天の奇蹟

中巻

ヘブライ民族の故郷ハランを旅立つアブラハムは実在の人物か？モーセは民60万をエジプトから連れ出したのか？四十年間の荒野放浪は事実か？種々の奇蹟は？モーセは実際は何歳で死んだか？など多くの謎を天の示唆を得て初めて明快に解く。トリノの聖骸布の真実もミカエル様他元大天使により余すことなく公表。定価1,240円（税込）送料310円

シリーズ第四巻完結！

イエス・キリストの生涯と天の奇蹟の真意を余すところなく証す

天の奇蹟　下巻

聖書の〝黙示文書〟は何を意味するのか？ゾロアスターなる人物とその使命は？従来の聖書観にピリオドを打ち、新約聖書成立の背景からハルマゲドンに至る数々の天の足跡を、驚くべき真実をもってここに証する書！

（上）・（中）に続く完結編！

定価一、五五〇円　送料三一〇円

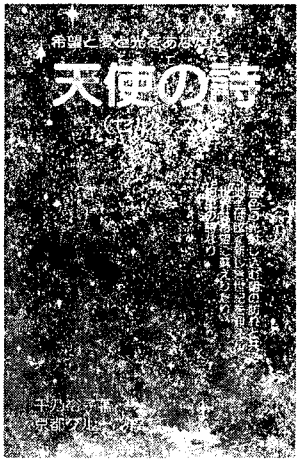
次々とベストセラーの作品

セルメスシリーズ第一巻——

希望と愛と光をあなたに

天使の詩（うた）（セルメス）

新書判



人類が求め続けてきたユートピアへ！　人類滅亡の危機の時代に今どう生きるべきか？天上より三次元の人々へ警鐘、希望あふれる天使の詩。悩めるものへ希望と愛と光をもたらす。

定価七〇〇円（税込）送料三一〇円

次々とベストセラー入り
セルメスシリーズ第二巻
光に生きる人生をあなたに――

天使の冠（かんむり）（エルフォイド）新書判

神様ってどんな方？　悪魔って本当にいるの？　人はどう生きれば良いのでしょう？　誰もが一度は突き当たる問いに多角的にアプローチ！　悪魔の憑依から救われ、神を見た人々の手記、アトランティスの謎の解明、正法概説を含め現代の人々に光に生きる人生をもたらします。

定価八一〇円（税込）送料三一〇円

またもやベストセラー入り

セルメスシリーズ　第三巻

☆　光、光、光の世界をあなたに——　☆

☆

天使の群（むれ）（エルバーラム）新書判

誰もが夢見ずにはいられない理想社会（ユートピア）。そこに至る道はいつの時代でも遠く険しい。高次元の天上界が今はじめて明かす真実の数々——イエス・キリストの復活とトリノの聖衣の謎他。大天使方が人類に贈る真理と希望のメッセージ集!!

☆

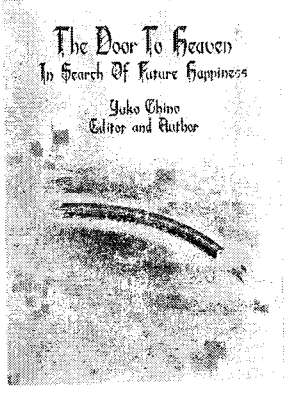
定価八一〇円（税込）送料三一〇円

☆

大好評の稚乃裕子天国シリーズ

英訳版ついに発刊！第一巻　天国の扉

The Door To Heaven



Contents:
What is "God" - "Spirit" - "Heaven"? Do Heaven and Hell really exist? In terms of science, this book replies to all these questions. It also concurs with the theory of evolution. Other established ideas on religion are attacked and clarified in relation to science.

A5判上製美本

英訳版『天国の扉』は美しい美術装幀で、外国の友人、知人へのシリーズ紹介、贈り物に最適です。直訳でなく工夫して訳してあるので、英語を学ばれる方にも読み易くなっています。

定価¥2840（税込）$12.50

Jei-Ai Publishing Co.,Ltd.
P.O. Box 10, Koganei, Tokyo 184, Japan
HORKOM International Corp.
2020 Pennsylvania Ave., N.W. #210
Washington, DC20006, U.S.A.

☆セルメスシリーズ　第6巻☆

天は愛と義と智に満ちた人々のためにある

エルカロム（天使の角笛）

新書判

希望の胸をふくらませ、未来をみつめる人類のために、今、天は時の流れを変える角笛をならす！

心の分子レベルでの物理化学的分析、天上界と古代日本に関る考察他を加え、新たな真実を発表。

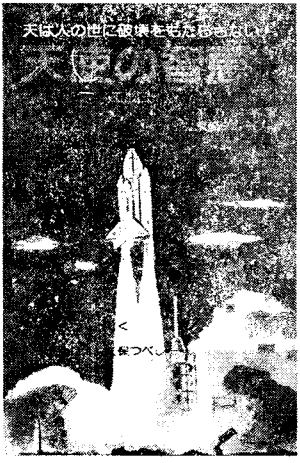
定価九一〇円（税込）送料三一〇円

セルメスシリーズ第五巻

天は人の世に破壊をもたらさない——

天使の智恵（エルロイ）

新書判



定価九一〇円（税込）送料三一〇円

未来へ向う若者たち、未来を案じる大人たち、何も知らない子供たちへ愛と希望と勇気を今ここに贈る——

21世紀へ向けてのエネルギー問題、自然健康法、今話題の〝聖骸布〟の実験成果、正法と人類と進化に関する物ほか、卓越した内容を網羅。

☆ セルメスシリーズ第4弾!!

光、光、光、の世界をあなたに—

☆

続天使の群（むれ）

新書判

（続エルバーラム）

人々よ、悪に魂を委ねんと志し居るか。神の声を聞けと天の使いは呼びかけ給う。自ら伸べられし手をつかみ救われよと——21世紀を目前にし、人類に迫る核戦争、共産主義の恐怖、しのびよる環境破壊。人々は愛を捨て、希望を失い、闇をさまようのみ……。

☆

☆

☆

☆

定価九一〇円（税込）送料三一〇円

現象テープリスト(2)

No.28	自己犠牲について(ミカエル様) S.55.9.14 現象 土田展子
No.29	イエス様クリスマスメッセージ「愛と信仰」 S.55.12.21 現象 土田展子
No.30	啓蒙運動としての現正法 S.56.4.12 現象 岩間文彌
No.31	天上界と質疑応答(ガブリエル様) S.56.9.10 現象 土田展子
No.32	物の見方について(ラファエル様) S.56.9.15 現象 土田展子
No.33	慈悲について(ガブリエル様) S.56.9.13 現象 土田展子
No.34	霊について(ミカエル様) 霊能と天上界高次元の霊について(ラファエル様) S.56.10.18 現象 稚乃裕子 土田展子
No.35	クリスマス・メッセージ(イエス様 ラファエル様 ガブリエル様 ミカエル様) S.56.12.20 現象 土田展子 谷田三枝 金鏞漢
No.36	消滅について(ガブリエル様) S.56.12.27 現象 土田展子
No.37	イエス様 ウリエル様 サリエル様 パスエル様 ラグエル様 メッセージ S.57.1.10 現象 土田展子 谷田三枝
No.38	ユートピアについて(ウリエル様)ガブリエル様メッセージ S.57.1.17 現象 土田展子 谷田三枝
No.39	進化の歩みをたどりて S.58.7.10 講師 岩間文彌
No.40	ガブリエル様 イエス様 メッセージ S.58.7.10 現象 谷田三枝
No.41～No.44	欠 番
No.45	天の奇蹟・下巻 発刊によせて (ラファエル様) S.62.7.5 現象 金鏞漢 稚乃裕子
No.46	「〝天の奇蹟〟完結にあたって」 「天上界と古代日本」 S.62.7.5 講師 岩間文彌 西澤徹彦

テープ価格は1本1,000円 (送料は別、送料は切手で後払いも可)

〒184 東京都小金井市中町4-14-17
武蔵小金井スカイハイツ202号 電話0423-83-3533(代表)
ジェイ・アイ現象テープ係まで

現象テープリスト(1)

No.1～No.3	欠　番	
No.4	正法基礎講座「ミカエル様の法話」	S.52.6.23 現象 土田展子
No.5	正法基礎講座「明るい心、暗い心」	S.52.7.18 講師 椎乃裕子
No.6	正法基礎講座「高校生クラス」	S.52.8.1 講師 米本　明
No.7	正法講座　「『天国の扉』出版お祝いの言葉と共に」(ミカエル様、イエス様)	S.52.12.1 現象 土田展子
No.8	正法講座(イエス様、ミカエル様)	S.52.12.14 現象 土田展子
No.9	正法改正理論	S.53.3.21 解説 椎乃裕子
No.10	正法を学ぶ人のためにI「後継者について」(ミカエル様)	S.53.7.10 現象 椎乃裕子 土田展子
No.11	正法を学ぶ人のためにII(ミカエル様、イエス様)	S.53.10.16 現象 椎乃裕子
No.12	正法を学ぶ人のためにIII(ミカエル様)	S.54.2.1 現象 椎乃裕子
	「メッセージ」(ブッダ様)	S.53.10.1 現象 土田展子
No.13	心の働き	S.54.3.17 講師 岩間文彌
No.14	正法の歩み―ギリシャ時代	S.54.6.3 講師 岩間文彌
No.15	身体と霊体の成り立ち	S.54.9.2 講師 岩間文彌
No.16	ミカエル様メッセージ ウリエル様 正法講座	S.54.11.4 現象 土田展子
No.17	イエス様クリスマス・メッセージ	S.54.12.23 現象 土田展子
No.18	「魂の研磨」について(ガブリエル様)	S.55.2.10 現象 土田展子
No.19	「宗教と人間の関係」(ガブリエル様)	S.55.3.9 現象 土田展子
No.20	再び愛について(ミカエル様)	S.55.4.6 現象 土田展子
No.21	原罪とは(ラファエル様)	S.55.4.13 現象 土田展子
No.22	現正法と転生輪廻	S.55.5.4 講師 岩間文彌
No.23	A.心の美は(ガブリエル様) B.「天上界よりの通信」1977年の約束(ミカエル様) GLA関西新年講演会(於東大阪市民会館)より抜粋	S.55.5.11 現象 土田展子
No.24	第1回慈悲と愛協会総会(ミカエル様メッセージ)	S.55.5.18 現象 土田展子
No.25	天国語の語源について(ラファエル様) 質疑応答	S.55.6.29 現象 土田展子
No.26	良き人間関係について(ミカエル様) 質疑応答	S.55.8.10 現象 土田展子
No.27	正法流布について(ガブリエル様) 質疑応答	S.55.8.11 現象 土田展子

古代日本歌謡に歌われる再臨の救い主達——

古代日本と七大天使　神代編

西澤徹彦著／稚乃裕子監修

神国日本のルーツを科学的に証す第一弾！古代日本歌謡、和歌がヘブライ語の意味を持つ事を発見し訳出。天を司る七大天使をはじめ神ヤハウェ（エル・ランティ）、イエス・キリスト、モーセ、ブッタ（釈迦）と日本国との関わり、日本の存在すべき意味を論証。

隠蔽された数々の真実を明らかにし謎の古代史説にピリオドを打つ。

定価二、五八〇円（税込）送料三一〇円

上製本　定価三、六一〇円（税込）送料三一〇円

☆人は理性と真理と希望につらなる
未来を求めてやまない――

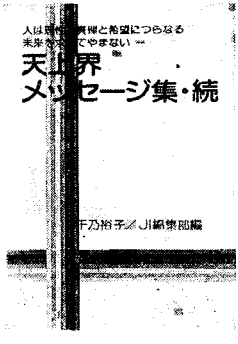
天上界メッセージ集・続

稚乃裕子／JI編集部編

定価一、二四〇円
（税込）
送料三一〇円

〝神と人類の虹のかけ橋〟――人類の永き歴史を通じ、この地球をユートピアにする為に、モーセをブッダ（釈迦）をイエス・キリストをそして、多くの聖人・賢者を教え導いてこられた天上界高次元の方々の偉業のメッセージ。大反響を呼んだ『天上界メッセージ集』に続き天上語によるメッセージ、天使の詩を含めて珠玉のメッセージを一挙収録！

A5判



☆人は理性と真理と希望につらなる

未来を求めてやまない——

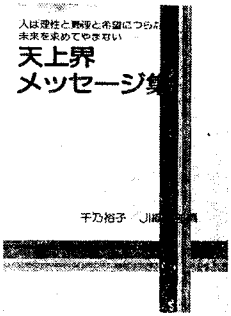
天上界メッセージ集

稚乃裕子／JI編集部編

21世紀に至る人の真の望みは何であろうか？——世の滅亡を計る悪魔の思想を絶対の真理と仰いではならない。世の平和を虚しいものにしてはならない。「最後の審判」という大いなる法の裁き続行の下で現天上界が語る数々のメッセージ。美しい地球を死の星とするか、未来へ続く希望の星とするか、今、読者に本書をもって問う！

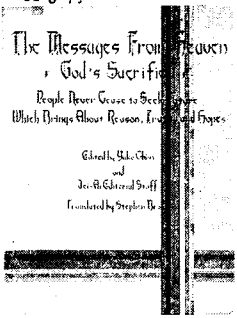
定価一、二四〇円（税込）〒310円

A5判



英訳版も発売！

A5判



定価二、三七〇円（税込）〒310円

日本を超え近隣アジアの国々へ—
日本語版・英語版に続く韓国語版・
中国語版の堂々の発刊です。

未來의 幸福을 찾아서

天国의門

稚乃裕子著
金鏞漢譯

A 5判
定価1,240円（税込）
（送料別）

＊中国語版＊＊

「天國之扉」A 5判

定価1,240円（税込）
（送料別）

「天國之見證」A 5判

定価1,240円（税込）
（送料別）

次々と発刊される予定の各国語版を
御紹介致します。

＊英訳版シリーズ第４弾！—〝セルメス（天使の詩）〞

★SERMES SERIES VOL. 1★

SERMES

(The Poems of The Angels)

Edited by Yuko Chino and Kyoto Group

The miracle of resurrection was carried quite scientifically by the power of Archangels and Angels. The Holy Shroud of Turin is the only proof of the miracle. A physiotherapist solved the enigma as a human approach with physicochemical experimental data, which agreed completely with Michael's explanation.

Paperback US$ 7.50 Publication due February, 1984!

英訳版天国シリーズに次ぐ英訳版
セルメスシリーズ　Ａ５判
定価1,810円（税込）送料310円

大好評の稚乃裕子天国シリーズ

英訳版第三巻 天国の光の下に

UNDER THE LIGHT OF HEAVEN

From Exorcism To The Explication Of Atlantis

What sort of personality is God? Is there really a devil? How should people live? An approach from all angles to these problems that everyone faces at some time or other! Diaries of people who were saved from the possession of the devil and who saw God.

Explication of the enigma of Atlantis. The basic principles of the *Shoko*. All of these are presented here to bring a life of light to the people of today.

A5判上製美本

ついに英訳版第三作目『天国の光の下に』が出ました！ジャンヌ・ダルクあり，トリノの聖骸布の章もあり，興味深い編集と内容です。 定価¥3380(税込) $14.95
(ペーパーバック 定価¥1810(税込) $7.95)

Jei-Ai Publishing Co., Ltd.
P.O. Box 10, Koganei, Tokyo 184, Japan
HORKOM International Corp.
2020 Pennsylvania Ave., N.W. #210
Washington, DC20006, U.S.A.

大好評の稚乃裕子天国シリーズ

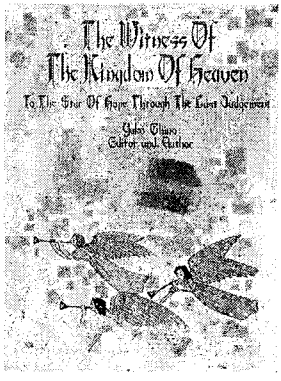
英訳版第二巻　天国の証

To the Star of Hope through the Last Judgement

THE WITNESS OF THE KINGDOM OF HEAVEN

This book sends you the Truths of Goodness, Justice and How to Live in the modern delusive society. The Messages from Jesus and the Angels on the Last Judgement; also proves the Concurrence of Religion and Natural Science.

Photos of the miraculous rainbows around the sun and the moon are illustrated.



「天国の扉」を英訳でお読みになりいかがでしたか。ひきつづきここに「天国の証」英訳版をおとどけ致します。美しい装幀、さし絵、そして〝扉〟以降に明かされた天の真実をぜひ英訳でと望まれる声にお応えした稚乃裕子著英訳版天国シリーズ第二弾！

定価¥3380(税込)　$14.95

Jei-Ai Publishing Co., Ltd.
P.O. Box 10, Koganei, Tokyo 184, Japan
Tel: 0423-83-3533/Transfer Account No. 1-167145 Tokyo